

新約：とある戦士達の 黙示録

一条和馬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——我らの知る。しかし、我らのいる地球とは少し次元の軸が違う地球では、約半世紀前に旧日本、学園都市を中心に起きた三度目の世界大戦と、20年ほど前から現れた謎の集合生命体、通称『アラガミ』による被害から60億近くいた人口は今やその数を十分の一以下にまで数を減らしていた。

更に、一縷の望みを賭けて赤道上空の成層圏を囲うように作られた巨大衛星軌道基地『オービタルリング』はアラガミの襲撃により移動手段である地上の軌道エレベーターのほとんどを破壊され、追い打ちをかける様に宇宙の彼方から飛来した謎の生命体『ラ

ダム』によつてオービタルリングの全機能が占領されてしまう。

人類の宇宙脱出への希望は今や、悪魔の巢窟と変わり果ててしまった。

アラガミにとラダムという二つの脅威により、大地はえぐられ、都市は崩壊し、地球は徐々に荒廃していったのである。

しかし、人類は未だ卑劣な侵略者達に対抗する術を失つていなかった。

オービタルリングの一件で甚大な経済的打撃を受けつつも、唯一世界各国に展開し対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』を保有する『フェンリル』と、その前身組織たる『学園都市』の生き残りである超能力者達。

第三次大戦の折、イギリス、ロシア、ローマなどでその存在が公に発表された『魔術師』達。

大戦後、極東地区の戦火で生まれた『ブラックスポット』の過酷な環境で生まれた、ごく一部の不思議な力を持つ者たち『ニードレス』。

ラダムに対抗する外宇宙開発機構内部組織『スペーススナイツ』に所属する謎の戦士『テッカマンブレード』。

そして、異なる世界、『トランスヴァール皇国』の『ギャラクシーエンジェル隊』と『時空管理局』の『機動六課』。

退廃と絶望に包まれた地球を舞台に、歪められた運命によつて集められた戦士たちの戦いが今、始まる!!

~~~~~

11年前に別サイトで完結した拙作 (<https://syosetu.org/novel/200626/>) を発掘して移転させたのですが、折角なのでリメイクしてみました。よろしくお願いします。

☆参戦作品

・GOD EATER

・NEEDLES

・とある魔術の禁書目録シリーズ

- ・魔法少女リリカルなのはシリーズ
- ・宇宙の騎士テツカマンブレード
- ・ギャラクシーエンジェル

+

$\alpha$

# 目次

く序章く

|                    |    |
|--------------------|----|
| 崩れた街のアミタ (1)       | 1  |
| 崩れた街のアミタ (2)       | 13 |
| 崩れた街のアミタ (3)       | 28 |
| 神喰らう者と死神の聖剣 (1)    |    |
| 33 神喰らう者と死神の聖剣 (2) |    |
| 47 神喰らう者と死神の聖剣 (3) |    |
| 62 神喰らう者と死神の聖剣 (4) |    |
| 84                 |    |

95 銀河の天使と宇宙の騎士 (1)

104 銀河の天使と宇宙の騎士 (2)

119

銀河の天使と宇宙の騎士 (3)

く

第1章く有栖レナ：星に集う戦士達篇

解説回：ペイラー・榊のGE講座 [1]

第1話『エリック死す』

第2話『銀の狐』

第3話『BS解放軍の少年』

解説回：なるほどGA講座★

126 | 130 | 142 | 156 | 170

第4話『テキサスに舞い降りた天使たち』

174

第5話『アリサ・イリーニチナ・アミ

エーラ』

第6話『空中戦』

第7話『宙を舞う神機使い』

第8『旧友たちの邂逅』

解説回：ペイラー・榊のGE講座〔2〕

241

第9話『上条教会』

第10話『強襲！照山最次』

第11話『ツンツン頭の男』

解説回：なるほどGA講座★★★

296

第12話『なんでもないゴッドイ

ターの一日(前編)』

300





〈序章〉

崩れた街のアミタ (1)

〔1〕

— 『未観測世界エルトリア』 中央大陸南部、先代文明遺跡—

惑星エルトリアは、元々は自然豊かな美しい星だった。しかし、資源の枯渇や度重なる環境汚染等、その他大勢の問題から、エルトリアの人々は故郷を離れ、その殆どが宇宙に建造された半自律型コロニーでの生活を余儀なくされていた。

「見つけましたよ、キリエー」

荒野の中に佇む建造物の中で、赤い髪の少女が声を上げた。少女の視線の先には桃の髪の少女とオレンジ色の髪の少女が石版の前に立っていた。よく見ると、オレンジ色の髪の少女に実体はなく、立体映像だった。

「……もう縄から抜け出したの、アミタ？」

キリエと呼ばれた桃色の髪の少女は、その長い髪を揺らしながら余裕の態度を見せるも、数歩、赤い髪の少女、アミタから距離を取った。

「貴方が残した端末から、事情は察しました。幾らこの星を救う為とはいえ、よそ様の世

界に迷惑をかける事なんて、お姉ちゃんは認められせん!!」

「そうやって良い子ぶって言われたって、私は止まらないから! 何年も頑張ってエルトリア復興に尽くしてきたお父さんがあのまま……あのまま何も報われず死んじやうなんて、私には我慢できない!!」

この二人は、元々仲の良い姉妹だった。しかし、父であるグランツ・フロリアン博士が体調を崩した辺りから、この二人には明確な溝が生まれ始めていたのだ。

少女の手にも収まる程の小さな拳銃型デバイスを取り出し、その銃口をアミタに向けたキリエは、目線だけを後ろにいた立体映像へと移し、小声でぼそりと話しかけ始める。

「イリス、準備はどう?」

「座標は完璧。だけど、本来予定していた時間軸より10年程ズレちゃうから、あまり簡単にはいかないかも……」

イリスと呼ばれたオレンジ色の少女の立体映像は、心配そうにキリエに視線を送る。しかし、キリエの決意の固まった表情に揺らぎは無かった。

「元より危険な賭けなのは解ってるよ。でも大丈夫。『永遠結晶』は必ず手に入れて、何としてもここに戻ってくるんだから……!」

「……聞くまでも無かったようね。キリエの下に後ろにゲートを開くよ。一瞬で良いからあの子の気を引いて……!」

「うん、わかった……」

イリスに促されるまま、トリガーに掛けた指に力を込めるキリエ。銃口からは針の様にちいさな弾丸が放たれ、アミタの足を狙う。つい先程、アミタはこの攻撃で不意打ちされて拘束された経緯があるので過敏に反応し、即座に横に飛んで回避した。だが、その一瞬の隙にイリスはゲートを開き、キリエの身体を光で包む。

「キリエ！」

しかし、アミタの行動は予想よりも早かった。

横にとんだ際の着地からばねの様に飛び、キリエの居るゲートの中へと飛び入る。

「しまった!？」

「さあ、家に帰ります……ッ!？」

キリエの腕を強引につかんでその場を離れようとしたアミタだったが、彼女の身体も同様に光に包まれてしまう。

こうして、二人は遠く離れた異なる世界へと転移した。

しかし、向かう先がエルトリア以上の混乱に巻き込まれていた事など、今の彼女達は知る由もない――

## 【2】

—『第97管理外世界地球』旧極東地区ブラックスポット—

どこまでも続く青い空。そして、果てしなく広がる荒野の下、黒いマントを羽織った青色ツインテールの少女が、得体の知れない化け物に追い回されながら、大空を駆けまわっていた。

「うわーんー…こいつら多い上にしつこいぞーっ!？」

対して、化け物の方は緑色の身体に白い牙や爪を生やし、赤い複眼を持った昆虫のような生命体だった。青い少女が手にした黒い斧の様な武器で何匹かは退治されたが、倒された分だけどこからか増援が飛来し、かれこれ数時間は経過していたのだった。

「くそう、こんな時にシユテルんや王様とはぐれちゃうなんて……」

逃走しながらも、斧で叩き、または青い雷を纏った光を放って化け物を撃退する少女だが、奮闘虚しく取り囲まれてしまう。

「……仕方ないな。あまりお前たちみたいなの雑魚に本気を出したくないんだけど、これ以上仲間を呼ばれても面倒だし、何より晩御飯に間に合わないかもしれない」

少女の周りから青白い雷がバチバチと音を鳴らして光始めると同時、彼女の持つてい

た斧の上から水色の光の刃が現れた。

「元々僕は逃げるの隠れるのも性分じゃないからな！　まとめてぶっ殺してやああああああ……」

光の剣を天に掲げた少女がその刃を振りかざそうとした、その時だ。

閃光が少女達を包み、その中から現れた二つの影の内の一つが、丁度少女の真上にあ  
らわれた。

「え？」

状況が飲めないまま、霞む視界の中でよく見ると、それは人の形をしていた影だった。  
丁度、人間でいう所のお尻に該当する部分が、少女の顔面に容赦なく突き刺さる。

「ぶへっー！」

攻撃モーションの最中であつたが為に完全に不意を突かれた状態になつてしまった  
少女は受け身を取る事も出来ず、そのまま眼下に広がる荒野に叩き落とされてしまっ  
た。

「おい！　いきなり人の上に落ちてくるなよ！　痛いじゃないかーッ！」

しかし、見た目以上に頑丈だった少女は頭をさすりながら、落ちてきた影に向かつて  
声をあげた。

「い、い（めんなさいー！）」

影の内の一体、少女にヒップアタックを喰らわせたのは赤い髪の少女だった。対になる様に向かい合っていたもう一つの影の正体である桃色の髪の少女と共に、それぞれ赤い髪の少女が青い戦闘服を、ピンク色の髪の少女が濃いピンク色の戦闘服を身に纏っている。

「まさかここまで着いてくるとはねアミタ……ッ！ お姉ちゃん後ろ!!」

「！」

急に現れたアミタを後ろから強襲しようとした化け物の鋭い牙は、キリエのつつさの声に反応する事によって回避。そのまま背中を合わせる格好となる。

『キリエ、こいつらはラダム獣だよ！』

キリエが手に持っていた小型の石版からイリスの声が流れる。

よく見ると、石版はまるでテレビ画面の様に小型のイリスの映像を映し出していた。

「なんでこいつらがここに……?」

「諸々の話は一旦中断しますよキリエ！ ラダム獣を放っておくわけにはいきません!!」

「流石にこいつら無視するわけにはいかないからね……エルトリアを滅茶苦茶にした連中を見過ぐすつもりはないわ！」

「ちよいい！ ちよいちよいちよーい!!」

アミタとキリエが円形の機械を片手剣へと変形させてラダム獣と呼ばれた化け物に刃を向けたと同時に、下から青い稲妻を纏って少女が彼女たちの前へと昇ってくる。手にした斧を両手でしっかりと握り、今にも噴き出しそうな怒りの表情をアミタ達に突き付けてきた。

「なんなんだよ！ いきなり出てきた拳句に怪獣を目の前にして仲直りで共闘？ そんな格好いい登場の仕方をされたら、僕の存在が霞んじやうじやないか!!」

「……えー」

全く見当違いな所で怒る青髪の少女に困惑するキリエだが、アミタの方は一瞬だけ悩んだ様な表情を見せた後、空中で器用に回転しながら移動し、青髪の少女に背中を預ける姿勢を取った。

「なっ、なんだよいきなり!」

「悪の宇宙怪獣に取り囲まれた所を、突如現れた名も知らぬ人と共闘して倒す。これって、凄く格好いい場面だと思いませんか!」

そう言い放ったアミタの表情は、屈託のない笑みで満たされていた。まるでヒーローを前にした少年の様な表情だ。

「いや、お姉ちゃん。流石にそれは……」

「確かに一理ある。この場合、主役は僕という事になるけど良いのか!？」

「私より格好良く決められる自信があるのであれば!!」

「よし、その話のつた!!」

「あー……そつか。二人とも同類だったか……」

完全に話の流れを持つていかれた事を悟ったキリエは、渋々アマタと青髪の少女に背中を預ける。

棒立ちしていると間違ひなく「さあ、キリエも一緒にやりましょう!」とせがまれることが目に見えていたからだ。

「僕はレヴィ。闇統べる王に仕える雷光のレヴィだ。お前たちは?」

「!」

「私はアミティエ・フローリアンです。アマタと呼んでください。こちらは、妹のキリエ」

「……よろしく」

「なるほど姉妹か。通りでそっくりな訳だな」

何気ない声色で呟く青髪の少女、レヴィの言葉にキリエは一瞬ムツと嫌そうな顔を見せるが、背中合わせが功を奏し、その表情を二人、特にアマタに見られることはなかった。



「さあ、僕とその相棒、バルフィカスがお前たちを残らずぶつ殺してやるから、覚悟するんだな怪獣ども！」

数分後、レヴィの猛攻とそれを補佐するフローリアン姉妹の息の合った連携により、ラダム獣は一匹残らず叩き落とされる事となる。

「ふむ。人を従えて戦うというのは案外悪くない。いや、むしろ良いものだ」

荒野を埋め尽くす程のラダム獣の死骸を見ながら、レヴィは感嘆の声をあげた。

「さて、この星にラダムがいるという事は余計混乱させて迷惑をかける可能性もあります。今すぐ帰りますよ、キリエ」

レヴィから少し離れた所で、キリエに詰め寄るアミタ。

「……アミタ、悪いけど、私はまだ帰る気はないから」

「ラダム獣がいるという事は、『連中』もいる筈なんですよ!? そんな中で、手掛かりもなしに目的の物を探すなんて無謀にも程があります！」

「無謀なんかじゃないよ。少なくとも、糸口は見つけた」

「糸口……?」

困惑するアマタを強引に押しつけ、キリエは完全に呆けていたレヴィの方へと近寄り、彼女を抱き寄せる。

「お? なんだ?」

「私、レヴィの王様とお友達になりたくてここまで来たのよね。ねえ、紹介してくれないかしら?」

「キリエ!」

アマタの静止を無視して、レヴィに頭を優しくなでるキリエ。悪い気はしないのか、レヴィはその手を払いのけずに受け入れる。

「王様と? 別に良いけど、臣下である僕達よりも仲良くなることは許さないからな!」

「じゃあ、レヴィ達とも仲良くなりたくないなあ」

「む……うむ、じゃあ、僕の臣下になるなら、考えなくもない」

「良いわよ。それでいきましよう」

キリエは抱き寄せていた体を離し、レヴィの前で膝をついた。

「うむ、苦しゅうないぞ。王様もこんな気分なのかなあ」

その姿に、レヴィは上機嫌に何度も頷く。

「姉の方は僕の臣下になる気はないのか?」

そしてふと、アミタの方へと視線を送り、そう声をかけるレヴィ。

「……お友達になるのはとても素敵な話ですが、私は、妹のキリエを連れて帰らないといけないんです。出来れば、今すぐにも」

「……と言っているが、妹の方はどうするのさ？」

「アミタの言う事なんて気にしなくて良いんだよ。私は、私の目的の為にここまで来たんだから」

「……なんだか色々あるみたいだけど、とりあえず僕に付いてくると言った妹の方の言葉信じる事にする」

「それでレヴィ？ 早速王様に会いたいのだけれど……ッ！」

「その場から動くのではないぞ、レヴィ!!」

キリエが言葉の続きを発そうとしたその時、空から謎の少女の声と共に黒い光の槍が無数に飛来。アミタとキリエがいた所に容赦なく降り注いだ。槍は器用にレヴィだけを回避し、周囲にあつたラダム獣の死骸にも無慈悲に穴を開けていく。

「なっ、何なんですか一体!？」

「あーっ！ 王様とシユテルんだーっ!!」

おーい！ と元気に手を振る先にいたのは、黒い羽が生えた銀髪の少女と、左手に力

ギ爪の様な武器を装着した茶髪の少女だった。

「こんな所に居たのですか」

茶髪の少女は、カギ爪の付いていない右手でレヴィの頭を撫でた。キリエの時と同じ様に受け入れるレヴィだが、飼いならされた子犬の様に喜ぶ。仮に尻尾があれば勢い良く振り回す勢いがあつたに違いない。

## 崩れた街のアミタ（2）

「……して、彼奴らは何者だ？」

銀髪の少女は、先端が槍の様になっている杖を取り出し、フロリアン姉妹に向けた。先程彼女らに向かって投げられた黒い光の槍と同じものが無数に銀髪の少女の周囲に現れ始める。

「この二人は僕が怪獣に襲われていた所を助けてくれた良い奴なんだよ！」

「……なんだと？ 本当か？」

未だ怪訝そうな顔をしていた銀髪の少女がアミタ達に問いかける。

「はい。ほとんど成り行きだったのですが……」

「そうか。知らぬ事とはいえ、臣下を救った者に何も言わず手をかけようとした早計さには謝罪をせねばならんな」

黒い光の槍を消し、向けていた杖の切っ先もアミタ達から離す銀髪の少女。

「我が名はディアーチェ。絶対にして無敵の闇の化身、ロード・オブ・ディアーチェよ！」  
「レヴィと同じく、ディアーチェの臣下をしています、シュテルと申します。この度はレヴィを助けて頂きありがとうございます」

よく聞いたら王を名乗ったディアーチエは自己紹介しかしていないのだが、そのはすかさず割って入った茶髪の少女、シユテルが補佐に入る。王と臣下の関係というのは、冗談や遊びの類ではない様だった。

「ねーねー王様。こっちのピンク髪の妹の方がさー、僕達の仲間になりたいんだって」「は?」

キリエを指さしながらそう話すレヴィの言葉に、ディアーチエは素つ頓狂な声を上げてしまう。

「我らの仲間に、だと?」

「はい。遠路はるばる、王様達に仕える為にやって来たキリエ・フロリアンと言います。こちらは、お友達のイリスです」

『実体がないのでこの様な姿ですけど、よろしく願いますね』

イリスの映った石版を持ちながらペコリ、と頭を下げるキリエ。

「む、その石版の女……どこかで見た事がある様な……」

『……初めてお会いした筈ですけど?』

「ディアーチエ、大昔の霞んでしまった記憶の中に、似た様な顔の人物がいたのかも知れませんかよ」

「他人の空似か。まあ、大方そんな所であろうな」

シユテルの言葉に納得し、ふと思い浮かんだ疑問を思考の彼方に消し飛ばしたディアーチエは、とりあえず、と前置きを置いてキリエの方へと視線を戻す。

「レヴィを救ってくれた恩義もある。一応、話くらいは聞いてやろう」

「ありがとうね、王様！」

レヴィの時と同じく頭を撫でようとするキリエだが、ひと撫でした所で異様に警戒されて後方へと下がるディアーチエ。

「なんだか馴れ馴れしい奴だな！ 王ぞ？ 我、王ぞ？ 頭が高いわ!!」

「あつ、ごめんなさい。こういうの嫌いだっただかしら？」

まるで警戒する猫の如くフーツ！ つと喉を鳴らしながら杖を構えるディアーチエの姿からは、あまり闇の王としての威厳は感じられなかった。

「しかし、ディアーチエ。彼女らの異世界からの渡航者が現れたという事は、この世界に張った『結界』の効果が切れたと見て間違いないでしょう」

「……うむ、時は熟したと見るべきだろうか」

(時は熟した……?)

ディアーチエの言葉に首をかしげるアミタ。それに気が付いたディアーチエは、ニヤリ、と悪い顔をして反応して見せた。

「失われた我らの力も十二分に取り戻すことが出来た。異界との繋がりが復帰した今こそ、永遠結晶と共に全世界を闇と混沌へと叩き落とす時が来たのだ!!」

「永遠結晶!?!」

それは、キリエがエルトリアを出る時に口にしていた言葉だ。

キリエが「糸口を見つけた」と言ったのは、恐らくデИАーチエらが永遠結晶と関わりのある人物である事を見抜いたからだろう。

「貴様、永遠結晶の事を知っているのか?」

「い、いえ。名前を少し聞いた程度で……」

無用な混乱を避ける為、アミタは限りなく正直に答えた。「キリエがそれを奪う為に来たのを阻止しに来ました」なんて言おうものなら、あの三人に何をされるか分かったものではないからだ。

先程のラダム獣と戦っている時にレヴィの戦闘能力を推し量っていたが、恐らくアミタとキリエの二人がかりでも勝てるか怪しい相手だろう。それが純粹に三人に増えたと思うと、人数的にも力量的にも勝ち目はない筈だ。

「そうか。貴様等なら消えた永遠結晶の在処を知っていると思っただが、流石にそんな出来過ぎた話は無かったか……」

『そんな……ッ!?!』



「永遠結晶が無いって、本当なの!？」

「ディアーチエの言葉に異様に反応したのはキリエとイリスだった。」

「言葉に語弊があった。正確には『盗まれた』だ。我らが異星人と破壊神共にじゃれつかれている間に、まんまと住処を荒らされてしまっただけだ。」

「あの場所、遊ぶ所が沢山あって結構好きだったんだけどなあー」

「我々は賊を探すと共に、新たな居住地を探して旅をしていたのです」

『犯人に心当たりはないの!？』

「妙にがつつく奴だな……少なくとも、この世界の住民ではない。次元を渡る力を持つ箱舟に乗った連中だ。恐らく、忌々しい小鶉か、その仲間と言った所だろうな……」

「タカマチナノハが名乗っていましたね。『時空管理局』という名だった気がします」

『じゃあまずは、その時空管理局の人達を探すお手伝いをすれば良い訳ね?』

「だが、まだ完全に貴様を信用したのではない事を忘れるなよ」

『大丈夫よ。ね、キリエ』

「炊事洗濯から戦闘まで、お手の物よん♪」

「それは大変助かります」

「うむ、家事分担が楽になるのはありがたい話だな!」

戦闘要員というより炊事洗濯要員の追加に大いに喜ぶシュテルとディアーチエ。

「と、いう訳でごめんねアマタ。何度止められたって、私は私の目的の為にいくから」  
「待ちなさいキリエ！ そんな簡単に許すと思つて……!?!」

「ダイアーチエ達と共に飛び去ろうとしたキリエを止めようとしたアマタだが、彼女の身体を幾重もの赤い光の縄が締め付け、その場に拘束してしまう。

「これは……ッ!?!」

「私の拘束魔法です。簡単には破れませんよ?」

「へー、こんな事も出来るんだ。シユテルつて器用なのねえ」

「えっへん。自慢の技の一つです」

「これに捕まると、僕でも中々抜け出せないんだよね。赤髪、強く生きるんだぞ!」

シユテルは一度自信ありげに胸を張ると、後ろで元気に手を振っていたレヴィ達と合流し、その場を去ってしまう。

「くっ……このままキリエを見逃してしまつたら、時間が……ッ!」

立ちあがる事も出来ないままに身を振るアマタだが、シユテルが「自慢の魔法」と豪語していただけあるその拘束は全く振りほどける気配がなかった。

「こうなれば、アレをするしか無いようですね……」

そう小さく呟いたアマタは一度だけ目を閉じて深呼吸をしたのち、力強く目を見開い

た。するとそのグリーンの瞳に、エルトリアで使用されている文字の羅列が浮かび上がった。

アミタとキリエは体内に特殊なナノマシンを内包しており、そのナノマシンの力で能力を解析、物にもよるが、解除や無効にする事も可能なのだ。

動きが制限された状態で、しかも自分とは異なる世界の全く違う技術。

その基礎構造から解析している事もあり、法則性を理解するのには数十分ほどの時間を要してしまう。だが、それさえ済めば、後は数分も必要なかった。

「解析……完了！ 術式解除!!」

シユテルの拘束魔法を引きちぎる様に解除したアミタは、靴底に仕込まれた小さなブースターの力によって空中へと飛翔。荒野の上空に滞空する。

「流石に見失ってしまいましたか……」

しかし、と続けながらアミタは眼下に広がる荒野に目を向けた。

文明の跡と思われる建造物の名残などが転々と見受けられるが、そのどれもが残骸同然な上に、まるで虫に食われた様な穴が幾つも空いている。

「この星も、エルトリアと同じ様に死に直面している様ですね……おや？」

ふと、視界の隅に建造物らしきものを発見するアミタ。大型の建物を中心に住宅等が広がり、外側を壁で円形に覆った街らしき場所だ。

おそらく、外敵から身を守る為に作られたものなのだろう。あの様な壁で宇宙から飛来するラダム獣を追い払えとは思えない事から、もしかしたらラダムが来る以前から存在するものなのかも知れない。

存在する、と言えば。と今度は空の先、地平の彼方へと視線を向ける。アマタがいる場所より遥かに上空の場所に、巨大な人工物らしき物が地上に沿ってアーチを描いていた。

今のアマタには知る由もないのだが、それはこの星をぐるっと囲むように建造されたリング状の建造物であったのだ。

「ともかく、現地の人に見られても厄介なので、あの場所には近付かない方が良いでしょうね……」

そこで長時間飛んでいると誰かに見られることに気が付いたアマタは一度下に降りて今後の対策を練ろうとした、その時だ。

「キヤー!!」

「!」

アマタのすぐ近くから少女の物と思われる悲鳴が聞こえた。

丁度建物の残骸で死角になっている場所だ。

「誰かが襲われている!? でも……」

先程妹に「他の世界への干渉は云々」と言ってしまった手前、自分が率先して破って良いのかその話。と考えるアミタ。

しかし、身体は先に動いていた。

アミタの思考は次第に単純化し「とりあえず助けてから考えよう」となった所で固定される。困っている人がいたらつい助けてしまう、それが彼女なのだ。

「どこに行っちゃったのセツナ！ 梶くわなー!!」

悲鳴の主は、ピンク色の髪の毛の小さな少女だった。頭の後ろの黄色いリボンを揺らしながら、熊の様な茶色のぬいぐるみを大事そうに抱えた少女は、四足歩行の獅子の様な怪物に追い回されていた。

その体躯は大型車両並みに巨大で、冠や兜に見える突起が頭の上に存在し、首筋からは薄い縦長の器官が数枚、まるでマントの様に風になびいて揺れていた。

知り合いらしき人間の名前を呼びながら逃げ回る少女を、怪物は容赦なく壁際まで追い詰める。

「このままじゃあの子が!」

最早考えている時間すら惜しいと思ったアミタは、体内のナノマシンに緊急救助用の加速機動『アクセラレイター』発動の指示を出す。

すると呼応するようにアミタの身体が発光を始め、特に毛先が淡く光を発し始める。

正常に稼働し、放熱機能が働いている証拠だった。

「アクセラレイターッ！」

まるで弾丸の様にその場か急加速したアミタは、少女の元へと向かう。しかし、少女は既に怪物と目と鼻の先にいた。このまま割り込んで救助するにしてもリスクが高過ぎる事を察したアミタは身に纏った運動エネルギーをそのまま攻撃に転用する事にした。

それ即ち、突撃だ。

「てやーっ!!」

「!?!」

相手が認識した頃には既にアミタはその懐にまで接近し、自分の何倍も体積のある怪物の横腹に突き刺さる様に特攻した。

「ギャアアア!?!」

驚きの様な悲鳴と共に怪物は横へと吹き飛び、ビル跡らしき廃墟へと吹き飛ぶ。

その衝撃で瓦礫が崩れ、その全てが怪物へと覆いかぶさっていく。

「お、お姉ちゃん誰……?」

「ただの通りすがりのお姉ちゃんです！ とりあえず、ここから離れますよ！」

アクセラレイターは緊急救助用、という名だけあって常時展開できるものではない。

稼働時間の間に少女を出来るだけ遠くへ移動させようと、ぬいぐるみを離そうとしない少女を抱きかかえて離脱しようとする。

しかし、

「おっ、重い!？」

見た目以上に重量があつた為に離陸に失敗し、少女を軸に回転するアミタ。

そのまま背中から地面に叩き落ちてしまう。

「いたたたた……どうやら、時間切れみたいですね……」

アクセラレイター発動に身体にかかる莫大な負担を気合と根性で抑え、よろよろと立ち上がるアミタ。

そんな彼女の元に、襲われていた少女が心配そうに傍に駆け寄つた。

「助けてくれてありがとう! その、大丈夫?」

「ちよつと体は痺れてますけど、大丈夫です。お姉ちゃん、見た目以上に頑丈ですから」  
長剣を杖代わりに立ちあがるアミタはガクガクと震える足を叩いて活を入れながら、少女に向かって満面の笑みを向けた。

安心したのか、少女も負けない様な笑顔を見せる。

「私、未央!」 あの、お姉ちゃんつてもしかして、ゴッドイーター?」

「ゴッド……?」 なんですか、それ?」

「ゴッドイーターじゃないの？　じゃあ、ニードレス？　超能力者？」  
「？???」

未央と名乗った少女の質問に困惑するアミタ。

神を喰らう者、不要者。とは翻訳機の何かの間違いである可能性も捨てきれないが、超能力者、という単語ははつきり聞き取ることに成功した。何のことかさっぱりわからないアミタだが、未央の方はかなり重要な質問をしているようで、その眼差しは真剣そのものだった。

「一身上の都合で言えないのですが、少なくともそのどれでもないですよ」

「え、じゃあどうやってアラガミに攻撃を……？」

「アラガミ？」

先程未央を襲っていた怪物の事だろうか？

疑問に思ったその時だ。

瓦礫の下敷きになったはずの怪物が動き出し、怒りに歪ませたその顔をアミタ達の元へと向ける。

「あれで無傷?!」

咄嗟に未央の前に立ち、剣を分離。

二丁拳銃に変形させ、銃口をアラガミと呼ばれた怪物へと向けるアミタ。



「安心してください未央さん。貴女は、私が守ります!!」

ここまで来て見過ごすわけにはいかない。

すいません原生生物さん、と心の中で謝罪しながら、トリガーにかけた指に力を込めた。

「バルカンレイド、ファイア!」

銃口から光の弾丸が六発交互に放たれ、その全てがアラガミの眉間目掛けて飛んでいく。

だが、アラガミの方は避けるそぶりすら見せずに全てを受け、痛み所か痒みすら感じていないと言わんばかりに余裕の表情を見せつけていた。

「効かない!?!」

追撃をかける様に光の弾を打ち続けるアミタだが、アラガミは一步、また一步とその距離を縮めていく。

「くっ、せめて、せめて解析が出来れば……!」

ここに来てラダム獣との戦闘の疲労にも苛まれ、膝をつくアミタだったが、まだ諦めてはいなかった。

キリエと共に帰るといふ目的があつたからでもあるが、今は自分の後ろで怯えている未央を護ると決めたのだ。それに、今の身体だと逃げるといふ選択肢はそもそも存在し

なかった。未央を助けるといふ選択を後悔しない為にも、アミタは残る力を振り絞り、アラガミに対峙する。

「……あれ？」

満身創痍で意識を保つ事ばかりに集中していたアミタの後ろで、未央が疑問の声をあげた。

その声は彼女にも聞こえたが、最早返答する余力もない状態だった。代わりに、未央の言葉に耳を傾ける。

「アラガミが、怯えている……？」

未央のそんな言葉と、アミタらの後ろから人影がすつと現れたのは、ほぼ同時だった。

「得物を前に余裕かまして舌なめずり、つて奴か？ 獣の癖に随分と余裕じゃねえか」

影の正体はアミタより背の高い男だった。

オレンジ色の短髪に、肩にトゲが付いた白い特攻服を羽織っており、その後ろには「夜露死苦」という文字が書かれているのだが、その言葉の意味と読み方はアミタには理解出来なかった。

アラガミはこの男に反応していたのだろう、視線がアミタと未央から男へと移される。

対して男の方はタバコを啞えながらゆつくりと前へと進み続ける。アミタが瞬きを  
したその一瞬で、男の啞えていたタバコに火が灯される。

「丁度むしゃくしゃしてたんだ。テメエで憂き晴らししてやるぜ！」

男の叫びと共に、周囲の温度が一気に上昇した事を肌で感じるアミタ。

まるで炎を纏ったように。

否、本当に炎を纏った男が、その炎を右拳へと集中させる。

「喰らいやがれ！ 炎の拳、リトルボーイ!!」

「うっ……」

「お姉ちゃん!？」

体力の限界でその場に倒れたアミタが最後に見たのは、心配そうに駆け寄って自分を  
抱きかかえる未央と、今まで全く傷を負わなかったアラガミが男の炎を纏った拳を受け  
て、悲鳴を上げながら倒れる光景だった。

## 崩れた街のアミタ (3)

〔3〕

「おじさん、お肉焼くの上手だね！」

「まだおじさんなんて年じゃねえ！」

「……………う、ん？」

少女と男の声が聞こえ、閉じていた目を開けるアミタ。

日は落ちて既に夜となり、空には満天の星が広がっていた。

横になっていた体を起こしてみると、すぐ横にあった薪の炎がアミタの顔を照らした。

その向こうには、骨付きの巨大な肉に嚙り付く未央と、その横でため息をついている男の姿があった。

「お、気が付いたか」

身を起こしたアミタに気が付き、視線を向ける男。

「本当は放っておくつもりだったんだが、この嬢ちゃんにどうしてもって頼まれてな、ま

さかこんな時間まで眠つてるとは思わなかったが」

「すいません。ありがとうございます……」

「ま、生身でヴァジュラに挑もうとしたガッツは中々だったぜ」

「ヴァジュラ？」

「あのアラガミの名前だよ。そんな事も知らねえのか？」

アミタの問いに、男は困惑したような顔で答えた。

「い、田舎から出てきたものですから……」

「田舎ねえ……」

咄嗟についたアミタの嘘に、疑心を向けた様な顔をする男だったが、その前を横切つて未央がアミタの元へ駆け寄つた事で会話が中断される。

「お姉ちゃん、お腹空いてない？」

そう言つて未央は、薪の傍で焼かれていた骨付きの大きな肉を一つ取り、アミタへと手渡す。

「ありがとうございます、未央さん」

「えへへー。おじさんが焼いてくれたんだよ！」

「おじさんじゃねえ！ 俺の名前は照山！ 照山<sup>てるやま</sup>最次<sup>もろつぎ</sup>だ!!」

「照山さん、ですか？ 私はアミティエ・フローリアン。アミタって呼んで頂ければ」

「アミタに、未央か。所で、お前たちはこんな所で何をしていたんだ？」

「私は、はぐれてしまった妹を探していまして……」

「未央も、友達とはぐれちゃって……」

照山の問いかけに、アミタははつきりと、未央も続く様に答える。

「あの、私と似た様な服を着ていて、未央ちゃんみたいな髪の色の子なんですけど、照山さんは見ませんでしたか……？」

「……いや、俺も人を探して辺りを彷徨っていたが、今日人間に会ったのはお前らが初めてだぜ」

「そうですか……」

「じゃあ、未央の友達もこの辺には居なかったのかな……」

意気消沈する未央。

その姿に小さい頃のキリエを重ねてしまったアミタは、片手でそつと未央を抱き寄せ、頭を優しく撫でる。

「大丈夫ですよ未央ちゃん。お友達が見つかるまで、私と照山さんが一緒にしますから」

「そうだな……つてちよつと待て！ 何で俺までセットで話が進んでいるんだよ!？」

「良いじゃないですか。偶然にも荒野の真ん中に人探しをしている私達が集まったんです。旅は道連れ世は情け、というらしいじゃないですか？」

「……はあ、とりあえず、アミタの妹と、未央の友達探せば良いんだろ？ 手掛かりがないのなら、先に俺の人探しからやらせてもらうからな」

「皆でバラバラになつて行動するより、皆で行つた方がすぐ見つかるかも知れませんか。わかりました。それで、照山さんはどんな人を探しているんですか？」

アミタの問いで、照山は何かを思い出して一瞬怒りの表情を見せると、歯を食いしばりながら言葉を紡ぎ始めた。

「この『ブラックスポット』には、俺の仲間を殺した野郎がいるんだ。そいつは聖職者みたいな振る舞いで長身の、首に悪趣味なチョーカーをはめた『アダム』って男だ」

「アダム、ですか……」

照山の言葉に異様に反応した未央だが、アミタの影に居た為にその姿を彼に見られることはなかった。

「俺はそのアダムって男の詳細を知る為に、隣のブラックスポットからやつて来たって訳だ。とりあえず、明日にはこのブラックスポット一番の情報屋の所に行こうと考えている。耳の早い奴だ。お前らの探している連中の事も知っているかもしれない」

二、三時間程寝かせてくれ、とだけ言い残し、さつさと横になつてしまった照山から視線を離れたアミタは、未央に手渡された肉を食べ始めながら、空を見上げた。

気が付くと、未央もアミタに寄り添いながら小さく寝息を立てている。

キリエと一緒に姿を消したディーアーチエ達の事も気になるアミタだったが、未だ体力が全快していない事も理解していた彼女は、未央をゆつくり地面に寝かせると、火の番と護衛を兼ねて、ブラックスポットと呼ばれた荒野の真つ黒な夜景に目を向けながら、故郷に残した両親への想いを馳せるのだった……。

(続く)



## 神喰らう者と死神の聖剣（1）

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』フエンリル極東ブラックスポット支部—

『支部長。照合中のデータベースから、新型神機じんきの適合候補者が見つかりました』  
「そうか。名前は何という?」

フエンリル極東ブラックスポット支部、通称『アナグラ』の支部長室で、女性オペレーターから送られてきたデータを男は軽くチェックした。

資料の一項目には『有栖アリスレナ』という名前と、黒髪で眼鏡をかけた少女の顔写真が添付されていた。

「……ふむ、早速適合試験を受けてもらおうとしよう。準備ができ次第、彼女を試験場へ案内してくれ」

『了解致しました』

オペレーターとの通信を終わらせ、男……極東ブラックスポット支部の支部長ヨハネス・フォン・シツクザールは懐から小型の通信端末を取り出し、いずこかに通話を開始

した。

通信の相手は先ほどのオペレーターとは別の男性で、彼の旧友だった。

「……私だ。新型の候補者が見つかった。そちらの準備はどうだ？」

『とりあえず、基礎設計は完成、生産開始の目途は経った。だが、目標数に対して資材が圧倒的に足りないと言わざるを得ない』

「学園都市の遺産とやらが使える様になれば、その問題は解決する筈だ」

『半世紀前の遺物か……そんな物に頼らないといけないとはな』

「しかし、必要な事だ」

『……シツクザール。一応聞くが、考え直す気はないか？』

「既に地上はアラガミとラダムによって壊滅的な被害を被っているのだ。シメオンの様に、こんなご時世にも権力にしがみつく連中がいる。今こそ人類は、選択を迫られているのだよ」

『……君の考えもまた理解出来る。だから、私は止めはしない。それに、この計画はどちらに転んでも後の人類には必要な事だ』

「相変わらず、抜け目のない奴だ」

『君ほどではない』

「フツ……つと、候補者の準備が整った様だ。それでは失礼する」

『わかった。成功を祈るぞ、シツクザール』

ほぼ事務的に進んだ会話を打ち切り、シツクザールは支部長室から試験場となる訓練施設へと移動を開始した。

彼が試験場の見学席に着いたのと、候補者が現地に到着したのは、ほぼ同時の事であつた。

資料では、年齢は今年で16歳とあつたが、外見はもう少し大人びていた。過度な装飾はせず、肩口までで切り揃えられた真っ黒な髪と、男モノの無骨な眼鏡が彼女を見た目以上に大人に見せていたのだろう。

しかし、眼鏡の奥の素顔はまだ幼さを残しており、それを隠す為の眼鏡なのかもしれない。

「長く待たせてすまない」

試験場の入り口で呆然と立ちぼうけていた少女レナに、シツクザールはスピーカー越しに言葉をかける。声に反応してこちらの方へと視線を向ける姿が見えるが、向こうからだとガラスの反射で良く見えない筈だ。

「さて……ようこそ。人類最後の砦『フェンリル』へ。今から対アラガミ討伐部隊『ゴツドイーター』としての適合試験を始める」

シックザールは普段と変わらない口調で話していたつもりなのだが、レナは緊張しているのか、その場から微動だにせずに話を聞き入っていた。

「少しリラックスしたまえ。その方が、いい結果が出やすい」

別段そんな事はないのだが、話を聞いたレナは肩の力を抜き、小さく深呼吸していた。とりあえず、感情のコントローラが出来た人間なのだと、彼の中でレナの評価が少し上昇する。

「心の準備が出来たら、中央のケースの前に立ってくれ」

シックザールが指示した場所には、プレス機のような赤い機械の間に挟まれた、一本の剣が存在した。

鐳の部分の前方に小さな銃身が存在し、二つに分かれた小さな盾が左右に挟み込むように装備されている。

しかし、その全長は一メートルを裕に超える、おおよそ可憐な十代女子には扱えなさそうな代物だ。

これこそが、アラガミを切り裂き、喰らう事の出来る武器、神機。

その最新型である遠近可変式の第二世代型だった。

それから数分後、ヨハネス・フォン・シックザールは極東ブラックスポット支部で初

めての新型ゴッドイーターの誕生の瞬間に立ち会う事になる。

〔2〕

「あぁー……」

『神機への適合試験とその後の健康診断』を済ませた有栖レナは、それから一週間程、神機の扱いについて朝から晩まで訓練漬けの毎日を送っていた。

訓練の疲れを体の奥底に感じながら、自室のベッドから身を起こす。

親兄弟もおらず、絶賛無職で生活に支障をきたしていたレナ。

思い切つてゴッドイーターへの志願書を提出した所、あっさりと受理された上に『新型』とやらの適合に成功し、彼女の華々しいゴッドイーター生活が幕を開けたのだ。

「なんか、まだ実感が湧かないな……」

適合試験の際に右手首に装着された赤い腕輪へ視線を向けながら、レナは一人呟いた。

神機使いの鍵の様なもので、ターミナルと呼ばれる情報端末へのアクセスや、自分専

用の神機との繋がりであるらしい。

非常に重要な物である事は理解できるが、欠点は少々サイズが大きい事だ。

巨大な手錠を掛けられている錯覚に陥るし、何より着替えの時に邪魔で仕方がない。

最も『死んでも取るな』と最初に厳命された手前、月に一回あるメンテナンスの時に外は取り外す事は許されないそうだ。

「アラガミを喰らうゴッドイーター、かあ……」

アラガミとは、約20年前にこの世界に突如として現れた怪物だ。

人類の天敵。

絶対の捕食者。

世界を破壊するもの。

街ではそんな呼び名を多く聞いた。

無論、レナもそう思っている一人だ。

目の前で建物や人が食われ壊される光景を目撃したのは、何も一度や二度ではない

し、今の世の中そう珍しい事もない。

その度に、神機使い、ゴッドイーターに助けられたからこそ、今の彼女がある訳だが。加え、半年ほど前から姿を現す様になった怪物『ラダム獣』とやらの事もある。

最初は新種のアラガミかと思っていたが、どうやらそうではないらしく、曰く宇宙の彼方からはるばる地球へやってきたエイリアンだという。

どちらにせよ人類に害する存在である事に代わりはないので、街での扱いは同じ『化け物』括りだ。

地上からアラガミが湧いてきたその日から、人類史は暗黒面を突き進んでいた。

今更地球侵略を企む悪の宇宙生物が来たところでどうこうするほど、今の人類に日和見な奴はいないのだ。

『業務連絡。藤木コウタ、有栖レナ両新兵、一二〇〇までにロビー前にて集合せよ』  
「うおわあ!？」

部屋でぼーっとしようと思つた矢先に急に流れたアナウンスに素つ頓狂な声を上げてしまうレナ。ここが一人部屋で良かったと思う瞬間であった。

時計を見ると、指定された時間まで一時間ほど時間がある。

だが、食事もまだだったレナは大急ぎで寝癖で爆発した髪の毛を直し、最初に支給されたフェンリル指定の赤い制服を身に纏う。

式典の様な厳格な場以外で、フェンリル指定の服を着る必要はないと聞くが、彼女にとってゴッドイーターとしての最初の任務とは厳格以外の何物でもないので、身だしなみを整えるのに一切の躊躇など存在しなかった。

決して、決して他にまともな服を持っていないとか。そんな事ではないのだ。

食事を終わらせて程なくして、レナはアナウンスで呼ばれたロビーへと足を運んでいた。集合場所には既に一人椅子に座って待機している。

年はレナと同じくらいだろうか、ニット帽をかぶり、袖なしのシャツとダボダボのズボンを穿いた少年は、上から下まで黄色で統一されたファッションに身を包んでいた。

街で流行のバガラーリー？ とかいう昔の番組に出てくる服のレプリカ品らしいが、あまりレナはその辺りの事情に詳しくなかった。

一見すると街のどこにでもいる少年と変わらないが、彼の右腕にはレナと同様の赤い腕輪があつた。

つまり、彼もゴッドイーターなのだ。

「あ、君が有栖レナ？ 俺、藤木コウタっていうんだ。よろしく！」

「よろしく……」



屈託のない笑顔で握手を迫られ、あまり慣れてないレナはぎこちなく返してしまふ。「聞いたよ。この支部で初めての新型神機使いなんだって？ あ、でも俺の方が試験早かったらしいから、一瞬だけでも先輩って事で！」

「お、早速新入り同士友情を育んでいるようだな。良い事だ」

その後根掘り葉掘り質問攻めをさせられていたレナだが、後ろから彼女達に話しかける男性の声を聞き、振り向いた。

そこに居たのは、フェンリルの士官服に身を包んだ、長身の男だった。

右腕に付けられた腕輪は、レナやコウタの真つ新なそれと違って所々に小さな傷が見える。間違いなくゴッドイーター、それも出撃経験のある人物なのだろう。どんな堅物なのだろうか、とレナとコウタは乾いた喉を唾で潤しながら次の言葉を待った。

「二人してそんな怖い顔するなよ。俺は雨宮リンドウ。形式上、お前たちの上官にあたる……が、まあ、細かい話は省略する。とりあえず、とつと背中を預けられる位には育つてくれ、な？」

「……」

「……」

意外と、というかかなり適当な挨拶に、堅苦しい上官を思い描いていた二人は思わず

口を開けたまま硬直してしまう。

訓練担当の雨宮ツバキ教官が鬼の様に厳しい人であった所以から、かなり身構えをしてしまっていたらしい。

リンドウからすれば、会ったばかりの新人二人が同じ表情をしているのだから、内心笑いを堪えるのに必死だったに違いない。

そんな微妙な間に気が付いたリンドウが何か口にしようとした時、丁度横を通りかかった女性がレナ達の下へ歩み寄ってきた。

黒と緑で彩られたエプロンの様な衣装に身を包んだ女性は、リンドウよりも少し身長が低いものの、女性としてはかなり長身な上に、他のルックスも抜群だった。

無頓着なレナでも、流石に大敗を感じずにはいらなかった。

「あら、もしかして新しい人達？」

「あー、今厳しい規律を叩き込んでいるんだから、あっち行ってなさいサクヤ君」

「了解です、上官殿」

サクヤと呼ばれた女性は、リンドウの後ろでそつとレナ達に手を振ってから、その場から去っていく。

「……すっげえ」

「男って本当に……」

真横でぼそりと呟いたコウタに、レナは小さくため息をはいた。

ここまでで分かった事だが、コウタは結構思った事をそのままつすぐ口にする癖があるようだ。

少なくとも、悪い人間ではないのだろう、とレナは心の中で一瞬だけ先輩コウタの評価を改めた。

「とまあ、そう言うわけで、だ。早速お前たちには実戦に出てもらうが、今回の緒戦の任務は俺が同行する……のだが」

ポリポリと頭を掻きながら、リンドウは周囲を見渡し始める。

「護衛対象の依頼主がまだ見えないんだよな。とりあえず、それまで待機って事で」  
「あ、あの！ 雨宮少尉！ 質問良いですか！」

その場から去ろうとしたリンドウを、コウタが呼び止める。律儀に右手を大きく上にかけて、まるで学校の授業風景の様だ。

「そんなかしこまらなくて良いぞ。リンドウさんとも呼んでくれ。で、何かな？」  
「護衛対象って言いましたが、任務は要人護衛ですか？」

「まさか。新入り一発目にそんな退屈な任務押し付けたりしないさ。ま、運動も兼ねた楽しいピクニックだとも思ってくれたらいい」

「……ブラックスポットのピクニックはとても刺激的だよ?」

「そうそう。アラガミとの楽しい鬼ごっこに各種レクリエーションを織り込んだ……おっと?」

いきなり会話に入ってきた声にリンドウは続けて応えるが、それがレナや、ましてコウタのものではないと理解すると、声の主の方へと視線を向けた。

そこには、長く美しいブロンドの髪をポニーテールでまとめ、黒いシャツとミニスカートの身を包んだ女性と、銀髪でメガネをかけた長身の神父が立っていた。

「時間厳守とは、流石フェンリルギルドの名コンビは違いますな」

「僕たちが時間にうるさいんじゃないやなくて、君がルーズなだけだろう、リンドウ?」

フェンリルギルドとは、フェンリルが運営する傭兵組織の様な物だ。

正規の部隊として任務を与えられるゴッドイーターと違い、街での小さな問題や、アラガミ以外の荒事を対処する事が多い。

その多くはアナグラ内部というより、その外に広がる広大な大地『ブラックスポット』で生活する住民の大切な働き口の一つだった。

「そう言えば、紹介がまだだったな。こちらの黄色いのがコウタ君で、そつちの眼鏡ちゃんながレナ君だ。新入り諸君。こちらが今回の依頼主、セト君とブレイド君だ」

「何そのキャラ? リンドウ、君ちよつと変だよ?」

「さて、何の事かな？　俺はいつでも大真面目で規律に厳しいフェンリルの士官でありますので」

「ビールと煙草が手放せない男が、よく言うよ」

「……」

凶星を指されたのか、つい明後日の方向へ視線を流すリンドウ。

一方で、ブレイドと呼ばれた男は先程から一言も発さずに、ただレナを睨むように見つめていた。

ブラックスポットは荒くれ者の住処、例え神父の格好をしていても、中身はゴロツキなのだろう、とレナは勝手に解釈する。

つい一週間前までの日常ではよく目にした表情だ。

無言で見つめ返してやると、ブレイドはゆっくりとレナの眼前へと近づいてきて、そつと、その両手を優しく握った。

「……結婚してください」

「は？」

サンングラスの上からでもわかる、どこまでもまつすぐな瞳と、どこまでもまつすぐなブレイドの突然のラブコールに、レナとコウタは思わず口をそろえて変な声を上げてし

まうのだった。

## 神喰らう者と死神の聖剣（2）

〔3〕

— 『第97管理外世界地球』ブラックスポット西部—

「ごめんねレナ。コイツの言葉は忘れてもらって良いから」

「はあ……」

現在、リンドウ、レナ、コウタ、ブレイド、セトの五人はフェンリルギルドのトラックの荷台で揺られながら、ブラックスポットの大地を駆け抜けていた。

本来なら関係者のみでの移動が望ましいのだが、任務の特性上特殊車両が使えず、従ってトラックには一般の乗客も何人か相乗りしている。

その為、ゴッドイーターの三人は素性がばれないように各々が大きなマントを羽織りフードで顔を隠していた。

神機はケースに収め、床に綺麗に並べられている。

「いい加減この縄を解くのです!! 私が何をしたというのですか!？」

「女の子を見境なく襲う様なお前はそれで充分だ!」

ロープでぐるぐる巻きにされ、まるで毛虫の様な格好で蠢くブレイドを、セトは容赦

なく蹴りを加えて制裁を食わせる。

「少しやり過ぎでは……?」

「ほれ見ろ! レナたんの方がよっぽど人間が出来ている! マジ天使!!」

「たん……?」

「だつたらせめて私に蹴られている間のその笑顔を止めるんだな!!」

セトの言葉通り、女の子に足蹴りされても、ブレイドは嫌な顔一つ見せる所か、むしろかなり喜んでいるようにも見えた。

これで神父なのだというのだから、この世界の神は死んだか休暇でラスベガス辺りに旅行に行つてそのまま帰らぬ人ならぬ、帰らぬ神となったのだろう。アラガミと間違えられて討伐されたのかもしれない。

「あ、あの……」

「あ?」

縄が解けそうだったので、更に強く縛ろうとセトがつなぎ目に手をかけたとき、相乗りしていた客の一人が彼女に声をかけた。

エヴァブルーの髪をツインテールにしたその少女は、セトの座っていた席の隣に置いてあった『それ』を指さした。

「この大きな剣……もしかして、貴方はゴッドイーターなのですか?」



それは、セトの背丈を大きく超える、巨大な両刃剣だった。

鏢の部分には、異形の髑髏と骨によって禍々しい装飾が施されている。

「いや、違うよ。僕はゴッドイーターじゃない。でも、死にたくなかったら近寄らない方が良い。君も死神に呪い殺されるよ？」

「えっ……し、死神……!？」

少女が表情を強張らせた、その時だ。

ドン！ という乾いた音と共に、トラックの車体が大きく揺らぎ、勢いよく真横に横転した。

「なっ……何事です!？」

いつの間にか拘束を解除していたブレイドは、ちやつかり少女とレナを両脇に抱えながら華麗なフォームで地面に着地していた。

「あ、ありがとうございます……?？」

「なんで私まで……?？」

「どうやら、ターゲットが自分から来たみたいだよ……」

身の丈以上の剣を軽々と持ち上げ、セトが応える。

彼女の視線の先には、トランプとダーツを持った手品師の大男と、デザートイーグルを構えた細身の男の二人がいた。

「御機嫌よう！ ただの通りすがりのバスジャック犯だから安心してね♡」

「抵抗したらブチ殺すからのう！」

「きや……きやあああああ!!？」

「プ、掠奪者だあああああ!!？」

他に相乗りしていた男女の客が、二人の男を見ながら悲鳴を上げ、ブレイドの下へと

駆け寄った。

「掠奪者?!」

「た……助けてください神父様！」

「あいつらはこの辺に現れる血も涙もない事で有名な野党です！」

まるでこの世の終わりにでも直面したような恐怖の表情で、男女がブレイドへと助け

を求める。

「大丈夫です。恐れる事はありません。神もこう言っておられます……」

そんな彼らに対し、少女とレナを降ろしたブレイドは聖書を開き、迷える子羊を導く

神父の如く、優しい声色で皆の不安を和らげた。

そして……

「御葬儀のレギュラープランは70000fcからとなっております」

「葬式の心配なんてしてないわアーツ!？」

全く関係ない心配をされて、初めて会話した人に激しくツッコまれるブレイド。

しかし本人は至って大真面目なのだ！

「そおれ、全員亀甲縛りで連行よん♡」

「了解じゃアニイ！ 腕がなるのう！」

アニイと呼ばれたヒゲを蓄えた手品師に指示されながら、細身の男が乗客を次々と亀甲縛りで捕えていく様子を、リンドウとコウタはトラックの物陰からひっそりと観察していた。

「まずい事になったな……」

「いや、絵面がシュール過ぎてイマイチ危機感漂ってきませんよりンドウさん！ つていうか、レナの腕輪見られたら色々不味いんじゃない？……？」

「大丈夫大丈夫。今の俺達には『死神』が憑いているからな」

そう呑気に答えたりンドウは、胸ポケットから煙草とライターを取り出し、優雅に服し始めるのだった。

「さて、そのフードのお嬢ちゃんも、大人しく捕まっちゃいませうねえ♡」

「まで」

「！」

レナを亀甲縛りしようと彼女に滲みよっていた二人を、氷の様に冷めた声が制止させた。

「いつもこうだ……僕と関わる人間は皆、不幸になっていく……何故僕以外の人間が不幸に合うのか。その答えを探して旅をしているというのに……」

声の主……セトは大剣を持ったまま二人を見つめていた。

その瞳には光がなく、まるで死人のそれであった。

「何よアナタ!？」

「ぶっ殺されてえのかネエチャン!？」

「ツ！ やめなさいあなた方!!」

武器を向けて威嚇する男二人を、ブレイドが止めようと叫ぶ。

そう、彼は知っているのだ。彼女が『普通ではない』という事を。

「彼女は『死神』に取り憑かれているんです！ 彼女を怒らせてはいけません!!」

「死神イ？」

しかし、ブレイドの必死の言葉も男達には届かなかった様だ。

半分所か、欠片も信じている様子は無い。

「バカ言っちゃダメよ？ こんな子猫ちゃん一人に何ができるって言うの!？」

ダーツの矢を構えた手品師が跳躍し、セトの元へと飛びかかる。

研ぎ澄まされた鋭利な刃が彼女の命を狩らんと近づいた時、男達の説得を諦めたブレイドは、静かに聖書を開いた。

「仕方がありません。セト、死神の発動を許可します」

その言葉と、男がダーツの矢を振り下ろしたのはほぼ同時だった。

「……あ、あら？」

疑問に最初に気が付いたのは、セトに攻撃をしたはずの手品師だった。

本来なら、この刃は生意気子猫ちゃん事セトの頭に突き刺さり、脳髓を滅茶苦茶にした事だろう。

しかし、男の下には人間の姿すら無かったのだ。

「消えた!？」

「……貴様等は既に死神に魅入られた。魅入られた者は最期の足跡がつく事は、ない」  
消えた筈のセトの声が、男達の頭上から響く。

『死神』の力を解放したセトは、一瞬にして数メートル上空へと飛翔したのだ。

「と、飛んでる……!？」

「ア、アニー! 大変だ! 足が……ッ!」

細身の男に指摘され、手品師の男も足元を見る。

その時初めて自らの状況を認識する事が出来たのだ。

自分たちの足が地面に付いておらず、地上から浮いているという事に。

「そつ、そんな馬鹿なツ!？」

「ヒイーツ! なんでじゃーっ!?! 怖いッス!!」

何とか地に足を付けようともがく二人だが、その足が大地を踏みしめる事は無かつた。

セトの言う通り、死神に魅入られてしまったのだ!

「……聖書には、こうあります。『汝の魂が既に、この世にない証拠だ』」

ブレイドの言葉の後、セトは大剣を上段に構えた。そして……

「判決、死刑」

「ぎゃあああああああああ!?!」

上空で大きく剣を振り下ろすセト。

するとどうだろうか。先程まで浮いていた男二人が、まるで巨大な拳にでも叩き付けられたかの如く地面に突き刺さった。

だが、死神が気まぐれを起こしたのか、二人とも大きな怪我を負っている事は無かった。

「ひ、ひいいい！ 撤退よ！ あの子、本物の死神なんだわあああ!?!」

「ア、アニイ！ 待つてくませえ！ 死にたくねえええ!!」

「……」

意外と元気だった二人は悲鳴を上げながら去るのを、セトはゆつくりと地面に降り立ちながら見送るのだった。

「皆さん、もう大丈夫ですよ。死神は封印しました」

ブレイドの言葉に、トラックに相乗りしていた乗客はざわつく。

無論、詳細を知らされていないレナもチャンプンカンプンという様子だった。

「アンタのその力……まさか『ニードレス』なのか!」

ニードレス。

それは地球上で唯一、ここ極東に点在するブラックスポットにのみ現れるという、不思議な力を持つ者たちの事だ。

半世紀程前の第三次大戦の折に滅んだ超能力者の街『学園都市』の生き残り達の子孫である、

又は大戦後に荒廃したこのブラックスポットに現れた神の如き力を持った救世主『ザ・セカンド』に祝福された人達に与えられた神の奇跡、

という二つの説が有力であった。

その力は絶大で、神機登場前はアラガミを倒せる数少ない存在でもあったという。

しかし、局地的にしか現れない事や、その能力への畏怖の意味を込めて、ブラックスポットの外の人間たちは不要者という意味を持つ『ニードレス』の名を彼らに冠したのだ。

「ニードレスでもないよ。これは真正正銘、死神の力だ」

「そして私は、死神から彼女を救う為、半ば強制的に！ 連行されている哀れな神父ブレイドと申します」



「呪うぞロリコン神父」

「ゴ、ゴツドイーターでも、ニードレスでもないのなら、何故あなた方はここに……？」

「フェンリルギルドから依頼だよ。『掠奪者から村を守ってくれ』ってね」

「え!? そ、それでは……貴女がセト様でいらつしやいますか……？」

ツインテールの少女に名前を呼ばれ、セトとブレイドはお互いに顔を見合わせるのだった。

【4】

「何が『死神の聖剣』だ!! 我々が探していたのはニードレスなんだ!! しかも、神父と一緒にだ?! 葬儀屋の間違いじゃないのか!？」

村の町長らしき男が、禿げた頭をまるで茹でタコのように赤く沸騰させながら怒りのまに机を何度も殴っていた。

余程余裕がないのであろう。そこにニードレスを読んだのに、現れたのは訳の分からない少女と神父。

彼が怒るのも無理はない話だった。

「やはりそう見えますか。しかし彼女の死神の聖剣の力はエクソシストである私の力無しでは制御することは出来ません。ええ、全く、好きで一緒にいる訳ではありませんと

も」

「うるさいだまれアホ神父」

「良いか！ 連中の背後にはニードレスと『テツカマン』がいるんだぞ!! 剣や銃で敵うとも思っているのか!？」

「……待て。『テツカマン』だと？ 聞いていないぞ」

怒り狂う町長の言葉を聞き流していたセトだが『テツカマン』と言う言葉に反応し、強引に彼の言葉を遮った。

テツカマンとは、ラダムと共に地球へやって来た、人型の宇宙人の事だった。

強固な鎧に包まれており、その素顔は誰も見た事がないという。

現在確認されているのは、ラダム獣を従えた人類の敵『ダガー』『アックス』『ソード』『ランス』『エビル』と、地球側に味方してラダムやアラガミと戦う『ブレード』の六体だった。

「そうですね。依頼を受けた際はニードレスだけだと」

「……つい先程得た情報だ。掠奪者は、テツカマンを味方につけたらしい」

「件の『テツカマンブレード』なのか？」

「いや、ブレードではないそうだ」

ひとしきり暴れて頭を冷やしたのだろう、冷静さを取り戻した町長がセトの疑問に答えた。

「どちらにせよ、割に合わないな。帰るぞ下僕」

「誰が下僕だコラ」

報酬の入った袋を置いてその場を去るとするセト。

その金額は街のゴロツキ退治にしては破格の金額だが、相手がテツカマンだと言われると話は別だ。

二つ返事で簡単に請け負って良い仕事ではない。

「まっ……待ってください！」

部屋を去ろうとしたセトとブレイドを止めたのは、先程のツインテールの少女だった。

「お願いです！ 私達ともにアイツ等と……ニードレスとテツカマンと戦って下さい！！」

「ソルヴァア!? 何を……!?!」

少女、ソルヴァアは町長に呼び止められるが、構わずに続ける。

「足りない報酬は、この身を売ってでもお支払いします……だから、その聖剣の力を、私達にお貸しください！ もちろん、ニードレスにはニードレスでしか対応できない事

や、テツカマンがどれ程恐ろしい存在かは充分理解しているつもりです！ でも、あなた方なら……ッ！」

「……と、お願いされましたが、どうしますかセト？ 無論、私はソルヴァたんのお願いは全身全霊を以て叶えたいと思う所存ではありませんが」

「はあ……わかったわかった。僕としても、相応の報酬が支払われるなら文句はない」

俄然やる気の溢れたブレイドの横で、セトはため息を吐きつつも、ソルヴァの提案を受け入れる。

「ありがとうございます……！ 町長！」

「ソルヴァがそこまで言うのなら、我々も出来得る限りの協力をしよう」

町長の言葉の後、部屋に集まっていた他の住民も鍬や箒での武装を始める。

ニードレスとテツカマンに通用しそうな物は一切ないが、少なくともやる気だけはあ  
るようだ。

「そう言えばセト様。御一緒にいたゴツドイーターの三人はどこへ行かれたのですか？」

「……ああ、あいつらは僕たちがここまで来るまでの護衛だよ。今は街の外でアラガミ討伐の任務に出ている筈だ。ま、心配はいらない。ニードレスやテツカマンなんて僕た

ち  
だ  
け  
で  
も  
充  
分  
さ  
」

## 神喰らう者と死神の聖剣（3）

セトとブレイドがソルヴァ達からの依頼を引きうけ、とりあえずの休憩場所として宿屋の一室を貸し与えられていたその頃。

街の外れでは、ケースから神機を取り出したレナ達が遠眼鏡片手に待機していた。

「あー、とりあえず、簡単に任務のおさらいをしておこうと思う」

流石にこのまま何も言わずに時間経過を待つのは如何なものかと思ったのか、リンドウがコウタとレナに説明を始める。

「今回の任務は掠奪者を名乗る略奪者集団に襲われている村の救援だ。最も、それはフェンリルギルドから依頼を受けたブレイド達二人の仕事で、俺達は道中の護衛。周囲にアラガミやラダム獣が現れた場合、優先的に撃退する、と。ま、そんな感じだ」

「私達は、その掠奪者とかいう連中を捕まえないんですか？」

初の実地演習にまだ緊張をしつつも、レナがリンドウに質問をする。

「色々規約があつてな。神機を『ただの人間』には向けられないんだわ」

「でも、リンドウさん？ この辺ってあまりアラガミやラダム獣がいないって聞くんで

「すけど、俺達に出番回ってくるんですかね？」

「何事も平和が一番だと思わないか？」

「そりやそうですけども……」

「そういう事だ……つと、言ってる傍からお出しました。二人とも、向こうの廃ビルの影に白いのが三体居るのがわかるか？」

リンドウに指摘された場所を遠眼鏡で確認する二人。

そこにあつたのは、旧学園都市に存在していたビルの名残。そしてその下を闊歩する、白いアラガミだった。

刃の様に鋭利な尾と鬼の様な顔を持つ、オウガテイルと呼ばれる種のアラガミだった。

「良いか。命令は三つ『死ぬな』『死にそうになったら逃げろ』『そこで隠れろ』『運が良ければ不意を突いてぶっ殺せ』」

「……四つですけど？」

「……ま、とにかく生きのびろ。それさえ守れば、後は万事どうにでもなる」

「はぐらかされた……」

レナの指摘をさも当然の様に流したリンドウは遠眼鏡を仕舞い、神機を肩に担ぐ。

赤と黒の色でまとめられたチェンソー型の近接型神機が、彼の相棒だった。

「さっきの神父たちと言い、実はフェンリルの関係者ってこんな適当な人が多いのか……？」

疑問を抱えながらも、コウタもリンドウに続き神機の準備を始めた。

ドラム型と呼ばれる円形のカードリッジを取り付けた機関砲タイプの遠距離神機はその昔、伝説的な活躍を見せたゴッドイーターが使用した物の同型タイプであるらしい。

二人に続き、レナも自分の神機を確認する。

リンドウとコウタの神機は第一世代神機と言われる現在主力として活躍中の神機だ。第二世代のレナの方がむしろ珍しい。

そんな彼女は取り回しの効くショートブレードと、射程距離こそ短いものの、一撃の威力が高いブラストの武器をチョイスしていた。

いずれも最初に神機使いに支給されるものだ。

新型は旧型と違って遠近両方を使いこなさなければならず、さつさと自分に合った武器の種類を見つけたコウタと違って、レナはまだ手探りの状態だった。

今回の装備は、最後の訓練で使用した装備でそのままやって来ただけに過ぎない。

「さーて、新人お二人さん、おっぱじめるぞー！」



【5】

「……で、何で僕たちは手錠を掛けられて牢屋に放り込まれているのかなブレイド？」  
蠟燭の炎でのみ照らされた薄暗い牢屋の中で、セトは横で同じように拘束されたブレイドに問いかけた。

「どうだったか。……しかし、未だに信じられないな。彼女……華夏<sup>かな</sup>たったか？  
炎と氷、二つの能力を持っていた……」

丁寧な言葉を崩し、悪態を突くブレイドであったが、これは彼の本来の口調である。  
従ってセトはあまり気にした様子は無かった。

「フラグメントはニードレス一人に一つの筈だ。何かあるに違いないんだが……」

ニードレスにはとある原則が存在する。

それは『フラグメント』……これは、ニードレスが使用する能力の総称なのだが、そのフラグメントは神の恩恵。

一人一つが絶対で、例外はないと言われているのだ。

だが、バスジャックをした二人の男を従えた少女は、炎と氷という両極端のフラグメントを使用し、ソルヴァ達に先んじて乗り込んだセトとブレイドを一撃で撃退。

彼女らは囚われの身となってしまったのだ。

「どちらにせよ、まさか僕たちが、あんな子供にやられるなんてね」

「しかもあの子、座っていた玉座から動いてもいなかったぞ。さぞ余力を残していたの  
だろうな……」

「余力といえば、テツカマンの姿も見えなかったな。ガセネタなら取り越し苦労で済む  
けど、本当なら相当厄介な相手という事になる……」

「死神の聖剣も奪われてしまったし、どうすんだセト？」

「どうしたものか、と状況に対し冷静に思案していると、鉄格子の向こうから何かを砕  
く音と、何人かの足音が迫って来ていた。

「何の音だ？」

「セト様！ お助けに参りました!!」

「ソルヴァたん!!」

足音の正体は、ソルヴァと村の住民の物だった。

手にした工具で、セト達の拘束を無理矢理解除する。

「すまん、助かった……所で、どうやってこの場所を？」

「実は、捕まったセト様たちを追いかけてきまして、この地下の牢屋を初めて見つけたの  
です」

「しかし、セト様は死神の聖剣を奪われてしまったままだ。このまま乗り込んで勝ち

目は……」

「いや、心配はない」

町長の言葉に、セトはしつかりとした声で答える。

「死神の聖剣は呪いの聖剣。誰でも使える訳では無い」

その証拠を見せてやろう、と続けたセトは、ブレイドとソルヴァ達を引き連れて、再び掠奪者達の待つ玉座のある部屋へと向かった。

「また来たの？ 何度来ても、お姉ちゃんたちは私には勝てないんだよ？」

棄てられた教会の中央に備え付けられた玉座に座ったままの少女、華夏は丸眼鏡に麦ら輪帽子と白いワンピースで身を包んだ、小さな女の子であった。

「死神が不意打ちで負けたと言われたら、地獄の仲間に向き出来なくてね」

「フン、剣はコチラの手にあるのよ？ 今更何をしようっていうのかしら!？」

「お前なんか剣が無かったら怖くもなんともないんじやボケカスウ！」

華夏を護る様に、手品師の男と細身の男が立ちふさがる。

手品師は死神の聖剣の切っ先をセトに向けながらせせら笑った。

「言つてなかったか？ それは死神の聖剣。手にしたものは強大な力の代償として、大

いなる呪いをその身に受ける事になる」

「呪い……？」

華夏の言葉に対し、セトはニヤリ、と口角を上げて、ゆつくりと剣を持つ手品師の方を指さした。

「死神に魅入られた者は最期の足跡がつかない。おいヒゲ、お前の足元はどうなっている？」

「なんですつて？ ……………あ。」

死神の聖剣を持っていた手品師の身体は、ふわりと宙を浮いていた。

また死神に魅入られたのだ。

「イヤアアアア何でなのオオオオオオオ!?」

「剣を手放すんじゃない！」

細身の男に言われるまま、大柄の男は無我夢中で剣を放り投げた。

すると、彼の身体は地面へと落ちる、再び死神が気まぐれを起こしたのだ。

「だから言っただろう？ 呪われているんだって」

地面に落ちた聖剣を拾いながら、セトは華夏の方へと視線を向けた。

まだ十歳を満たしているかも怪しいその少女は、死神を前にしても、その玉座から動くことはなくセト達を見下していた。

「さて……いくわよっ！」

聖剣を構え、跳躍するセト。

やはり普通の人間では考えられない程の高さまで軽々と飛び上がって見せる。

「おっ……おんどりやああああ！」

「ぬおおおおおおおっ！」

しかし、男達も最早その程度ではビビりはしない。

細身の男は手にした拳銃、手品師はトランプ、ダーツで応戦をする。が、その全てがセトの直前で静止し、そのまま地面へと落ちていく。

「なっ、なんでじゃああああ!?!」

「そんなものは効かん」

「だっ、だが！ これはどうかしら!?!」

二人の男が後退する。

男達の後ろには、セトに両掌を向けた華夏が待機していたのだ。

「炎と氷のフラグメント発動……ッ！」

ガコンッ。

「!」

セトが反応したと同時に、華夏の後ろから炎と氷の渦が発生。

間一髪直撃こそ免れはするが、爆風により大きく弾き飛ばされてしまう。

「ぐわっ!」

「セト様!」

心配そうに駆け寄るソルヴァを制し、立ち上がるセト。

派手に吹き飛びこそしたが、ダメージは少ないようだ。

(しかし、先程の音は一体……?)

「死ねやネエチャン!」

「セトー……ッ!!」

ブレイドの言葉に、一瞬間を突かれて目の前までやって来ていた細身の男の存在に気が付くセト。

銃口はセトの頭を狙い、トリガーには既に指かかっていた。

「……死神」

「!!」

ボソリ、と呟かれたセトの言葉に反応するように、大柄の男と細身の男が膝をつく。

「う、動けない……!!？」

「か、身体が、重く……!!？」

「ちよつと待つてセト……?？」

「何をしているんだお前ら……!!？」

男達の異変に気が付き、華夏は玉座から数歩離れて男達へと近づく。

「何で私まで動けなくなってるんですかね……?？」

何故か巻き込まれたブレイドに誰一人として反応する事無く、話は進んでいく。

その時だ。

轟! という音が響き、何かが崩れ落ちる音が続いた。

セトが投げた死神の聖剣が、華夏の座っていた玉座に深々と突き刺さったのだ。

「……しまった!!」

大柄の男が、カマ口調ではなく普通の野太い声で声を上げる。

「……おいガキ。何様だ貴様?？」

その手で聖剣を手放したセトは、ゆっくりと華夏の方へと歩き始めた。

その足取りには余裕すら感じ取ることが出来る。

「よせセト! 剣を手放したままニードレスに向かつていくなんて自殺行為だ!!」

味方であるブレイドの忠告すら無視し、セトは一步、また一步と華夏との距離を縮めていた。

「くっ……来るな！ 炎と氷のフラグメントでぶち殺すぞ!!」

「やれよ」

華夏の目の前で両手を広げて、セトは挑発して見せる。

「ここは弱肉強食の無法地帯ブラックスポット。掟は一つ。戦わざる者には『死』を、だ」

「……ッ!」

「使ってみるがいい。お前の力を」

「う……うう……ッ!」

「どうした？ 偉そうにしているくせに、一人では何もできないのか?」

「様子が、変……?」

華夏の様子が明らかにおかくなっていたのは、先程から戦いを傍観しているだけだったブレイドにも容易に見て取れることだった。

「な、何で華夏さんはフラグメントを使わないんだ!?!」

「使わないんじゃない。『使えない』んだ」

「どういふことだセト……!?!」



「簡単な話だ」

ブレイドの問いに、セトは答える。

「華夏は、ニードレスなんかじゃない」

「!!」

「何イロー!?!」

その言葉に、ソルヴァ達を含めた一同は驚愕した。

「じゃ、じゃあ私達が見た炎と氷は一体……?」

「玉座の裏をしてみろ」

セトに言われるまま、ブレイドは玉座の裏へと移動する。

「くっ……これは!?!」

そこには、玉座の裏に隠れる様に設置された機械がビツシリと詰められていた。

二本の筒が玉座の前の方へと伸びており、その先端部分も前からは見えぬ様、巧妙にカモフラージュされていたのだ。

「この仕掛けで氷と炎を出していたんだ。そこの髭の手品師がな」

「くっ……!?!」

どうやら凶星であったのだろう、手品師の男が膝から崩れ落ちる。

「華夏が炎と氷を出した時、何かの機械音がした。そこで気が付けたんだ。フラグメン  
トはニードレス一人に一つ……炎と氷を同時に操るなんて不可能だからな！」

「つ、つまり、我々は勝つたのか……？」

「勝つたも何も、こいつは虚構のニードレスだったんだ。最初から勝負にすらならな  
かった」

その答えに、問いかけた町長やソルヴァ達は歓喜の声をあげる。

「セト様！　ありがとうございます！！　さあ、連中にトドメを！！」

「わかった」

ソルヴァに促され、三人の前に死神の聖剣を振り上げるセト。

天に掲げられた巨大な剣が、セトによって振り下ろされ……

彼女の横にいたソルヴァを、容赦なく剣の腹で殴りつけた。

「え？」

「なっ!？」

吹き飛ばされるソルヴァを見ながら、手品師達とブレイドが素っ頓狂な声を上げる。

セト以外のその場にいた連中が状況についていけず、ただ彼女の方を静観していた。

吹き飛ばされたソルヴァの元へ、状況を理解した町長や村の住民が駆け寄っていく。「何をするんだ貴様！」

「全部分かったんだよ。街を襲ったニードレスと言うのはお前の事だな、ソルヴァ？」

「そつ……そんな事あるわけないじゃないですか！ セトさん！ 敵はあちらで

「違うな」

必死に無実を訴えようとしたソルヴァだが、その言葉は途中でセトによつて遮られてしまう。

「おかしな点は幾つかあった。まず最初。ソルヴァ達は名乗ってすらいなかった僕達の名前を言い当てた。道中、一度も名前を口にしていないのに、だ」

「そ、それは、あなた方が有名なギルドメンバーだから……！」

「そいつは光栄な話だ。しかし、まだあるぞ？ 僕とブレイドが捕まっていたのは村の地下。なのに、君達は『後を追って初めて知った』と言った。若いソルヴァが知らないならまだしも、他の大人連中が知らないのは変な話だとは思わないか？ それに、僕達と同行していたフードの三人……顔どころか、腕輪すら隠していた彼らを、君は迷うことなく『ゴッドイーターの三人』と呼んだ」

「！」

「ギルドから受けた依頼は『ニードレスに襲われた村を救え』だ。そして、現に華夏は

ニードレスではない事が証明された。これらの事から導き出される答えは一つ！」

全員の意識がセトの次の言葉を待つ中で、ゆっくりと、続きが紡がれていく。

「僕たちが来る前に村は占拠され、村人がそっくり入れ替わったんだよ」

場を包む緊張感を肌で実感できるほどに達したセトは、堂々と最後の言葉をソルヴァ達に向かつて放った。

「ソルヴァ!! お前が率いる掠奪者ブレデターによつてな!!」

「何イーーーー!?!」

「……フフ、クツクツク。ごめんなさいね、二流の芝居を見せちゃって。でも、コロシは一流だけどね☆」

最早取り繕う気すら無くしたソルヴァや住民……に扮した野党共が、徐々にその本性を表していく。

各々が隠していた拳銃やナイフに手を出し始めたのだ。

今までの優しそうな表情とは一変。血に飢えた獣の様な表情になるソルヴァ。

おそらく、こちらが本来の掠奪者のボスとしての顔なのだろう。

「確かに、お前たちの事については調べさせて貰ったよ。ギルド派遣の用心棒だからな

……で、いくら欲しい？」

それは、金ならいくらでも払ってやる。という、彼女の寛大な心の現れであったのか  
もしれない。

街の住民全てに成りすますような人間でも、仕事に対する一応の礼儀は持ち合わせて  
いた様である。

しかし、その提案を全力で否定する男が一人、この場にはいた。

「馬鹿め!! 人は金のみで生きるのではありません! 例えば彼女とか! お姉さまと

か! 後、特に妹とか!!」

「そうか」

何か壮絶なズレを感じるが、ソルヴァはそれを『交渉決裂』だと判断したようで、最  
後に一度だけ、『村人ソルヴァ』としての美しい顔を見せた。

「じゃあ死ぬ。ニードレスの力、思い知るが良い」

「! 来るぞセト!」

「その二人！ 華夏を安全な場所へ!!」

「わ、わかった!!」

手品師達は玉座の後ろにあつた扉を蹴り開け、華夏を抱きかかえたまま部屋の奥へと消えていく。

「よそ見している暇などあると思つたか！ マグネティックワールド！ 『死神の聖劍』  
!!」

ソルヴァが掌をセトへと向けてそう叫ぶと、彼女がしつかり手に持っていた筈の聖劍は彼女から離れ、瞬きする間にソルヴァの手元へと渡つてしまった。

「あぁーっ！ 劍が!! 何が起きたんだ!?!」

「私のフラグメントは特マグネティック・ワールド殊磁界!!」

「磁力の能力……!?! まっ、まっ、まっいぞセト！ 君の穿いている鉄のパンツも脱がなくて  
は!!」

「んなもん穿いてないわーっ!!」

「うふふ。貴方なんて、劍が無ければただの人間なんだよね?」

ブレイドとセトの漫才など気にも留めず、ソルヴァはマグネティックワールドの能力を発動し、周りの瓦礫を集め始める。

「死ね」

ソルヴァがその瓦礫達に何かしようとした、その時だ。

いきなり真面目神父モードになったブレイドが、静かに聖書を開いた。

「セト。死神の発動を許可します」

「ハッ！ 剣はここにあるんだよ！ これなしで死神の力とやらは使えないんだろ!？」

「いや、剣ならここにあるぞ?」

エクソシストの力により、セトに封印されていた死神の力が解き放たれる！

「ジャイルグラビティシヨンツ!!」

「!!」

セトは振り上げた手刀を容赦なく振り下ろす。

すると、死神の力が働き、住民に扮した野党はその一撃を持って地面に叩き付けられ

た!!

「ソ……ソルヴァさ……ま」

何の抵抗も、と言うか見せ場すらなく、野党の雑魚共は沈黙してしまう。

「そう……やっぱり、これが死神の聖剣なんてのは、嘘だったのね?」

手にした剣を地面に投げながら、ソルヴァはニタア…と口角を上げて笑った。

そんな彼女に負けない程、セトも悪人の顔をして答えて見せる。

「その通り。僕は重力生成グラビティンのフラグメントを持つ、ニードレスだ」

「わざわざ隠す必要があったの?」

「あるさ。君みたいなマヌケな悪党を引っ掛ける為にね」

さあ、と続けながら戻ってきた剣を構え直すセト。

「覚悟してもらおうかソルヴァ!!」

「フン、では、私は悪党らしく人質でも調達させて貰おうかなあ!!」

ソルヴァのフラグメント、マグネティックワールドは特殊な磁界を発生させる事により、彼女の半径100メートル圏内の物なら何でも吸い寄せる事が出来るのだ。

そう、距離の条件さえクリアしていれば、彼女にとって壁など文字通り障害にすらならないのだ。

「マグネティックワールド! 『華夏』!!」

「きゃああああああ!!」

「かつ…華夏様!?!」

ソルヴァのフラグメントにより吸い寄せられた華夏は、その小さく細い首をソルヴァに捕まれてしまう。

「ぐう……ッ!」

「貴様!!」

「おっと、動くなよ! 一歩でも動くと、この小娘の命は無いと思え!!」



抵抗する事すら許されなくなったセトは、聖剣を地面に落として、とりあえず抵抗の意思がない事を示す。

「ニードレスがそんな事で油断すると思ったか！ マグネティックワールド反発<sup>アンチ</sup>！」

ソルヴァの持つマグネティックワールドには二種類の技があり、一つは吸い寄せの技。

そしてもう一つは、逆に近くの物を反発させて飛ばすことが出来る能力だ。

その力によってソルヴァから反発するように、サイズがサッカーボール程もある瓦礫がセトの方へと飛んでいき、彼女の無防備な腹部へと直撃する。

「ぐっ！ かはあ……！」

「セト！」

「お姉ちゃん!!」

「ハッハッハ！ 所詮、私のフラグメントの前では無力だったって事だ!!」

倒れたセトの元に、ブレイドが駆け寄る。気絶してしまっただけなのに、今すぐに命に關わる事はなさそうだ。

「さて、残りの雑魚は、一瞬で片付けて上げるからね。君のお父さんや、村の皆みたいに」「チッ！ こうなれば、私のフラ

「待ちなさい!!」

その声は、今まで聞いた事のない少女の声だった。

華夏が隠れていた部屋の方から、その声の主はゆつくりと近づいてくる。

「誰だお前は……?」

「ツッ! ダメだよミユキお姉ちゃん!!」

「大丈夫よ華夏ちゃん。私が、必ず助けるから……!」

ミユキと呼ばれた黄緑色の髪の毛の少女は、勇ましく声を上げながら登場したものの、全身から汗を噴き出しながら荒い息を吐いていた。

「脅かしやがって。死にぞこないの雑魚が一人増えただけで、何ができるって言うんだ!?!」

「私は死なない……タカヤお兄ちゃんに会うまでは、絶対に死ねない! そして!!」

ミユキは、隠し持っていたピンク色のクリスタルの取り出し、前に構えた。

「私を助けてくれた華夏ちゃんを、見捨てる事も出来はしない！ テック・セッターツ  
!!」

ひし形の横に二つ三角のクリスタルを付けた様な特異な形をした宝石が、ミュキの叫びに応じて怪しく光り、彼女の身体を包み込む。

「まつ……まさか!？」

「テツカマンレイピア!」

## 神喰らう者と死神の聖剣（4）

光の奥から現れたのは、ホワイトとピンクの鎧に身を包んだ戦士、テツカマンレイピアだった。

「テツカマンレイピア!? 新しいテツカマンか!」

「チッ! この辺に目撃情報があった事は確認済みだったが、まさかこんな所に居るとはな!!」

「テックランサー!!」

テツカマンレイピアは細剣型のテックランサーを取り出し、ソルヴァに向かって突撃をする。

「マグネティックワールド反発! 『テツカマンレイピア』ア!!」

地球外存在であるテツカマンに対しても、フラグメントは有効であり、テツカマンレイピアは特殊磁界によって後方へと吹き飛ばされる。

しかし、彼女も無策で突撃した訳では無かった。

フラグメントの発動中で動けないソルヴァに、容赦なく細剣を投擲。

彼女の頭部を狙った。

ラダム獣やアラガミすら一撃で屠るその凶悪な一撃がソルヴァへと襲い掛かる。

「マグネティックワールド反発！ 『床』!!」

続けざまにフラグメントを使い、マグネティックワールドを床に向かって放つソルヴァ。

質量の差により床が反発することはなかったが、その反動を利用し一瞬でその場から跳躍。

テックランサーの一撃を回避した。

「きゃあああ!?!」

「しまった！ 人質が!!」

テッカマンレイピアの奇襲を回避した事に油断してしまったソルヴァは、生命線として後生大事に抱えていた華夏を手放してしまう。

重力に従い、華夏の小さな体が地面へと自由落下を開始した。

「マグネティックワール テックワイヤー!!」

ソルヴァがフラグメントで再び人質を取ろうとするが、今度はテッカマンレイピアの方が早かった。

レイピアの手首から伸ばされたワイヤーが華夏の身体に巻き付き、マグネティックワールドが発動する前に後方へと下がらせる。

「ミユキお姉ちゃん……!」

「もう大丈夫だからね華夏ちゃん。華夏ちゃんは、私が、まも……る……!」

「お姉ちゃん!」

優位に立っている様に見えたテツカマンレイピアが突如、膝をついて体勢を崩してしまふ。

華夏がレイピアの顔を覗くと、仮面の下には滝の様な汗を掻いている、素体テツカマンと呼ばれる状態に変身したミユキの姿があった。

テツカマンとして活動するにはかなりの体力を消耗する。

元々弱っていたミユキでは、数分も満たない活動でも命を落とす危険があったのだ。

「マグネティックワールド反発! 『死神の聖剣』!!」

「きやつ!」

更に追い打ちをかける様に、ソルヴァのフラグメントによつて飛ばされた死神の聖剣が、テツカマンレイピアの腹部へと容赦なく突撃した。

「大丈夫か!」

目に見えて様子がおかしいテツカマンレイピアを気遣い、ブレイドも彼女の元へと歩

み寄る。

「チツ、その剣。刃の部分はただのなまくらだったらしいわねッ！」

刺突能力皆無の剣に怒りを募らせたソルヴァが天井に手を掲げると、呼応するように瓦礫がゴトゴトと音を立てながらゆっくりと移動を始める。

「……わ、私が、私がミユキお姉ちゃんを守るんだ……！」

身の丈以上の死神の聖剣を持ち上げようと、華夏は剣の柄に手をかける。

しかし、純粋な鉄の塊とも言えるその剣は、小柄な少女が持つには重く、地面から少し離すのが彼女の限界だった。

「バカじゃないの華夏ア！ その剣は死神の力なんてない、ただの鉄の塊なのよ!!」

「えっ……!?!」

セトが重力のフラグメントを操るニードレスであった事を知らなかった華夏が、驚愕と恐怖の入り混じった表情を見せながら、少し浮いていた剣を離してしまふ。

「さあ、このまま仲良く地獄へ葬ってあげ「バカなどではありませんよ、華夏。さあ、もう一度死神の聖剣を手にするのです」

「う、うん……」

ブレイドに促されるまま、華夏は再び剣に手を伸ばす。

すると、先程までは少し動かすのが関の山だった巨大な剣が持ち上がり、その切っ先

がソルヴァアへと向けられた。

「どうせまた仕掛けがあるんだろうがっ！ マグネティックワールド反発！ 『瓦礫』!!」  
「無駄ですよ」

そう告げたブレイドの言う通り、ソルヴァアのフラグメントによって飛ばされたはずの瓦礫は三人の中央で静止し、ゆっくりと地面に落ちていく。

「バツ、バカな!? これは重力のフラグメントですらない!? これじゃ、まるで私の……」

「むやみやたらにフラグメントを使いすぎましたね。『覚えられて』しまった様です」

「覚え……? まさか、テメエもニードレスか!？」

「……死神が気まぐれを起こして、華夏を助けたのさ」

「セト!」

「お姉ちゃん!」

ブレイドとは反対側で華夏を挟む様に現れたセトは、未だよろめきながらも、華夏の横でしつかりと大地を踏んだ。

「さあ、華夏。僕の重力のフラグメントと、聖剣が『覚えた』磁力の力で、共にあいつを懲らしめようか」

「うん……!」



セトに肩をポンと叩かれた華夏は、大きくはつきりと頷き、ソルヴァに対して激しい怒りの眼をぶつけた。

「村をめちやくちやにして、ミユキお姉ちゃんやセトお姉ちゃんを傷つけた報いを受けてもらうから！」

「華夏、死神の発動を許可します。セト！」

「任せとけて！」

「チツ！ マグネティックワールドオ！」

「『ジャイルグラビティシヨンプラスマグネティックワールド!!』」

二つの力が交錯する。

しかし、その力は圧倒的に差があり、不利な方……ソルヴァはすぐに後ろの壁の方へと追いやられてしまう。

「噂に聞いたフラグメントを『覚える』ニードレス……まさかお前の事だったのか!!」「違うな」

ソルヴァの言葉を、ブレイドがきっぱりと否定し、続く様にセトがニヤリと笑って言葉をついだ。

「この聖剣は、たった今本物になったのさ……華夏の勇気だな!!」

「うおおおおおお!!」

「判決……ッ!」

ソルヴァアのマグネティックワールドが完全に撃ち負けると同時、ブレイドが胸の前で大きく十字架を切り始める。

「しけ「うわああああああああどいてどいて落ちるうううううううううううう!!」

死刑、と言い終わる丁度そのタイミングで、天井から少女の声が轟き、そして言葉通り、アラガミに神機の剣先を突き刺した少女、レナが落ちてくる。

ソルヴァアの丁度真上へと。

「え?」

【6】

「なんで私まで……」

そうボヤキながら、教会の天井を盛大にぶつ壊した新米ゴッドイーター有栖レナは、ソルヴァア掠奪者一行と共に壊れた村の復興作業に当たっていた。

セト達に負けた彼女らは「心を入れ替えた」と言つてフェンリルギルドへの協力を約束してのた。

最もソルヴァアはセトに「私の磁力とお前の重力を合わせてブラックスポットを侵略しよう」と言つて仲良くなつていたので、あまり信頼できないと言えば出来ないのだが。

「元はと言えば、人が居ない所に誘おうつて言つたコウタ君が悪いんじゃないの……？」  
「ごめんごめん。まさかあんなオンボロ教会の下に人が居るとは思わなかつたからさ」

少しは反省しているのか、レナの横で一緒に廃材を片付けるコウタ。

一方、リンドウの方は我関せずと木陰でタバコを吹かしながらボーっとレナ達の労働を見守つて一歩も動いていなかった。

「やー、若いのはよく働くなあ」

「あれ、リンドウさんもやらないんですか？」

「え？ だつて俺何もしてないしなあ」

「……コウタ君の提案後押ししたの、リンドウさんですよね？」

「おっと、俺は周囲の警戒をしなきゃならんので、後よろしく。いやあ、今日は忙しい」  
レナやコウタが抗議する前に、リンドウは神機をひよいと担いで何処かへと走り去つ

てしまう。

「あーっ！ 逃げた!!」

「オラそこオ！ 無駄口叩いてる暇あったら働きなア!!」

「はいい!!」

マグネティックワールドの能力で瓦礫や木材を移動させていたソルヴァから怒号が  
あがり、それにビビったレナとコウタは元気に復興し作業へと戻るのだった。

レナとコウタ、ソルヴァらが元気に働いている時、セトとブレイドは華夏と部下の二  
人、ミユキの四人に連れられて教会の奥、裏へと抜ける大扉の前へと案内されていた。

「よくやってくれた葬儀屋。ほうびをやろう」

「いや、俺ら葬儀屋じゃないんだけど」

「良いじゃないか。褒美は褒美。きつちり頂こう」

凄く平穏な声でブレイドを制するセトだが、その目は「ほうび」と聞いてテンション  
を抑えられない金の亡者の鱗片を見せていた。具体的に言うと、目の形が金貨に見えた  
り、そんな感じである。

ドアが開かれる。

「これは……!?!」

「花、畑……?」

セトらの眼前に広がっていたのは、澄んだ青空の下に広がる、小さな花畑だった。植えられているのはヒマワリで、太陽の光を気持ちよさそうに浴びている。

その他にも、数こそ少ないが、色とりどりの花が辺り一面に咲き乱れていた。

「この辺りは第三次大戦後の汚染が少ない上に、ラダムやアラガミも滅多に現れないので、こうして植物が元気に育つんですわ」

手品師の男が呆然とする二人に解説を始める。

このブラックスポットだけではなく、今の地球上では人類だけでなく動植物も激減しており、このような風景はとても稀なのだ。戦後にニードレスの様な特異な人間を吐き出し続けたブラックスポットに生まれた、小さな奇跡だ。

「この場所は村を追われた華夏様が盗賊に身をやつしてまで守ろうとした、亡くなった父上様との思い出の地なのですわ」

「……金にならん褒美だ」

「……と続けるセト。」

その目線の先には、花畑の中で負けない程眩しい笑顔を見える華夏とミュキの姿があ

る。

「こういうのも、たまには悪くないかな」

無邪気に笑う二人の少女を見て、荒廃したブラックスポットで生きていくセト達の胸に一時の安らぎが訪れるのだった。

(続く)

## 銀河の天使と宇宙の騎士（1）

〔1〕

— 『同盟世界トランスヴァール』 エンジェル隊基地 —

地球から、遠く、遠く。それこそ、幾つもの『世界』を跨いだと遠い場所に、その『世界』は存在した。

その世界に名前はない。だが、その世界は一つの星の元、全宇宙が統治されている事から、他の『世界』からは、こう呼ばれていた。

トランスヴァール。

かつて白き月、ポジティブムーンを始めとした超高度な、それこそ魔法にも見える科学文明を築いていたその世界は、遙か昔、クロノクエイクと呼ばれる未曾有の大災害によつて、一度はその文化レベルを大きく衰退させる事になる。

EDEN<sup>エデン</sup>と呼ばれた星間文明は崩壊するも、この世界にはその時代の遺物、通称『ロストテクノロジー』が多く眠っていた。

全く用途不明の、というか存在価値すら見出せないガラクタや、星一つ破壊できるほど危険な兵器など、ロストテクノロジーには多種多様なものが現在も発掘され続けている

る。

文明崩壊より数百年が経った今現在、この世界は白き月の巫女『シャトヤーン』の加護を受ける惑星『トランスヴァール皇国』が全宇宙を統治していた。

そして、そのロストテクノロジーを捜査、回収保存をするのがトランスヴァール皇国近衛軍所属の特殊部隊『ギヤラクシーエンジェル隊』なのである。

「おや、皆さんお揃いですね」

トランスヴァール皇国衛星軌道上、通称『エンジェル隊基地』。

ギヤラクシーエンジェル隊が普段集まるエンジェルルームにて、集まった五人の少女と一個のぬいぐるみに、白い髭を蓄えた初老の男は話しかけ始めた。

彼の名はウォルコット・O・ヒューイ中佐。

一応、ギヤラクシーエンジェル隊の上司という事になっている男性だ。

普段から昼行灯な行動が目立つ彼ではあるが、昔は『白き超新星の狼』と恐れられる優秀な皇国軍人であつたらしい。

「今回のお仕事は少し特殊な任務となります」

「特殊な任務う？」

黒の軍帽に赤い髪の女性、フォルテ・シュトーレン中尉が気だるそうに答える。



男勝りな性格で大の銃器マニアの彼女は、しかしエンジェル隊で一番スタイルが良い長身の美人だった。

隊長と言う立場にはあるが、モノクルの奥から見える眼光は、どうもやる気とは無縁の表情であった。

「あの……フォルテさん？ どうしました？」

「どうしたもこうしたもないよお！ 折角の休暇にいきなり呼び出しといて、気分が悪い訳ないじゃないのさあ!!」

恐る恐る質問するウォルコット中佐に対し、フォルテは椅子に深く腰をおろし、足を組んだ格好で反抗の意思を見せる。

階級的には圧倒的な差がある二人だが、この部隊内では特に珍しくない風景だった。

「私達に急ぎで回ってくる任務って大方、変なのとかしかかないじゃない」

ブロンド髪の女性、ランフラ蘭花・フランボワーズ少尉も、読んでいたファッション誌からたまに目を離し、会話に参加する。

その声はフォルテ同様、やる気のないものだ。赤いチャイナ服の上からエンジェル隊の制服を羽織っていた彼女は、武術の達人でもあるらしい。

「猫探しにゴミ掃除なんてお仕事ばかり。これではわたくし達はロストテクノロジーを回収する特殊部隊というよりパシリですわ」

青い髪の少女、ミント・ブラマンシュ少尉も、会話こそ真面目に聞いてはいたが、前の二人同様にやる気のない返事だった。

耳の上に生えたウサギの垂れ耳の様な物がミントの声に合わせてヒョコヒョコと揺れていた。その耳は人の心を読むと言うが、本人はあまりこの能力を快く思っていないらしい。

『全く、フォルテさんも蘭花さんもミントさんもだらしありませんね。もつとヴァニラさんを見習っておしとやかに、礼儀正しく美しくいる事は出来ないんですか？ ねえ、ヴァニラさんもたまにはガツンと言わなければいけませんよ!』

「……今日は人にガツンと言ってはいけない日なので……」

ピンク色で熊なのか何なのか分からないぬいぐるみのノーマツドの毒舌に、ライトグリーン色の髪を縦ロールにし、金属製のヘッドギアを付けた少女、ヴァニラ・H（アッシュ）少尉は短く答えた。

ヴァニラに関しては非常に口数が少なく、彼女の信仰する宗教の謎の戒律により度々奇行に走る以外、一切適切が謎に包まれた少女だ。とても謎に包まれているのだ。

因みに、ノーマツドの本体はぬいぐるみに内蔵された人工知能の端末で、元はロストテクノロジーである太古のミサイルに積まれていたものだ。

「あつ！ そう言えば、お茶の用意がまだでしたね！」

唯一ウォルコット中佐の話を真剣に聞いていたつばい少女、ミルフィーユ・桜葉少尉が唐突に席から立ち上がり、いそいそとお茶の準備を始める。

ピンクの長い髪の上に花の髪飾りをつけたミルフィーユはお菓子作りが趣味で、よくギヤラクシーエンジェル隊の皆にもその腕前を披露しているのだ。

だが、彼女の最大の特徴はその運の強さだった。だが、同時に強すぎて幸運と凶運の両極を持つ、エンジェル隊の爆弾でもある。

「はい、ウォルコット中佐もどうぞー！」

「ああ、いつもすいませんねミルフィーユさん……いや、そうではなくてですね？」

ミルフィーユに手渡されたティーカップを机に置き、ウォルコット中佐が話を続けようとする。

「今回はトランスヴァール皇国……いえ、この全宇宙に関わる深刻な事態なのですよ」  
「……なんだい、いつになく真剣じゃないか中佐」

珍しく真面目な顔をしているウォルコット中佐に対し、フォルテも真剣な眼差しで応える。

「皆さんは『時空管理局』や『ミッドチルダ』という言葉聞いた事がありますか？」

「ない」

「ないね」

「ないですわ」

「……」

『ヴァニラさんも知らないらしいですよ。まあ、僕ですら知らないのですから、ヴァニラさんは気を落とす事はありませんよ!!』

「え？ ミートパイが何ですか？」

「まあ、そうでしょうな」

はつきり否定されることを織り込み済みだったウォルコット中佐は、そのまま話を続ける。

「実はこの宇宙とは別の世界が無数に存在し、その次元の海を統括するのが『時空管理局』。そして、その本国とも言えるのが『ミッドチルダ』と言うらしいです。最も、私もつい先日上層部からお聞きしたのですが」

「そんな大層な組織が存在したなんて、全く知りませんでしたわ」

「ええ。軍の上層部は昔から認知していたそうなのですが、どうやらこの世界の広さと軍事力の観点から『管理世界』や『管理外世界』とは別枠の『同盟世界』扱いで、今まで最低限の交流に留まっていたそうです」

「で、そんな時空管理局ってのと、私達にどんな関係があるんですか？」

読んでいた雑誌を横に置きながらウォールコット中佐に質問する蘭花。

空いた手がミルフィーユの淹れた紅茶に伸びていた事から、話に興味がわいたとかではないようだ。

「ジェラルド皇王陛下がその地位を退かれ、シヴァ皇女陛下に変わった事で皇国上層部内にいた交流推進派が勢力を拡大致しまして。管理局との交流の一環として別世界のロストログア……ああ、あちら側でのロストテクノロジーの名称なのですが、ともかく、その合同捜査をしたいと」

「ほお。別世界の私達みたいな部隊か！ そりゃ、俄然興味が湧くねえ！」

「奇遇ですねフォルテさん。私もですよ！」

フォルテと蘭花が席を立つのとはほぼ同時、他のエンジェル隊も次々と席を立ち始めた。

「良いですか。これはトランスヴァール皇国の歴史が始まって以来初めての、正式な異世界交流です。当然、優秀な特殊部隊であるギャラクシーエンジェル隊の皆さんには、皇国を代表した真摯な対応を……」

「他の世界のお菓子って、一体どんなのがあるんでしょうね〜」

「良い男良い男良い男良い男………異世界で良い男をゲットしてやるわあーッ！」

「この宇宙では存在しない銃を手に入れる機会があるんだろう？　良いじゃないか！」

「フフ、異世界にはどんな素敵なきぐるみがあるのでしょうか。わたくし、楽しみで仕方がありませんわ！」

「わんこそば」

『ああ、とても楽しみで仕方がないんですねヴァニラさん！　どこまでもお供しますよ  
!!』

「……………」

やる気になってもらったのは大変結構な事ではあるのだが、ウォルコット中佐の内心は不安で仕方がなかった。

未知との遭遇とも言えなくもないこの貴重な重要な任務に、このギャラクシーエンジェル隊を行かせて、本当に大丈夫なのだろうか、と上司ながらに思うのだった。

最も、上層部も上層部で派遣部隊をくじ引きで適当に決めたというし、その天文学的な確率の引きをミルフィーユの強運で当ててしまったのだろう。

(これが吉と出るか、凶と出るか……)

夢と妄想が膨らみ、暴走を始めたギャラクシーエンジェル隊のメンツを見ながら、

ウオルコット中佐はミルフィューが淹れてくれたお茶に今日初めて手を伸ばす。

（頼みますよ娘達。今回の任務、ずっといつものノリで行けるとは思いませんからな……）

そう考えつつも、ウオルコット中佐はあまり深く意識はしていなかった。

飲んでいたお茶の上に、立派な茶柱が立っていたからだ。

今回も、トラブルは起こしても無事に帰ってくるだろう。

何かあっても来週の放送には無かったことにされるのだ間違いない。

何故か紅茶の上に立った茶柱を横目で見ながら、興奮状態がピークに達し、ノーマツドでバレーボールを始めたエンジェル隊を見ながら、彼は最後の一滴までお茶を飲み干した。

「ああ、そう言えば中佐、私らがない間、トランスヴァールの平和と秩序はどうするんだい？」

「そちらの方は、エンジェルツイスター隊が担ってくれるそうですよ。まあ、ぶっちゃけますとトランスヴァール出てくるのこの話だけなので、つまりそういう事ですな!!」

今日もトランスヴァールは平和である！

## 銀河の天使と宇宙の騎士（2）

〔2〕

— 『第97管理外世界地球』 大気圏外オービタルリング周辺—

『へえー。これがチキユウですかー』

『見た目は普通ね』

ミルフィューと蘭花が通信越しにワイワイ言いながら、眼下に広がる青い星を眺めていた。彼女らは今、紋章機エンジンフレームと呼ばれるロストテクノロジーで作られた専用の戦闘機にそれぞれ搭乗していた。銀色のフレームに個人に合わせたカスタマイズが施されている。

ミルフィューはピンクのボディにレールガンを装備した一号機『ラツキースター』に、蘭花はシャインレッドのボディにアンカーアームをセットした二号機『カンフーフアイター』に、

ミントはライトブルーのボディに高度なセンサーを取り付けた三号機『トリックマス  
タ



ー』に、

フォルテはディーブパープルのボディにミサイルやキャノン等、武器をふんだんに搭載

した四号機『ハッピートリガー』に、

ヴァニラはライムグリーンのボディに補給や回復用の装備を取り付けた五号機『ハーベ

スター』に、それぞれ搭乗している。

「私的には、星を取り囲むこいつに興味があるねえ」

フォルテが指さした先には地球を取り囲むように円形に繋がった人工物が存在した。

この星の住民でない彼女らには分からぬ事であったが、この人工物は丁度、地球の赤道の上をなぞる様に浮かんでいるものだ。

『何でございましょう？ この星の物だとは思うんですけども』

「ああ、これはオービタルリング……という名前でしたかな」

「オービタルリング？」

「確か宇宙開拓への前線基地として開発されたものだと言いましたよ」

フォルテの問いに、ウォルコット中佐は応える。

ウォルコット中佐は一人、フォルテの乗る紋章機のコックピットにサブシートを作っ

て座っていたが、これは彼専用の紋章機が存在しないからだ。

紋章機はロストテクノロジーという事もあって絶対数に限りがあるのと同時、特別な条件を満たしたものにしか使用することは出来ないのだ。

『宇宙開拓がまだ始まっていないという事は、この星の文明レベルは相当低いということになりますね。本当にこんな所に我々が出張ってくるようなロストテクノロジーがあるとは到底思えません?』

「それを言われましてもノーマッドさん、元々ここは先方である時空管理局の管轄ですから、詳しい事は……」

『つていうかさ、その肝心の管理局? とかいう連中いないじゃない!』

『わたくし達を右も左も上も下も分からない宇宙のど真ん中で待たせるなんて、全くもって非常識極まりないですわ! ぶんすかぷーんですわ!』

『えー? でも見てると結構面白いですよ? ほら、すぐそこに虫さんの群れも見えますし』

『『え?』』

蘭花とミントが間抜けな声を揃えたのと、ミルフィューが見た「虫さん」が明らかに彼女達に向って突撃している事を認識したのは、ほぼ同時だった。

『なっ、何ですのアレ!?!』

コックピット内のモニターのカメラ倍率を調整し、その姿を確認したミントは、そのおぞましい形相に思わず仰天してしまふ。

緑の白の身体からは何本もの爪のような突起物が突き出しており、顔と思われる部分にはある幾つもの赤く光る眼がまっすぐに彼女らを捉えていた。それもミルフィークが『群れ』と言ったように、一体ではない。ざっと見積もっても三〇体は存在していた。『もしかして、あれがチキユー人さんでしょうか？』

『だとしたら未知との遭遇も良い所よ!』

『えー? でもお手軽ビームとかでお友達に……』

『なれる訳ありませんわー!』

兎にも角にも、と命の危機を感じたギャラクシーエンジェル隊の乗る紋章機は謎の昆虫型生命体から距離を取る様に後方へと進み始める。

「友好的な連中には見えないね! 悪いけど叩き落とすよウォルコット中佐!」

まあ、仕方ありませんな。と一呼吸置いたウォルコット中佐は、モニター越しに指示を待つギャラクシーエンジェル隊の面々の方へと視線を向けた。

「ギャラクシーエンジェル隊、あの謎の生命体への攻撃を許可し「よっしやーッ! そうと決まれば先制あるのみだ! 私とミルフィークが適当に撃って数を減らす! ミントは私達の照準補佐! 蘭花は討ち漏らした敵への迎撃! ヴァニラは蘭花を援護し

てやりな!!」

『『『了解!』』』』

フォルテに指示に従い、各紋章機達は機首を一八〇度回転させ、後ろから迫ってくる昆虫型生命体と真正面から対峙する。

「え、あのフォルテさん。私の格好いい見せ場が……」

『おや、フォルテさんって隊長っぽい事できたんですね』

「なんか言ったかいノーマツドオ!?!」

「見せ場……」

『なっ、何でもありませんよ何でも! あ! ヴァニラさん! 敵が近づいてきていますよ!』

『……』

『……底知れぬ悪意を感じます……』

「みせ……」

ギャラクシーエンジェル隊の一系乱れぬ連携により、謎の生命体は数分もせぬ内に全滅した!

「ああ……私の見せ場が……」

【3】

「なあーんだ。楽勝じゃなくい！」

緊張して損しちゃった、と蘭花は紋章機のコックピットの中で大きく伸びをした。

『完全にビジュアル負けしてましたわね』

『他の世界で紋章機が上手く動くか心配だつてけど、この分だと問題なさそうだねえ』

フォルテはそう杞憂してはいたが、その理由は紋章機が先代文明の遺したものをそのまま使っている所謂骨董品だからだ。

しかし、その戦闘力は一機で現在のトランスヴァール皇国標準の宇宙戦艦一隻と同等の力を持っていると言われており、おそらく少々不備があつた程度では負ける事はまづなかつたであろう。

『これくらいなら、もっと強いのが来ても大丈夫そうですね』

「あのねミルフィーユ。私達はこんな虫野郎と宇宙で追いかけてこんなんで真つ平ごめん  
で……」

『おかわりです……』

『ッ！ レーダーに反応あり！ 先程よりも小さい個体が二つ、高速でこちらに接近してきますわ!!』

ミントの乗るトリックマスターから映像が送られてくる。

先程の虫とは違い、人の形をしたそれは、瞬きする間に蘭花達の前に現れる。

「ほらミルフィューユ言わんこつちやない！」

『え〜！ 私のせいなんですかあ〜!?!』

ミルフィューユの『凶運』が招いた結果であるかもしれないと思つた蘭花だが、その事を口にする事なく、グリップを握る手に力を込めた。

操縦者の思考を読み取り稼働する仕組みの紋章機にとつてその行為はあまり意味のある事ではないが、そうせざるを得ない程の緊張が彼女を包んでいたのだ。恐らく、それは残りのエンジェル隊も同様なだろう。軽口がピタリ、と止んだ。

「……なんだ、貴様らは？」

全身をアーマーで包んだ人型の内の一体、ダークグリーンで丸みを帯びたボディに弓の様な武器を持つていた謎の生命体は、男の声でそう問いただしてくる。

顔の左半分には大きな傷の様な物があり、そこから昆虫型生命体と同じ、赤い色の目が殺意を隠す事無く漂わせていた。

『私達は、ギヤラクシーエンジェル隊で〜す!!』

一人緊張とはほぼ無縁だったミルフィューユは軽く応える。

「ギヤラクシーエンジェル隊？ 何かは知らんが、ブレードの他にラダム獣をこうも簡単に倒せる存在をみすみす逃す訳にはいかないな！ やれ、テッカマンダガー！」

テツカマンダガーと呼ばれたアーマーに指示を出したのは、もう片方のアーマーだった。

ダガーとは対照的に全身が鋭利に尖っており、赤と黒のカラーリングも相まって悪魔と表現するにふさわしいデザインをしていた。

「了解です。エビル様!!」

『来るよ皆！ 散開!!』

「遅いー!」

フォルテの指示が来た時には既に、テツカマンダガーは弓の様な武器を構え、蘭花の乗るカンフーフアイターへと突撃を開始していた。

「こなくそ…っ!」

カンフーフアイターはギャラクシーエンジェル隊の使用する紋章機の中で一番近接格闘戦に優れ、小回りも効く機体だった。

しかし、それは『戦闘機としては』という括りの中での話なので、人間の成人男性より少し大きい程度のサイズのテツカマンダガーに小回りで勝とうというのは土台無理な話であった。

初めこそ距離を取ることに成功するものの、すぐに距離を詰められてしまう。

「ちよつと！ なんて私ばかり狙うのよオー!?!」

「赤と白！ その色が気に食わない!!」

「そんな意味不明な理由で負けてなるもんですかーッ！」

感性を無視した急転進から続けて、アンカーアームをテツカマンダガーに向け、発射する。

ワイヤー付きのアームは正確にテツカマンダガーのいる場所に向かって射出されるが、テツカマンダガーは速度を緩め、身を捻りながらこれを回避してみせた。

「嘘オ!？」

「そんな遅い動きでは、ラダム獣は仕留められてもテツカマンには掠りもせんぞー！」

懐に入り切ったテツカマンダガーは、弓型の武器を振り上げる、よく見ると、形こそ弓だがまるで刀を上下につなげ合わせた両刃になっていた。

それは近接戦も視野に入れられていたのだろう。バリアで凌げるかもしれないと思った蘭花の思考が一瞬止まり、その隙にカンフーフアイターとテツカマンダガーの距離が一気に縮んでしまう。

「まずは、一っ！」

『蘭花さん!!』

「チッ！」

コックピットへの直撃だけは避けるべく、機体を横へ大きく逸らそうとした、その時



だ。

「クラツシユ！ イントルード!!」

「何!?! うわああああ!!?」

カンフーフアイターの目前まで迫ったテツカマンダガーは、横から現れた一条の光によつて蘭花の視界からその姿を消した。

「今度は何よ!?!」

伸びきったアンカーアームを回収しながら、光の先をモニターで追いかける蘭花。そこに居たのは……。

「テツカマン！ ブレード!!」

青い人型ロボの背中に立って現れたソレは、赤と白のアーマーに身を包んだテツカマンだった。

【4】

「テックランサー！」

テツカマンブレードと名乗った男は、両肩から飛び出した二本の剣の柄頭を合わせて両刃の槍にすると、二体のテツカマンとギャラクシーエンジェル隊の間に入った。

「現れたな裏切り者ブレード！」

先程までカンフーフアイター相手に余裕の態度を見せていたテツカマンダガーの声  
が、憎しみを帯びる。

「まだ死んでなかったのかフリッツ！ いや、テツカマンダガー!!」

「当たり前だブレード！ この顔の傷の恨み、果たすまで地獄にはいかんぞ!!」

「俺も貴様等ラダムを一人残らず消し去るまで死ぬつもりはない！ 行くぞ、ペガス!!」

『ラーサー!』

青い小型ロボ、ペガスがバーニアを吹きダガーへと距離を詰める。

「うおおりやああつ！」

「はああつ！」

二人のテツカマンが何度も交差し、その度に両者の武器から甲高い音が鳴り響く。

何度目かの接触の後、ダガーは弓型のテックランサーを形通り弓の様に構えた。

「この距離なら回避出来まい！」

弓型のテックランサーから矢状のエネルギー弾は何発も連射され、テッカマンブレイドの方へと飛んでいく。

これこそテッカマンダガーの必殺技、コスモボウガンだ。

「ちえりやあああつ！」

しかし、この技は一発一発では大した威力はない。テッカマンブレイドは冷静にテックランサーを前方に突き出し、コマの様に高速で回転させる事によってその全てを弾き返す。

「なんだと!？」

「トドメだ! ボル……ッ!？」

「PサYイボルテッカアアアアツ!!」

テッカマンブレイドがテッカマンダガーに必殺の一撃を打ち込もうとしたその時、両者を阻むように赤黒い光が放たれた。

間一髪逃れたテッカマンブレイドはすぐさまペガスに指示を送り、その場から離れる。

「まさか俺が手を出さないとでも思ったのかブレイドオ！」

「チツ! エビルか!？」

「これ以上貴様と遊んでいては、地上のラダム樹への被害が広がってしまう! 名残惜

しいが、一気に殺してあげるよタカヤ兄さん！」

「ッ！ シンヤアアア!!」

テツカマンブレードとテツカマンエビルが持つお互いのテツ克蘭サーが真正面からぶつかる。

ダガー戦とは打って変わって、力任せの体力勝負だった。

「どうした兄さん！ 兄さんの大好きな兄弟愛はどこにいったんだい!？」

「俺にはもう親も兄弟もない！ 貴様等ラダムに殺された!!」

テツカマンブレードの怒りの声と共に、徐々にではあるが力の均衡が崩れる。

「ブレードオ！ 俺は、貴様だけにはアアア!!」

「おおおおおおお!!」

「まだ俺との勝負は着いていないんだぞブレード！」

何人たりとも入る余地なしと思われたブレードとエビルの前に、テツ克蘭サーを構えたテツカマンダガーが現れる。

そのまま無防備なテツカマンブレードの横腹に、容赦なくランサーを突き刺した。

「ぐわあああ!!？」

「死ねえブレードオ!!」

いくらテツカマンが強大な力を持つとも、二対一の戦いでは当然テツカマンブレ-

ドは不利だ。

しかし、この場に居たのはテツカマン達だけではなかった。

宇宙の騎士達の頭上で、銀河の天使達が舞う。

『やつと動きを止めたわね！』

テツカマンブレードと同じ赤と白の戦闘機から女性の声が響く。

テツカマン達はその声を認識した時には、既にその大きな金属の塊は眼前へと迫っていた。

その正体は、蘭花の乗る紋章機、カンフーフアイターのアンカーアームだ。

すばしっこく動いていたテツカマンダガーが動きを止めたのをチャンスと感じた彼女の奇襲により、ダガーをアームでキャッチ。そのままブレードから無理やり引き剥がす。

「しまったあ!？」

『よいしょおおおおおおおっ!!』

ダガーを掴んだまま移動していた蘭花は、カンフーフアイターを急停止させる。

流れる様にアンカーが振子の如く慣性の法則に従い大きく弧を描く。

その先には、全兵装のチャージを完了した、四機の紋章機の姿があった。

『よくやったね蘭花！ 後は任せな!!』

『わたくし達をビツクリさせた罪、その命を以て償って貰いますわ!!』

『神の世界への引導を渡します……』

『どかーんと派手にやっちゃいますよ〜!』

「やつ、やめろ！ うわああああああああ?」

戦艦四隻と同等の火力が一点に絞られ、テツカマンダガーへと降り注ぐ。

いかに強力な装甲に覆われているといえども、流星に耐えられる物ではなくテツカマンダガーの身体はボロボロになり、身体の節々から赤い液体を吐き出し始めた。

「ぱんっ……」

まだ息こそあるものの、ダガーの命は風前の灯火であった。

彼が最早血まみれの指先を動かす事すら叶わないと踏んだ蘭花は、テツカマンダガーの拘束を解き、そのまま他の紋章機と共にテツカマンブレードを援護するべく機首を回頭させた。

## 銀河の天使と宇宙の騎士（3）

〔5〕

テツカマンブレードの仲間であるノアル・ベルースと如月アキの搭乗する宇宙船ブルース号がテツカマンブレードの後を追いついて、その姿を確認した時には、すでに勝負に決着がついていた。

「なんだ？ 見た事ない戦闘機がDボウイを囲っていやがるぜ!？」

「ノアル！ あそこ!!」

仲間の危険を感じて武装を使用しようとしたノアルだったが、アキの声でトリガーを掴む前に攻撃を中止した。

アキがコックピットのパネルを操作し、宇宙を漂っていたデブリの一つを拡大する。

否、それはデブリではなく……

「ありやあ、ラダムのテツカマンじゃねえか!!」

「見た所、あの戦闘機がDボウイを援護してくれたみたいね……」

「誰だか知らねえが、テツカマンをあそこまでポロポロにするたあ並の連中じゃないって事だな!」

「とりあえず私達も合流しましょう！」

「ラーサ！ 手え貸すぜDボウイ！」

「ブルーアース号！ ノアルとアキか!!」

「チツ！ ブレードの腰巾着共か！」

悪態を突くエビルだったが、戦況はこちら側に完全に傾いていた。

「アキ！ 俺もソルテツカマンで野郎を叩きに行く！ ブルーアース号の操縦任せるぞ  
！」

「ラー……いや、ちよつと待って!!」

リーダーで周囲を観測していたアキが今にも飛び出そうとしたノアルを呼び止めた。

「今度はなんだアキ!?!」

「『奴ら』に気付かれたわ！ もうすぐ近くまで来てる!!」

【6】

アキが『奴ら』と呼んでいた謎の物体を、ミントが乗るトリックマスターもほぼ同じ  
タイミングで観測していた。

「また何か来ますわ皆さん！ 警戒を!!」

『今度はなんだってんだい!?!』

「熱源センサーにも反応なし!? 正真正銘正体不明の『何か』ですわ!!」



ミントが再び観測した映像を各紋章機へと送る。

『これは……？』

それは、宇宙の黒よりも漆黒な色をした、球体だった。

全長5メートル前後の凹凸一つない球体が、何かの力を働かせてミント達の方へと文字通り飛んできていたのだ。

『チョコボールですかね？』

『あんなチョコボールがある訳ないでしょう！』

蘭花の疑問に、ミルフィーユがボケて、ノーマッドがツッコむ。

ある意味、ギャラクシーエンジェル隊らしいノリを取り戻しつつあった。彼女らに真面目な話は似合わないのだ！

そんな中、件のチョコボールもどきはミント達の前で急に動きを止め、死を待つ状態だったテツカマンダガーの元へと近づいて行き……。

「…………ツ！」

『アレ、もしかして……食べてる？』

黒い球体は、まるでずぶずぶと沼にでも沈むかの如く、テツカマンダガーの身体を取り込んでいく。

「また連中か！」

「いかん！ お前たちも早く逃げるんだ!!」

その場から飛び跳ねる様に逃げるテツカマンエビルと、同様に反対へと飛んだテツカマンブレードの言葉が自分たちに向けられているという事に気付くのが遅れたギヤラクシーエンジェル隊の面々。

気が付いた時には時すでに遅く、モニターの端々に黒いモヤがかかり始めていた。

テツカマンダガーを食らった黒い球体が膨張し、エンジェル隊を取り囲もうとしていたのだ。

「これは……ッ!?!」

『大変ですよ皆さん！ この黒いモヤモヤが、紋章機ごと僕たちを取り込もうとしているんです!!』

『なんですって!?!』

『チツ！ 武装も使えない!! ミント、何かわかるかい!?!』

「ちよ、ちよつと待ってくださいいまし……」

ミントはトリックマスターの全機能を解放し、周囲の観測を始める。

しかし、普段ならすぐに開始されるスキャンニングが、いつまで経っても始まらない

かった。

「いけません！ わたくしのトリックマスターも言う事を聞いてくれませんわ!!」

『ええーん！ 私なんて食べても美味しくありませんよー!!』

『これは……万事休すと言う奴ですな……』

『結果は神のみぞ知る……』

涙目で猛抗議するミルフィューの言葉が届くことなく、浸食は進む。

達観しているのか自身の保身に興味が無いのか、ウォルコット中佐とヴァニラがそれぞれぼつりと眩く。

「フハハハハ！ ブレード！ 今回は貴様の命、この変な女達の命と引き換えに見逃してやろう!! だが、次は無いと思え！」

包囲網から脱したテツカマンエビルは黒い霧から全速力で逃げる様にオービタルリングの方へと飛び去って行ってしまふ。

『Dボウイ！ ここに居たら、『この前の戦艦』みたく俺達も巻き込まれちゃうぜ!』

「いや……まだだ！ まだ間に合う!!」

しかし、宇宙の騎士は銀河の天使達を見捨ててはいなかった。

「ペガス！ ハイコート・ボルテツカを広域放射して奴らだけを吹き飛ばす！ 出力は最低限だ！ やれるか!？」

『ラーサー!』

テツカマンブレードの声に合わせて、ペガスが変形を始める。

ブレードの目の前にペガスの変形した腕がグリップとして現れ、それを握ると同時、ブレードの肩部分の装甲が開き、中から淡い緑色の粒子が溢れ始めた。

「ハイコート！ ボルテツカアアアアアアア!!」

まるでマイクを壊しそうな叫び声と共に放たれたテツカマンブレードの必殺技、ハイコート・ボルテツカはギャラクシーエンジェル隊だけを助けるためにその威力を数十分の一にまで落とし、見事、紋章機の周囲に漂っていた黒い霧だけを吹き飛ばした。

「アキー！」

『奴らの反応は消失したわDボウイ！ 謎の戦闘機からもちゃんと生体反応を確認済みよー!』

「ラーサー！ 聞こえるか、戦闘機のパイロット！ 生き残りたければ俺達についてこい

!!

『うーん……まだ動けますう』

『ウォルコット中佐。ここはひとまず……』

『……仕方ありませんな。こちら、ギャラクシーエンジン隊のウォルコット・O・ヒューイ中佐です。そちらの指示に従わせて頂きます！』

「わかった。ノアル。俺が大気圏付近まで先導する。ウォルコット中佐達を後方からサポートしてやってくれ！」

『ラーサ。全く、Dボウイが率先して人助けとは、明日は槍、いや、神機でも降るんじえねえか……？』

無事にラダムのテツカマンと謎の黒い霧を撃退した一行は、一路、その進路を地球へと向けるのだった。

## 〈第1章〉有栖レナ：星に集う戦士達篇

## 解説回：ペイラー・榊のGE講座〔1〕

〔ペイラー榊のGE講座1〕

さて、いきなりだけど、君たちはアラガミがどの様に発生したか知ってるかな？

アラガミはある日突然現れて、爆発的に増殖した。

……そう、まるで進化の過程をすっ飛ばしたようにね。

だが不思議な事に、アラガミには脳がない。心臓も、脊髄もありはしない。

私達人間は頭や胸を吹き飛ばせば死んじゃうけど、アラガミはそんな事では倒れない。  
い。

アラガミは考え、捕喰する一個の単細胞生物『オラクル細胞』の集まり……つまり、アラガミは群体であって、それ自体が数万、数十万の生物の集まりなのさ。

そしてその強固な細胞結合は、既存の物理兵器では全く破壊出来ないんだ。

それではどうするか？

最初は学園都市の超能力者と世界各地に別勢力を持つ魔術師達が対抗し、アラガミ発生と同時期に出現したニードレスなんかも彼らと共に戦ったんだ。

だけど、学園都市は第三次大戦後のうやむやで解体され、新しい能力者は生まれないし、魔術師も複雑な術式の会得となると長期の修行が必要なんだ。

ニードレスに関しても、ここ、極東のブラックスポット周辺で偶発的に誕生する事を除けば発生条件が全くの不明。

つまり、数を揃えるのが非常に困難だったんだね。

だからこそ生まれたのが、同じオラクル細胞を埋め込んだ生体兵器『神機』を使って、アラガミのオラクル細胞結合を断ち切る神機使い、ゴッドイーターなんだ。

オラクル細胞の保有する捕喰機能を付け加えた神機ならば、彼らの行動を司る司令細胞群『コア』を抽出する事も出来る。

だけど、これが中々に困難な作業なんだ。

新たな力、神機を以てしても、我々には決定打がない。

いつの間にか人々は、この絶対の存在をここ、極東に古くから伝わる八百万の神に喩えて『アラガミ』と呼ぶようになったのさ。

もう少し、アラガミについて掘り下げてみようか。

君達もご存じの通り、アラガミは何でも食べる。

動植物は勿論の事、人類が作り出した建造物や兵器だってお構いなしだ。

そこからアラガミは多種多様な進化を遂げる訳なんだけど、一つ、他の生命では考え

られない現象が起きていてね。

それは、アラガミの体組織。

オラクル細胞の多様性から来ているんだけど、20年程前に観測されてから今の今まで、オラクル細胞は何一つとしてその組織図を変えてはいないんだ。そう、『何一つ』ね。この事から、アラガミは『進化』ではなく『学習』しているのでは、という結論に至ったんだ。

そう、彼らは捕喰という行為を以てして日々学んでいるのだよ。

どうすれば速く走れるのか。

どうすれば空を飛ぶことが出来るのか。

近年では、ミサイルの様な複雑な機構を学習して武器として使用するアラガミも観測されていてね。

年々勢力を伸ばすアラガミに対し、我々も新型の神機を開発して対抗している訳なんだけど、現状あまり芳しくないのが実情だ。

おっと、今のは失言だね。忘れて欲しい。まあ、その辺については君達ではなく、私達が担当する戦場だ。



さて、今日の講義はここまでとしよう。続きは次回だね。

# 第1話 『エリック死す』

〔1〕

― 『第97管理外世界地球』フエンリル極東ブラックスポット支部『アナグラ』内部

「今回の任務は鉄塔の森での小型アラガミの討伐任務ですね。同道するソーマさんとエリックさんは先に現地向かっていますので、レナさんも準備ができ次第出撃をお願いします」

「はいー！」

オペレーターの竹田ヒバリから指令書を受け取ったゴツドイーター第一部隊所属の新人神機使い、肩口まで切り揃えられた真っ黒な髪で、男物の無骨な黒メガネをかけた少女有栖レナは出撃用のゲートへと足を運んでいた。

「オウガテイル三体に、コクーンメイデン？ 初めて見る名前だなあ。そいつが二体つとおおう!？」

時間が圧しているという事もあるが、指令書に目を通したまま移動していたレナは、そのまま地面に転がっていた『何か』にぶつかって勢いよく転倒してしまう。

ながら移動というのは非常に危険で、本人が思っているよりも意識している視界が狭まる。やめよう。

「いったたたたた……何だよ誰だよこんな所にゴミ捨てたままにしてんのはよ……」  
「おう嬢ちゃん……ヒック、人の腹蹴り上げて置いてゴミ扱いたあヒック、感心しねえな」

「ぎゃあああああ?!」

『何か』が急に喋って起き上り始めたので、流石に仰天したレナが指令書を投げ飛ばしながら悲鳴を上げた。

見間違いかと思つて一度メガネをかけなおすが、何度見ても彼女が躓いたのは人間だった。

ヨレヨレの作業服に身を包んだ四〇から五〇代程の男性は、透明な液体が入った瓶を片手に立ちあがり、千鳥足でレナの方へと歩み寄ってくる。

「うわ酒くつき……」

「……先に言う事ヒックあるんじやねえか……?」

「すませんごめんなさい急いでるんでハイ」

とにかくその場から離れたかったレナは、早口でまくし立てる様に言葉のマシンガンを打ち込み、その場から去ろうとする。

しかし、作業服の男に「おい」と呼び止められ、渋々ながらに視線を男の方へと戻した。

「あの、まだ何か……?」

「忘れ物だぜ、慌てん坊ちゃんよ」

そう言うのと、落としていた筈の指令書をレナへと投げかける作業服の男。

「あ、ありがとうございます……?」

「バーナード・オトウール軍曹だ。俺の名前ヒック、忘れんじやねえぞ……」

「ぐんじ……?!? しつ、失礼致しました!!」

上司をガチで踏んづけてしまった事を認識してしまったレナは、半ばやけくそに逃げる様に出撃用のゲートへと向かっていった。

## 【2】

「つたく、最近の若いもんはヒック……」

噂の新型ゴッドイーターに腹を踏まれるという珍しい体験をしたバーナード・オトウール軍曹はゲートを見ながらブツブツと小言を呟っていた。

レナのながら移動もそうだが、日中から飲んだくれて人の往来激しいアナグラの口ビーで寝転がっている方も大概なのだが、酔っ払いつている彼はその事には気が付いて

いない。

「……おつと、こんなところでヒック昼寝してる場合じゃねえんだつたな」

手にした酒瓶の向こうに遠い日の光景を想い馳せながら、バーナード軍曹は出撃用ゲートとは違う、別フロアへ移動する為の昇降機の方へと足を運び始めた。

果たして飲んだくれ千鳥足の彼は道を間違えたり吐いたりせずに目的地へと赴くことが出来るのだろうか……？

【3】

「よお新入り。さっきの見たぜ。最高だったな！」

「シユン先輩……」

上官（と思われる物）を踏んづけてしまったレナはケタケタと笑う先輩ゴツドイーター、小川シユンに肩をバンバン叩かれる度にそのテンションを急降下させていた。

今現在彼女らがいるのはゲートの先に構えている神機保管庫であり、ここに各々の神機使いの相棒が収納されていた。

すぐ近くには神機メンテナンス用の作業員が使用する工房が存在しており、ターミナルから情報を打ち込むことで作業員達が神機の改修修理を行ってくれる仕組みだ。

意気消沈するレナなどお構いなしに、シユンは自身の神機である旧型のロングブレイ

ドを肩に担ぎながら、尚レナの肩をバンバンと叩く。

これはセクハラではなかるうか？

「あのオッサンウザってえんだよなあ。元神機使いの百田ゲンってオッサンと同じで昔は暴れてた軍人らしいが、今じや完全に酔っ払いの変人だよ。正直新型ってだけでチャホヤされてるお前の事も気に食わないが、さっきので見直したぜ！」

思った事は正直に言わないと気が済まない性質の人間なのか、聞いてもない事もスラスラと喋るシユンに、レナはため息交じりに、

「で、先輩は私にその最高のジョークの感想を言う為にわざわざ来てくれたのですか？」  
「お前もお前で結構棘のある言い方するよな!?! まあ、そんな事は良いんだ。お前、今回はソーマと一緒に任務なんだろう？」

「そうですね」

「アイツには気を付けなよ。ソーマと一緒に任務に行つたゴッドイーターの生存帰還率は滅茶苦茶低くてな……『死神』って呼ばれてるんだぜ？」

「死神……」

あ、ちよつと格好いいな。と思つたレナだが、話の腰を折りそうだったので心の中だけに留める事にした。

「ま、将来有望な『新型』サマには関係ない話だと思ふけどよ、精々命は大事にするんだ

な!!」

背中を向けたまま空いた方の片手を振るシユンを見て「真意はどうあれ絶対友達少ないよなあの人」と思うのだった。

〔4〕

—『第97管理外世界地球』極東地区沿岸部『鉄塔の森』—

鉄塔の森。

それは、かつては何の変哲もない重工業地帯だった。

アラガミによる捕食により至るところに不規則な穴が開き、間を縫うように木々が生え始めた事から、この場所はその様に呼ばれるようになったという。

天然の森林が減少し、こういった歪んだ場所が若者に『森』と認識されるのは、皮肉が過ぎるといふ話だ。

「やあ。君が例の新型クンかい？ 噂は聞いているよ。僕はエリック。エリック・デア

Ⅱフォーゲルヴァイデだ。君のせいぜい僕を見習って、人類の為に華麗に戦ってくれたまえよ？」

それが、彼の最後の言葉となった。

「エリック！ 上だ!!」

「！」

エリックと名乗った少年は、突如飛び降りてきたアラガミ、オウガテイルによって食われた。

レナの、目の前で。

「あ、ああ……」

この世界において、人間とはかくも弱い生き物だ。

ニードレス、超能力者や魔術師であつてもアラガミには食われるし、ラダム獣には踏みつぶされる。神機使いもその例からは外れない。



知識として理解はしつつも、レナは目の前で自分と同じゴッドイーターが一瞬で食われる光景を理解出来なかった。

否、脳が全力でそれを拒んだのだ。そのせいで、腰が抜けた彼女はそのまま座り込み、逃げるも応戦もすることなくその光景を見続けていた。

オウガテイルの鬼の様な顔が、ゆっくりとレナの方へと視線を移動させる。

まるで、次の得物を見つけたかの様なその仕草に未だレナは理解が追い付いていなかったが、その牙が彼女は届かなかった。

「チッ！」

オウガテイルは背中から巨大な神機に斬りつけられ、その活動を停止したのだ。

まるで闇の様に真っ黒な鋸型のバスターソードを肩に担ぎなおしたのは、白い髪に褐色肌のフードを被った少年だった。

年はレナと少ししか変わらない筈だが、妙に大人びて見えたのは、彼の目がどこまでも悲しい表情をしていたからだろうか。

（死神……）

ふと、小川シユンが言っていた言葉思い出す。

冷たく悲しい瞳で真っ黒な神機を構える様は、確かに死神を連想させるに足るものであった。

「……ようこそ、クソツタレな職場へ。言っておくが、ここではこんなことは日常茶飯事だ」

「わ、わかって、います……」

「そうか」

込み上げる吐き気を抑え、レナは神機を杖代わりに立ちあがった。

少年が持つ神機と同じデザインのバスターソードをたまたま装備していたレナは、嫌でも少年との力の差を思い知らされ、自分の未熟さを痛感してしまう。

「俺はソーマ。別に覚えなくていい」

「私は、うっぶ……」

「無理をするな。別に下がってくれても、俺はお前を恨んだりはいしない」

「それは、出来ません……確かに、目の前で人が……私と同じ神機使いが死んじやったのは辛いですけど、私にだって覚悟があります。守られてばかりだった私が、今度は皆を守るんだって！」

「そういう覚悟か……良いだろう」

ソーマと名乗った少年は、今にも吐きそうな癖に決意だけは一人前と言わんばかりのレナを笑ったり、貶したりすることなく肯定し、端末に搭載されたデジタル時計に目を通した。

「時間だ。行くぞルーキー……とにかく死にたくなければ、なるべく俺には関わらない事だ……」

【5】

覚悟がある。なんて勢いで言ってみたはいいものの、そんな言葉だけで人間の体調が復帰する訳はない。

未だ引きずる吐き気を耐えられたのは彼女がゴッドイーターとなる時に体内に打ち込まれた偏食因子による体の強化からであろう。

こんな所で自分が普通の人間でない事を改めて認識させられたレナは、半ばやけくそ気味にバスターソードを振るう。

しかし、その攻撃はどれもこれも空回りし、その度にオウガテイルの反撃から命からがら回避する羽目になっていた。

「戦えないなら下がれ。俺一人で充分だ」

「くっ……！」

反論の一つでもしてやりたいレナだったが、悔しい事はその言葉が出ない程に状況は説破していた。

訓練で一通り動かしてみたとはいえ、バスターソードは他の種類の近接武器と違って

やたらめつたら振り回せるものではない。

冷静になればもう少しまともな立ち回りが出来たはずのレナだったが、訓練を思い出そうと記憶の海に飛び込もうとすると、すぐ浅瀬にあるエリックの「死」を見てしまう事になる。それを躊躇つたせいで基本的な動きすらおぼつかなかったのだ。

(落ち着くのよ有栖レナ……この神機はただの重りなんかじゃない。ちゃんと当てれば敵を倒せるんだ。ほら、同じ形の神機を使ってるソーマさんだつてあんなに軽々と……?)

そこで、レナの思考が一瞬止まった。

同じ武器を使っている？

つまり、無理に訓練を思い出さなくても、目の前にいる『先生』を真似れば、動くことが出来るのでは？

【6】

「驚いた。いきなり動きが良くなったかと思えば、まさか真似をされていたとはな……」  
地面から生えたアイアンメイデンを模したアラガミ、コクーンメイデンを斬りつけながら、ソーマはそう呟いた。

まともに動く事も出来なかったルーキーが敵に的確な攻撃を与え始めた事には最初

驚かされたが、何度か攻撃をしている姿を見ると、彼女が明らかに自分の方へと意識を向けている事が分かった。

そして、自分の動きを数秒ずらして再生している事に気が付いたソーマは、自分の目の前の相手と戦いながら、新米がそのまま真似ても大丈夫な立ち回り、というやけに高難度な動きを求められていた。

「チッ、これは新型旧型云々というより、アイツ個人の力量みたいだな……」

関わるなど釘を刺した矢先に真似をされるとは到底思っていなかったソーマだが、同僚が死なない事に越したことはないのです、それ以上は言及しない事にした。

そして程なくして、作戦エリア内にいたアラガミはシンクロする二人の神機使用によつて制圧される。

## 第2話 『銀の狐』

〔1〕

バスターソードは斬る、というよりかは叩き潰す、位の気持ちで振ればいい。

最後の一体にトドメの一撃を叩き込んだレナは、とりあえず他の事を考える事が出来る程度には調子が回復していた。どうやら無心で先輩を真似ている間に、心の整理が終わっていたらしい。

「……終わった」

先程の様に絶望ではなく、安堵で腰を下ろすレナ。その傍らで、ソーマは別の方向を見つめていた。

そこはエリツクを喰らったオウガテイルが倒れている場所で、コアを抜かれて活動を停止したアラガミはゆっくりと崩壊を始めていた。

「……」

「ソーマ、さん？」

「ソーマで良い。あまりさん付けされるのは慣れてない」

「は、はあ……」

「おい」

「えっ、は、はい？」

「あれはお前の知り合いか？」

「は？」

ソーマに促された先は、廃工場の一角、その屋上だ。

そこには、ボロ布をマントの様に羽織り、錫杖を持った人影が佇んでいた。

顔は同じくボロ布で作ったフードを目深に被っていて確認することは出来ないが、銀色に光る錫杖を持つ手は色白の細い腕であることから、おそらく女性であるのだろう、と推測された。

「いや、知らない人の筈ですけど……」

即答したレナだが、どこか心の中でモヤモヤするものがあつた。

無論、顔は見えてないので一概に知らない人物だと答えることは出来ない筈だが、『知っているけど知らない』という既視感に苛まれた時の様な感覚がレナを襲っていた。『明らかにこつちを見てやがるな……』

彼の指摘する通り、人影は明らかにレナの方へと意識を集中させているように見え

「……」

ポロ布の人影が、錫杖を持っていない方の手を布から表に出す。

その手には、錫杖と同じ、銀色に輝くマグナム型の拳銃が握られていた。

その銃口が、ゆっくりとレナの方へと向けられる。

「ツッ・ヤバッ！」

咄嗟に神機の装甲を展開し、防御の構えを取るレナ。

神機はアラガミと同じオラクル細胞を基に作られた武器だ。

能力や魔術の類を使わない物理兵器では、例えば核兵器を使っても傷一つ付かない無敵の細胞。

しかし、レナの中の既視感が強烈な警告を発し、彼女はそれに迷うことなく従った。

レナが装甲を完全に展開し終えたのと、銀色の拳銃が吠えたのは、ほぼ同時だった。

本来なら、数ミリしかない銃弾など、神機は軽く弾き飛ばせただろう。

しかし、

ドガガガガガ!! という激しい激突音と共に、神機の装甲はガリガリと削られていくのだった。

「何?！」

その光景に、一瞬追い付けていなかったソーマも理解が及び、驚愕する。

ポロ布の人影は特に驚いた様子もなく、ただひたすらにレナに銃弾を浴びせ続けた。



「うう……何なのよアレ……!?!」

防御一辺倒ではジリ貧である事を理解したレナは、相手がリロードする隙を狙って装甲を解除し、真正面から突撃した。

「ああああああああああああああああああああああああああああ!!」

先程の戦闘で体に馴染ませた『斬る』のではなく『叩き潰す』一撃。

その重圧な攻撃は、確かに芯を捉え、文字通りの必殺になる筈だった。

だが、ボロ布の人影はそれをギリギリで、尚且つ余裕すら見せる優雅な動きで回避してみせた。

否、回避というよりかは、あれは最早舞い踊っているかと表現した方が近いのかもしれない。

そしてそのままの流れで、ボロ布の人影は銃口をレナの顔面へと照準を合わせる。

「しまっ……!?!」

その時だ。

「フェルゼンアヴァランチ、発動オ!!」

「!?!」

ボロ布の人影が迫りくる『何か』に気が付いた時には、既に遅かった。

『何か』の正体は、レナの身体を裕に超える巨大な岩の塊。

それが彼女の真横を通過し、ボロ布の人影を吹き飛ばしたのだ。

「今だ！ アルカ!!」

「任せろザカート！」

巨大な岩から声が聞こえたかと思うと、今度はその後ろを追うように一人の女性が現れる。

アルカと呼ばれた女性は胸元が大胆に開いたセクシーな服を身に纏った、若竹色の長い髪の少女だった。アルカは真つ赤に燃える右拳を構え、体勢の崩れたボロ布の人影の懐へと突撃する。

そして、

「ヒートエクスプロージョン!!」

無防備になっていた懐に、容赦なく燃え滾る熱い拳のアップパーを繰り出した。

「……………うー！」

今まで無言を貫いていたボロ布の人影が、初めて人の言葉を発した。やはり人間の、それも少女の声色だった。

「賞金首『銀狐』！ 今日こそ決着を付けさせてもらおうぞ!!」

アルカは巨大な岩と共にレナを庇う様な形で立ちふさがり、ボロ布の人影……銀狐と呼ばれた少女を前に再び拳を構える。

「よう慌てん坊の嬢ちゃん。どうやら間に合った様だな！」

「バ、バーナード軍曹!？」

二人の後を追うように現れたのは、大きな袋とアサルトライフルを構えたバーナード・オドゥール軍曹だった。

今は酒が抜けているのか、しっかりと地面に両足を着けている。

「チツ。レジスタンスのニードレスがこんな所に来るのは変だと思つたが、まさかテメエの差し金だったとはな……」

さり気なくレナの一步前に陣取り彼女をカバーするソーマも現れ、形勢は一気に一対五(?)へと変化した。

「ツー！」

流石に不利を悟つた銀狐は跳躍でその場を離れる。

地面を軽く蹴つただけで数メートルを超える高さまで飛び上がった彼女はレナ達に追撃する間も許さず、その場から消え去ってしまった。

【2】

脅威は去つた。だが、レナの目の前には手から炎を出したニードレスの少女アルカと、彼女と会話する謎の岩が残っていた。

「……取り逃がしてしまったか」

「相変わず、何を考えているか分からん奴だ」

さも当然の様に岩と会話しているアルカを不思議そうにマジマジと見つめていると、その視線とその意味を悟ったらしいアルカが、笑いを堪えながら岩をコンコンと叩いた。

「おいザカート。お前、このゴッドイーターに『喋る岩』だと思われてるぞ?」

「何だと!」

そう言うのと、ただの岩だと思っていた塊が次第に瓦解し始め、中から筋骨隆々な大男が現れた。

まるで獅子を彷彿させる様な力強い焦げ茶色の髪の子を見やるや否や、レナは思った事をそのまま口に出してしまった。

「き、きび団子貰っても仲間にはなりませんから!」

「桃太郎じゃねーよ!!」

「ぶっ……ふはははは!!」

遂に堪えられなくなったアルカが腹を抱えながら笑い転がり始める。どうやら、彼女のツボに入ったらしい。

「あー、可笑しい……おっと、自己紹介がまだだったな。私はアルカ。レジスタンス『ブ

ラックスポット解放軍』の副隊長を務めているアルカ・シルトだ」

握手を求められるアルカに応えようとするレナだが、その手が一瞬止まってしまう。

「? どうした?」

「いや、余熱とか大丈夫かなって……」

「ああ。そんな事か。気にすることはない。私は炎のフラグメント『炎神の息吹（アグニツシユワツタス）』を持つニードレスだが、流星に自分のフラグメントの調整をミスるへまなどしないさ」

再度求められた握手に、今度はちゃんと応えるレナ。

アルカの言う通り、その手は平熱より少し熱く感じるものの、炎を握っている様な感覚とは遠くかけ離れている物だった。いや、炎なんて握った事ないけどさ。

「レナです。有栖レナ」

「有栖レナか。よろしくなレナ。で、こちらの桃太ろ……フフツ、岩太郎だが」

「面白がって引つ張んなよアルカ。はあ……俺はザカート。岩石の鎧を纏う事が出来る岩石崩（フェルゼンアヴァランチ）のフラグメントを持つニードレスだが、同時にブラックスポット解放軍の隊長としてシメオンと戦っている」

「シメオン? シメオンってあのシメオン製薬ですか?」

シメオン製薬は、フェンリルと共に現在の地球を二分するほどの巨大企業だ。その名前は出てきた事にレナは困惑してしまふ。

フェンリルお膝元のアナグラに住んでいるレナはあまりこの会社の商品を見ないが、製薬会社を誹いながら数多くの事業にも手を出しているらしい。

「おっと、アナグラ育ちのお嬢ちゃんには、あんまりピンと来ない話だったよな」

「フェンリルは世界中でアラガミやラダムと戦いつつ私達の様な余所者にもギルドという形で働き口をくれているが、シメオンの方は極東、主にこのブラックスポット周辺を支配しようとする動きを見せているんだ」

「何でこんなんですか？」

「それお前。ここは元『学園都市』だからだろ。今はほとんど廃墟だが、人によつては未だに宝の山なんだろうよ」

「で、私達はフェンリルからの物資提供を受けつつ、裏で『ニードレス狩り』を行うシメオンと日夜戦つてゐるって訳さ」

「ニードレス狩り……噂だけならアラグラの中でも聞いた事があります。目的不明の虐殺行為として、フェンリル本部でも話題になつてるとか」

「ま、実の所はアラガミやラダム獣と殴り合つてゐる事の方が多いんだけどね」

つまり、とザカートは会話のまとめに入った。

「俺らは自分の居場所であるブラックスポットを守る為、フェンリルと素敵な相互関係を築いてきたって訳だ」

「フェンリルとシメオンの抗争……」

全く知らなかった話だ。

今まではその日一日生きるのが精いっぱい、どこの皆も湧いてくるアラガミと降ってくるラダム獣に怯えながら、人類仲良く手を繋いで前に進んでいると思っていたのだが、どうやらそうでもないらしい。

「ねえ、ソーマさ……ソーマはこの事知ってたの？ って、ありや？」

同じフェンリル所属のゴッドイーターの先輩としてこの事実についてどう思っているか伺おうとしたレナだが、そのソーマはレナ達とは少し離れた所で、バーナード軍曹と二人で会話を交わっていた。

「?」

少し気になったので、アルカ達に断りを入れてから聞き耳を立てる事にした。

【3】

「……こんな所まで、一体何しに来やがった？」

「ん？ 見ての通り、墓参りだよ、墓参り」

ソーマに指摘されたバーナード軍曹はそう言いながら、持っていた袋から酒瓶や花束を取り出す。

酒瓶の一本、花束の一束、そのどれをも丁寧配置しながら、バーナード軍曹は独り言のように呟き始める。

「……ここは、ゲンの部隊と一緒に戦った最後の戦場だな。二人揃って部下をほとんど失って、ゲンの野郎も引退を余儀なくされちゃったんだ……」

「……」

「それから一時期オービタルリング奪還作戦だとか何だとかでここを離れつきりだったからな。いつもより多めに持ってこねえと、こいつらが酒を求めてあの世から這い戻ってきちゃうかもしれねえ」

普段酒瓶持つてアナグラ内をフラフラしているオツサンと同一人物とは思えない発言だった。酒瓶だつて今の時代貴重はずなのに、バーナード軍曹はそれを死者への手向けとして何の遠慮もなくその場に備え続ける。

「……死んじまったら、何も残らねえだろうがよ」

「そうだな」

皮肉と自傷を兼ねてのソーマの言葉は、あっけなく寸断される。



でもな、とバーナード軍曹はさも当然の様に言葉が続ける。

「確かに、死んじまったたら何も残らねえ。だが、残された俺達が連中の分まで戦わなきゃならねえんだよ。誰かの為に戦って死んでも、そいつが守りたかった『誰か』はまだ生きていて、そいつを死なせちや本当に『連中』お終いだからな……最も、こんな窮屈な生き方してちや、守るものが増え過ぎちまうのがちと難儀だが」

「……」

「少し前、お前さんみたいな悲しい目をしたデンジャラスボーイに会ったよ。ま、あつちは何かを決意した良い目をしていたがな」

「……結局、何の説教をしたいんだアンタは？」

「説教？ 俺がそんな優しい奴に見えんのか？ 俺はただ、先にヴァルハラで待つてる仲間達との他愛もない世間話にお前さんを無理矢理巻き込んだだけさ」

「アイツが守りたかったもの……」

アイツ、エリック・デアフオーゲルヴァイデは変な奴な事で有名だった。

神機使いとして可もなく不可もない腕前の癖にすぐ調子に乗り。

トイレの正しい使い方も知らない金持ちのボンボンで。

妹のエリナの話ばかりする馬鹿兄で。

だが、そんな奴ではあるが。

ソーマの事を『親友』と呼ぶ唯一無二の男だった。

『死神』と揶揄されていた彼を一番に理解している男だった。

「あいつは誰よりも優しいから」なんてクサイ台詞をサラツと言ってしまう男だった。

「……」

バーナード軍曹の『独り言』に少し思う所があったソーマは、しばし沈黙し、再び口を開き始めた。

「なあ、バーナードのオッサン、少し頼みがある」

「なんだ？」

「花を一輪、譲ってくれないか？」

「一輪で良いのか？」

「良いんだ」

名前も知らない白い花を渡されたソーマは、エリックが死んだ場所に花を添えた。

「……残りの分は、自分で用意するさ」

## 第3話 『BS解放軍の少年』

〔1〕

― 『第97管理外世界地球』極東ブラックスポット『BS解放軍』アジト付近―

軽い怪我を負ってしまったレナの為に、一行はブラックスポット解放軍のアジト方面へと足を運んでいた。

「ねえ、ソーマ」

「……なんだ」

「さっきの話、ちやつかり聞いてたんだけどさ」

「そうか」

申し訳なさそうに離すレナとは対照的に、ソーマは最初に会った時の様な冷たい対応に戻っていた。

意識していなくても普段からこんな調子だからシユン辺りに『死神』なんて言われているのかもしれない。

「その、エリックさんってどんな人だったの?」

「……世間知らずの金持ちで、妹の事に戦うんだとしか言わない、どこまでの甘い馬鹿野

郎さ」

「妹の為に、か。その気持ち、解るな」

「アルカさん？」

「私にも弟がいてな。世界一大事な弟だ。血を分けた家族兄弟の為なら、世界を敵に回しても良いと思えるのは別段不思議な事じゃない」

「外は化け物だらけ、内は派閥争いなんてしてるクソツタレな世界でもか？」

「関係ないな。家族とは、そういうものだ」

「あのクソ親父もそうなんだろうか……」

「……」

アルカとソーマの会話に、レナはただ黙って聞き入る事しか出来なかった。

物心ついた時にはアナグラの居住区におり、ゴッドイーターになるまでほとんどの人間と付き合いのなかった天涯孤独の彼女にとって、家族や兄弟というのは一番無縁の存在だったからだ。

「着いたぞ。ようこそ我らが基地へ」

そういう話をしている内に、一行はレジスタンスのアジトへと到着した。

高低差のある大地を天然の壁とした入り組んだ地形の中に、幾つかの屋敷が立ち並んだこの場所こそ、ザカートやアルカ達が根城にする家であり、基地であり、また最前線

でもあった。

基地には解放軍のメンバーらしき人物が何十人と常駐しているようで、そのどれもが凱旋するザカート達を歓迎していた。それ程に彼らへの人望と信頼が厚いのだろう。

「ザカート隊長！ 姉さん!! おかえりなさい!!」

その中で、一人の少年が一際大きな声でレナ達を出迎えた。

年はレナより少し下だろうか、アルカの同じ若竹色の髪的少年は、元気に手を振りながら近付いてくる。

「クルス!? お前、ここは危ないから来るなどいつも言っているだろう!」

「僕だって姉さん達の力になりたいんだよ!」

クルスと呼ばれた少年は、先程会話に出てきたアルカの弟だろう。顔立ちもよく似ている。

「ああ、この子がさつき言っていたアルカさんが世界一可愛いと言ったブツフェ!」  
すごくいいきおいでくちをふさがれた。

「お、おいクルス! こちら、ゴッドイーターのレナだ! 悪いが、私がザカートやバーナード軍曹と話をしている間、怪我を見てやってくれ! くれぐれも粗相のない様にな

!!」

「おふう……」

「既に自分で粗相起こしちゃってるよ姉さーん!!」

「……良いか。弟にさっきの事少しでも話してみろ。燃やすからな」

羞恥心と怒りが混じった様な真つ赤な顔で脅してくるアルカに対し、レナは無言でコクコク頷く事でしか返答出来なかった。

〔2〕

「はい、これで何とかなると思っていますよ」

「ありがとうクルス君!」

傷口に包帯を巻いてもらったレナは手当てをしてくれた少年、クルス・シルトに礼を述べた。

普段からこの基地に出入りし、裏方雑事に従事していた彼の手際は見事なものだった。

ただ、普段から長袖のレナにとって二の腕や太ももを晒して触られるのはかなり恥ずかしかったのだが、気にした様子もなくさっさと包帯を巻く彼に対し、少し女性として思う所があるのだった。やっぱりスタイルの良い姉を持つと貧相な体型の自分はアウトアブ眼中なのだろうか。

主に胸とかその辺。

「クルス君のお姉さん、アルカさんって素敵だよ。強いし、スタイル良いし」  
「そつ、そそそそうですね!!」

カマかけたらわかりやすく動揺しよった。愛い奴め。

「で、でもレナさんも美人だと思いますよ。ここに来るゴッドイーターってソーマさんとかリンドウさんとか、とにかく男の人ばかりなので……」

「さり気なくフォローする所、得点高いぞクルス君! まあ、私は訓練初めて一週間、実戦任務なんて二回目のド新人だけどさ」

「それでも格好いいですよ、神機を持ってアラガミと戦うゴッドイーター……憧れます」  
「そんなに言うんなら、一度アナグラに來て適性試験受けてみれば?」

「実は何年か前に姉さんと二人で受けに行っただけですけど、見事に落とされてしまつて……」

「ありや、なんかごめんね?」

「いえ、良いんです。魔術なんかに疎くて、フラグメントも持たない僕でも姉さんを守れるような力を手に入れられるかも……って期待は見事に碎かれちゃいましたけど、今できる全力を尽くそうかと思つてます」

「そっかー」

左腕に巻かれた包帯を、腕輪の付いた右手でさすりながら、レナは呟く。



時刻は既に17時を越えており、茜色に染まる夕焼けが彼女達の横顔を照らしていた。

そこでふと、先程ザカートやアルカとの会話で出てきたある単語を思い出すレナ。

「ねえ、クルス君。『ニードレス狩り』って、具体的にどんな事が起きているか知ってる？」

「僕も詳しい事は知りません。だけど、この極東のブラックスポットでしか誕生しないという不思議な力、フラグメントを持つニードレスをシメオンの社章を着けた人間や機械が襲撃して殺しまわっているんです。僕と姉さんも何度か狙われた事もあったんですが、命からがら生きのびて、今はこうして仲間達と共に戦っているんです」

「うん？ クルス君も襲われたの？」

「はい。多分姉さんとずっと一緒にいたから、まとめて狙われたんだと思います」

「魔術師や学園都市の超能力者はその手の話聞かないけど、なんでニードレスだけ狙われているのかな……？」

「それがさっぱりわからないんです。でも、ニードレスって確かに悪い人もいますけど、全員が全員そうじゃないんですよ。中にはちよつとそよ風を吹かせる程度のフラグメントしか持たない人だっていますし、強い力を持っていても優しい人がほとんどなんです。それを無差別に殺していく事が、例えば何か正しい理由があつたとしても、許される

事だとは到底思えないんです……ッ！」

「……私さ、ゴッドイーターになるまではその日暮らしが精一杯の貧乏人だったから意識してなかったんだけど」

クルスの熱の籠った言葉に感化されたレナがふと、自分の胸に秘めた思いを露呈しはじめた。

普段ならそんな事絶対しない様な彼女であるが、今日一日の出来事が彼女に変化をもたらしたのかも知れない。

「今日ね、私の目の前で人が死んだんだ。きっと私よりも強くて、私よりも理不尽な世界で生きていく理由があるような、そんな一人のゴッドイーターが」

「……」

ただ沈黙で清聴の意志を示すクルスに内心感謝しながら、レナは続ける。

「第三次世界大戦って大きな戦争があつて、アラガミやラダムが現れて滅茶苦茶な地球だけど、それでも皆で手を取り合つて、昨日よりもつと、今日よりもつと明日を良い日にする為に皆で頑張つてると思つてたんだ。誰かが死んでも、その人が守りたかつた『何か』はまだ残っているから、それさえ無くさなければその人の想いは死なない……まあ、今のは上司の受け売りだけだよ」

だけど、だからこそ、とレナは言葉一つ一つに想いを込めながら、ゆっくりと吐き出

していく。

「そんな中で、平気な顔して人を殺してる奴がいるなんて思うと、なんていうか、怒りもあるけど、悲しくなってくるよね……」

「……そう、ですね」

「何が一番悲しいって、人であれアラガミであれ、殺さないと生きられない様なこんなクソツタレな世界だよ。意思疎通の手段がないアラガミやわざわざ宇宙から地球侵略にやってきたラダムとは分かり合えなくても、せめて地球に住んでる人だけでも、仲良くなれば、って思うよね」

「その話で、僕もレナさんに聞きたいことがあるんですけど」

「何かな？」

「もし、もしもですよ。意思疎通できるアラガミやラダム獣が現れたら、レナさん、仲良くできると思いますか？」

「……!」

それはクルスにとって、比喻表現を込めた言葉だった「例えコミュニケーションが取れても、相手が人外で殺し殺された間柄では無理でしょう? つまり僕達とシメオンはそういう関係なんです」という事を暗に込めた皮肉。

しかし、その言葉を聞いたレナは今までにない以上の眩しい笑顔を振りまきながら、

クルスの両手をガツチリと掴んだ。流石に女の子に顔を近付けられている事になれていないのか、小さく頬を赤らめるクルスの事などお構いなしに、レナはグイグイと距離を縮めていく。

「クルス君！」

「なっ、なんででしょうか……?」

「それって、とても素敵な事だと私思うんだ!!」

信じていた『優しい世界』は砕かれようとも、世界がクソツタレのごみ溜めである訳では無い。まだ見ぬ未来の可能性をその言葉から感じ取ったレナは、今日一日の辛さを吹き飛ばす程の希望を初めて手にしたのだった。

### 【3】

— 『第97管理外世界地球』フエンリル極東ブラックスポット支部『アナグラ』内部

「あ、そうだ」

任務を終え、神機を整備班に渡した有栖レナは残りの自由時間をどう過ごすか考えていた所で、ある事を思い出した。

「あの時のテツカマン、どうしてるんだろ……?」

華夏の村の一件で出会ったテツカマンレイピア事相羽ミユキは、体調不良が著しいという事もあって現在、このアナグラ内の医療施設へ搬送されていたのだ。

貴重なテツカマンの検体という事で本部は相羽ミユキの身柄を確保したがっているそうだが、先日本部将校のホルベツト准将がテツカマンブレードを独断で拘束、監禁した事が他の支部に露見し、結果として彼女は極東支部で療養する事になったのだ。

「受付にいるヒバリさんなら何か知ってるかな」

本来、アナグラ内にテツカマンがいるなんて話は上官止まりだが、生憎レナは新米の癖して初任務でその姿を確認してしまったのだ。隠すより率き入れた方が何かと都合がいいと思われたのだろう。

そう言うわけで、彼女もまたテツカマンに会う事を許可された一人という事なのだ

「あ、レナさん。おかえりなさい」

「あれ？ ヒバリさん今休憩中ですか？」

ロビーまで戻つてくると、受付横のテーブル席に座って珈琲を嗜んでいるヒバリの姿があった。神機使いとしての仕事を始めて一週間、彼女が受付の席を離れている所を見るのは初めてかもしれない。

「本当は明日も仕事なんですけど、先輩に無理矢理にでも休めと言われちゃいまして……」

「先輩……アナグラには他にオペレーター居たんですね」

「いえ、先輩はギルド所属の方で、なんていうか、私にイロハを叩き込んでくれた人、という方が正しいかもしれません」

「全く、いくらオペレーターの数が少ないからと言って、全部竹田さんに任せつきりなのは私どうかと思います！」

その言葉を発したのはレナでも、ヒバリでもない第三の人物だった。

身長はレナとあまり変わらない、黒色短髪で童顔の少女であったが、何よりも、頭に花壇があるのが目立ってしょうがない。花のついたカチューシャ、というのが正しい認識なのだろうが、それにしても多すぎだ。

「レナさん、ご紹介しますね。こちら、フェンリルギルド所属の超能力者、ういはるかざり初春飾利先輩です」

席を立ち、件の花壇少女をレナに紹介してくれるヒバリ。

初春と呼ばれた女性はペコリとお辞儀してから、

「どうもー。巷で話題の新型さんですよね？ いつも後輩がお世話になってますー」

「いえいえそんな私がヒバリさんに頼りっぱなしって言うか……って、超能力者!? もしかして学園都市の!?!」

「ええ、一応……」

レナの眩い程の眼光に、初春は若干ひきつった笑みで答える。

その間もキーボードを打ち込む手は高速で、しかも正確に動いているのだから彼女は見た目以上に優秀な様だ。

「私、初めて見ました！」

「ええと、大変光栄なんですけど、私の能力って日常生活のごく偶に役に立つ程度のささやかなものなので、あんまり期待されちゃうと……」

「そ、そうだレナさん！ 何か用事があって来たんじゃないですか!？」

まるで先輩に助け船を出すような形で話題を切り替えるヒバリ。もしかしたらあまり触れない方が良い話題なのかも知れない。

「ん、大したことじゃないんですけど、テツカマ……ゴホン、ミユキさんの容態が気になつてですね……」

「ああ、例のテツカマンに変身出来る女の子ですよね?」

頑張って訂正したのに、初春にサラッと流れで言われてしまう。

初春はディスプレイに新しいウィンドウを展開しながら早々とその情報を見つけてくれた。

「先程雨宮隊長さんが会いに行つてますね。今は熟睡しているという報告が来てますよ」

「そうなんですか？　じゃあ、日を改めようかな……」

「予め言ってくれば面会の許可取っておくので、遠慮なく言っておきいねー」

「はい。じゃあ、私も夕飯食べて休もうかなー」

「あ、じゃあこれから御一緒にどうですか？」

ヒバリに誘われ、その場を去るレナ。

丁度入れ替わりで他の人達が初春に話しかけ始めたので、挨拶は軽く済ませて二人は食堂へと向かう。

「うーいーはーるー！　ねーねーそこに居るとスカートめくれないんだけどっ!!」

「めくろうとしないで下さい佐天さんっ!!」

「甘いですわね佐天さん。わたくしの様に常にお姉様の下着を上下全て正確に把握して

おかねぶあぎや〜あ!？」

「人が知らない所で何やってんじゃ黒子オーーーーー!!!」

後日。

『オペレーター竹田ヒバリと二人で食事した』という事実がヒバリLOVE勢の防衛班隊長、大森タツミの耳に入り、どうやって誘ったのか執拗に聞かれたりしたのだが、そ



れはまた別のお話。

## 解説回：なるほどGA講座★

こんにちは！ ミルフィーユ・桜葉です！

今日はですね、私達が初めて地球に来た時に助けてくれた謎の戦士『テツカマンブレード』について、お話したいと思います！

ブレードさん達のお話をする前に「テツカマンとはなんぞや？」という事から先に触れていきますね！

テツカマンはある日地球へとやって来た謎の生命体『ラダム』の中で唯一、人型のシルエットを保ったままの宇宙人さんなんです。

私達トランスヴァールの間からすると、この手の方々は『パーキングエリアのお土産屋さんに置いてあるドラゴンあしらった金銀の剣のストラップ』位の珍しさ（※注釈：居る所には居るというトランスヴァール流比喻表現）しかないんですが、地球の人たちからすると本格的に接触するのは初めての、文字通り未知との遭遇だったんですね！

私達が最初に戦った虫さん事、ラダム獣の司令塔的な役割を持っていて、羊と羊使いと比喻される事もあるそうです。

私、あんな見た目の羊さんだったら、夜眠れない時に数えられないです……。

ラダム獣が一匹、ラダム獣が二匹、ラダム獣が三匹……うーん、ダメですよミントさん。それは私が見つけた『警察署の中の銅像を二つ動かした先にある鍵で開けられる庭にある署長の像から取れるガソリンタンクで……むにやむにや……』

……ハッ！ ごめんなさい！ ちょっとウトウトしてしまいました!!

えっと、何の話でしたっけ？ ああ、そう、『コンビーフの缶がなんであんな形をしているのか?』でしたね。

それはですね、実は……

あ、この話じゃないですね。テツカマンですテツカマン！

ただ、そんなラダムの中核とも言えるテツカマンなのですが、ブレードさんだけ、何かラダムを裏切り、地球の為に戦っています。

今は仲のいいスペーススナイツの皆さんとも、特にノアルさんとは何度も衝突したって話ですよ！

喧嘩はダメですね！ 友達になれて本当に良かったです！

更に各テツカマンには人間の様な名前も確認されています。

テツカマンブレードのDボウイさん。

テツカマンダガーのフリッツさん。

テツカマンエビルのシンヤさん。

そして、私達はまだ出会っていませんが、

テツカマンレイピアのミユキさん。

彼ら彼女らは一体何者なのか。

そもそもラダムとは一体何なのか。

何が目的で地球までやってきたのか。

その辺は次回引き続き触れていきたいと思います！

それではアニメ、ギャラクシーエンジェル……じゃなかった。新約とある戦士達の黙示録、スタートです!!

## 第4話 『テキサスに舞い降りた天使たち』

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』フエンリル南米テキサス支部周辺空域—

「む、そう言えば……」

「どうしたんだい、ウォルコット中佐？」

紋章機、ハッピートリガーの操縦席に相乗りしていた御髭が命のウォルコット・O・ヒューイ中佐の眩きに、モノクルと軍帽がトレードマークの長身の女性、フォルテ・シユトーレンが反応した。

「いえ、確か先方の時空管理局の方に『なるべく現地の人間との接触は控えてくれ』という話を聞いたような、聞いてない様な事を思い出しまして」

「マジか今更だな中佐。じゃあ、今からトンスラして雲隠れしなきゃならないのかい？」

『『なるべく』なんで仕方がないとしましょう。それに、助けて頂きながら礼も言わずに去るのは、軍人云々というより良識人としての感性を疑われますからな！』

『……通信繋がったままなのだけど、それって私達に聞かれたら不味い秘密の会話なんじゃないかしら？』

コックピット内の全天周モニターの一部を切り抜いた四角いディスプレイの先には、フォルテ達トランスヴァール軍人とは違う、ジャケットの様な赤い服を纏っていた女性の姿が映されてる。

「如月アキ、だっけ名前？ 別に気にしなくて良いんだよ。約束破って集合場所に現れなかった連中に尻ぬぐいは全部任せるさ」

『そつちが良いなら良いけど……』

「そんな事より、今私達が向かっているのは、アンタ達の基地で良いんだよな？」

『そんな事より、良い男居るかしら?! ねえ、どう思うミルフィーユ!』

人が真面目な話をしていたのに、つい緊張の糸が取れたブロンド髪のチャイナ娘ランフラ・ランボワーズが無理やり雑談を始める。

それに対し、話を振られた頭に花飾りを乗せた桃色髪の少女ミルフィーユ・桜葉は「うーん」と少し唸った後、口を開いた。

『私思ってたんですけど、さっきの虫さんってケーキにして食べたら意外と美味しかったりするんじゃないでしょうか?』

『会話が成立していない!』

『ゲテモノにも程がありますわミルフィーユさん! はあ、この廃墟っぷりを見ると、わ

たくしの眼鏡に適う着ぐるみを探すのは一筋縄ではいかなそうですわ……」

『ミント！ サラツと私を居なかつた事にするんじやな』

「お前らやかましいわーッ!!」

別に雑談するなどまでは言わないフォルテだが、順次現れるモニターの数々が視界を圧迫した挙句、それで真面目な話を遮断された身としては堪つたもんでなかつたのだ。

「全く、お前ら。少しはヴァニラ見習つて真面目に静かに聞けんの『青い空、広がる下界に、蕎麦落とす』」

『流石ヴァニラさん！ 深すぎて全く意味が分からない一句ですわね!』

「だあああああああああああああああああああああーッ!!」

『……そつちは大変そうね』

知り合つて間もない人に心の底から心配されたフォルテであつた。

## 〔2〕

——『第97管理外世界地球』フェンリル南米テキサス支部外宇宙開発機構内『スペースナイト』基地——

フェンリル南米テキサス支部外宇宙開発機構。



それは、元々フエンリルとは別の組織であった民間組織、外宇宙開発機構がフエンリル南米支部と合併した欧州最大の防衛機構の一つだった。

高地の間を利用した天然の要塞の中の施設は地上からの外敵対策には非常に有効で、その機能を再現したとあるレジスタンスが日夜巨大な悪と戦っているらしい。

そんな外宇宙開発機構は内部に特別チームを編成していた。それこそが、ギャラクシーエンジン隊を助けたテツカマンブレードやブルーアース号が所属する、スペースナイツである。

基地の格納庫に紋章機を着地させたエンジン隊の面々は、オーバーホールを来た細身の男性に先導され、基地内を移動していく。

ブルーアース号に収容されたテツカマンブレードが気になるが、どうやら整備やら報告書やら色々あるらしく、後に合流する事となった。

広く長い廊下を渡り切った先で案内されたのは、応接間だった。

壁の一面がガラス張りでの外の荒野を見渡せる部屋の中央には、綺麗に整えられた横長のソファアークが二つ、膝辺りまでの高さのガラステーブルを挟んで並べられている。

その部屋で窓から外を眺めて待っていたのは、白い髪をオールバックにまとめた男性だった。

独特な逆三角形デザインのサングラスをかけた男の目は細く、どんな些細な事も見逃

すまいとした油断ならぬ人物である事を匂わせている。

「ようこそスペーススナイツ基地へ。私はこのフェンリル南米支部を預かる支部長兼、宇宙開発機構所長兼スペーススナイツ司令のハインリッヒ・フォン・フリーマンだ」

「こちらこそ。トランススヴァール皇国軍聖女シャトヤーン様直轄遺失物管理部ギャラクシーエンジェル隊の司令をしております、ウォルコット・O・ヒューイ中佐です」

「肩書の長さで対抗すんなよ中佐」

フリーマンが差し伸べた手を取り、握手するウォルコット中佐の横で、フォルテがため息をつく。

本来なら彼女もボケ役の筈なのに、今日はツツコミ役に徹し過ぎな気がしていた。

「……所で、彼女達が今どんな状況に陥っているのかお聞きしたいのだが……」

「んーっ！ んんーッ!!」

部屋につくや否や勝手に行動しようとしたウォルコットとフォルテ以外のエンジェル隊はガムチームにより強固に束縛されていた。こう、エロい感じとか一切なく、足先から髪の毛のてっぺんまでグルグル巻きにされている辺りに本気度が伺える。

「気にしないで下さい。あれがトランススヴァール流の労いです」

「異文化とはおそろしいな……」

場を和ませるための軽いジョークのつもりが、本気でフリーマンの顔を引きつらせて

しまう。

異文化といえればお前の逆三角形サングラスも大概だよとは思ったフォルテだが、そこは大人なので我慢した。

「フリーマン司令。まずは大事な部下達をお助け頂いた事、本当に感謝します」

「何、最終判断を下したのは私ですが、最初に助けると決めしたのは私の部下達です。お気になさらず」

それよりも、とフリーマンは部屋の中央に置いてあったソファアに腰かける様にフォルテ達に促す。

エンジン隊が座つたのを確認し、フリーマンも反対側のソファアに腰かけた。大半がガムチームのよく分からない生物群を出来るだけ視界に捉えないようにフリーマンは話を続ける。

「早速ですが、あそこで何をしていたのか、お聞きしても？」

「ええ、構いませんよ」

フリーマンの鋭い鷹の様な眼光に恐れる事無く、ウォルコット中佐は最初から話を始めた。

こういう時の物動じない姿勢の中佐は格好いいと素直に感心するフォルテ。

言ったら絶対に調子に乗るので大人のフォルテは言うのを我慢したが。

## 【3】

「うーむ……」

フェンリル南米テキサス支部支部長兼、外宇宙開発機構所長兼、スペーススナイツ司令のハインリツヒ・フォン・フリーマンは柄にもなく困惑していた。

オービタルリング近宙でラダムに襲われていた集団がいると聞いた時、最初はフェンリルの別支部の部隊の事だと勘違いし、救援を許可したのだ。

現在、地球から宇宙へと上がる手段を持つのは、ブルーアース号以下、地下に整備途中で放置されているシャトル群を保有する外宇宙開発機構を除くと、ほとんど無に等しい。

フェンリル本部に席を置くコルベット准将がどこからかシャトルを調達して地球製テツカマンである、ソルテツカマンを宇宙へ上げたという予想もあったが、そもそも彼は少し前のオービタルリング奪還作戦の失敗を追求され、謹慎処分を受けている筈だ。

だからこそ、正体不明のウォルコット中佐達には興味があり、護衛も着けず直接会話する選択をしたのだが、今は少し後悔をしていたのかもしれない。

なぜならば、ウォルコット・O・ヒューイという男が話す言葉のほとんどが、彼が初

めて聞く者ばかりであったからだ。

別世界の広大な宇宙に君臨する星間国家トランスヴァール皇国。

古代遺産ロストテクノロジーを使用した紋章機。

異世界転移技術を持つトランスヴァールの同盟世界ミッドチルダ。

そして、異なる世界同士を繋ぐ次元の海の治安を守る時空管理局。

正直『学園都市の超能力者』だの『魔術師』だの『ニードレス』だの『ゴッドイーター』などがおり、『アラガミ』や『ラダム』といった超常と毎日殴り合っている身としてはもうこれ以上何が起きてても驚かない自信があったフリーマンの心をあつさり砕く様なスケールの話がポンポンと流れてくる事に、彼は本気で対処に困っていた。

それでも尚、ポーカーフェイスを崩さなかつたのは、ある意味で彼がどれ程の実力者かを図るには十分すぎる材料でもあつたのだが。

「つまりですな」

そんな彼の心中などいざ知らず、『自分たちの世界の常識』をペラペラと話していたウオルコット中佐がまともに入った。

「我々はこの地球に発生している『とある超常現象』と、その原因を担っていると思われる『ロストテクノロジー』……ああ失礼。この世界の管轄的には『ロストロギア』が正しいんですな。ともかく、その回収と調査が目的となっておりませう」

サラツと『この世界の管轄』とか謎のワードが飛び出したが、恐らく気が付いていないウオルコット中佐は続ける。

「ラダム、でしたかな？ 彼らの様に地球侵略を目的として遠路はるばるやって来た訳では無いという事だけは、理解していただきたい所です」

「……わかりました。とりあえずは、我々スペーススナイツが招いた来賓という形で貴方を歓迎します」

そう言うしかないではないか。

〔4〕

「レビン！ その話はマジかよ!!」

ブルーアース号の整備をしていたオーバーオールを来た細身の男性、レビンの胸ぐら

を掴んで叫んでいたのは、パイロットのノアル・ベルースだった。

と、言っても別に喧嘩をしている訳では無い。

レビンが見た例の『宇宙人』について、彼は興味津々だったのだ。

「いつ、痛いつてやめてよノアル！ もう、ホントにホントの話。あの戦闘機から出てきたエイリアンって人間そっくりなの。それもダンディーなオジサマと女の子が五人。ま、地球人じゃないから男女逆かもしれないけど」

「まさかお前じゃあるまいし」

「あーっ！ ひっどーい!!」

女言葉で喋るレビンだったが、彼は間違いない男だった。ただ、心が乙女なだけなのだ。何も心配はいらない。

「でもでも、この戦闘機、紋章機エンジェルフレームって言うらしいんだけど、皆セクシーよね。でも、この赤いのは頂けないわ。色はテツカマンブレードとお揃いでイイ感じなんだけど、武装がアンカーのみって、イマイチ美しさに欠けちゃうわ」

「そうか？ 俺は男らしくて好きだぜ？」

「ほら、ロボに付けるドリルはロマンってのと同じ思考でしょ!? 男って皆馬鹿なのね！」

「お前も男！」

「私は乙女！」

「……二人とも何してるの？」

そんな掛け合いは永遠と続くかと思われたが、そこへ書類仕事を終えた如月アキと、彼女と同じ赤いジャケットを羽織った男性が現れる事で中断された。

「あー！ Dボウイ！ と、アキ」

「レビン。私をオマケ扱いしないでくれる!？」

「お、帰って来たなお二人さん」

「お前に書類仕事を全部押し付けられたからな」

ノアルが調子よく挨拶すると、Dボウイと呼ばれた男性はボードに挟んだ資料を彼に手渡した。

「へっ、珍しくポーカーに付き合ってくれたと思ったら、まさかDボウイがあんなに弱かったとはな！」

「……分の悪い賭けは嫌いだ。もうしないぞ」

「そんな拗ねんなよDボウイ。つと、こんな事してる場合じゃねえ。チーフが例の宇宙人達とお茶してるって話だ。覗きに行こうぜ!!」

ノアル、アキ、Dボウイの三人は既にブルーアース号のコックピットから通信でエンジェル隊の面々を見ていたが、画面の関係上上半身しか確認出来ていなかった。



その為「上は美女揃いだけど下半身がグズグズドロドロのスライムだったらどうしよう」と（主にノアルが）心配していたのだ。

「そう言えばDボウイ、この戦闘機が気になるって言ってたわよね」

「ああ」

早足でガンガン前進するノアルの少し後ろで、アキがDボウイに話しかけていた。ノアルも少し意識を向けて会話の内容を盗み聞きする。

「あの性能、地球の物ではないのは確かだ。エイリアンというのは間違いない」

だが、とDボウイは一度区切って、何かしらの考えを自分の中で纏めてから口を開いた。

「あれと同じかは分からないが『ラダムに植え付けられた知識』の中に、似たものが存在するんだ」

ギョツと驚きの表情を見せるアキと共に、ノアルもその話題には流石に黙れなかった。

「おいおい、簡単に言ってくれたが、それって相当ヤバイ話なんじゃねえのか？」

「ラダムに襲われた他の惑星の生き残り、って事かしら……?」

「そこまではわからない。だが『ラダムの記憶のアラガミ』よりもずっと古い時代の知識なのは間違いない」

「以前話していた『ラダムはアラガミを知っている』って話よね」

「なんつーか、このままの勢いだと連中、宇宙の裏側まで知ってそうだよな」

「また報告書に書く事増えそうだけど、どうするの?」

「チーフには口頭で説明しようぜ。目下最優先事項は未知との遭遇だ!」

そう言つて立ち止まったノアルが指さす先には、応接間のドアがあった。会話をしながら随分と移動していたらしい。

「おっと、そう言えばこの国ではエイリアンに会う時には黒いスーツとサングラスがマナーだつて聞いたんだが、用意した方が良いかな?」

「何の話をしているんだ?」

昔みた映画の話を持ち出すも誰にも理解されず、その上ドアを開けるという楽しみまでDボウイに奪われてしまうノアル。

流星に最初に中に入るのだけは譲らんとした男の意地で、二人を押しつけ部屋へと足を踏み入れた。

そこで待つていたのは――

「……なんじゃこりゃあ!?!」

髭の男性はさておき、その横に座っていた赤い髪でモノクルを付けた女性はモニターで見た通りの美人だった。

すらっとした足と、豊満な胸。しかし、この場に立った今現れたノアル達の視線を  
持つて行ったのは、ガムチーム製のミイラ四体と、その横で何食わぬ顔で珈琲をすす  
我らがフリーマンチーフの姿だった。

「ああ、ノアルか。これは彼ら流の劳らいらしい」

「どう見ても殺人現場だろ頭おかしくなつたかチーフ!」

その時だ。ミイラ(?)の内の一体がピクピクと痙攣を始めた。

「お、おい……なんか一体動いてるぞ……?」

「ふ、ふふふ。ふふふふふふふふふふ」

「まさか、これでまだ動けるってのかい蘭花!」

「ふはははーっ! 私の良い男センサーに反応ありよ!」

直後、布のガムテープで足先から頭のとっぺんまで拘束されていた筈のミイラが世紀  
末救世主伝説の男よろしくガムチームを引きちぎりながら外界へと姿を現した。

ブロンドの美しい髪にマラカスの様なヘアアクセサリーを二つツインテールの端に  
着けていたチャイナドレスの女性の目は、確実にノアル達の方へと向けられていた。

「良い男か……参つたぜ。ついに俺の美貌が宇宙に認められちまつた訳……」

「ねーねーその無口なお兄さんお名前伺つてもよろしいですかあー!」

「ちよつと!」

「いや、良いんだアキ。俺はDボウイ。少し君の話が聞きたい」  
「良いですとも！」

「……」

完全に見視されたノアルがその場で固まっていると、フリーマンが怪訝な顔を彼に向けた。

「……ノアル。宇宙に、なんだって？」

「やめてくれチーフ。結構割とマジで心が折れそうだ」

## 第5話 『アリサ・イリーニチナ・アミーエーラ』

〔1〕

そんな訳で。

「では改めて、スペースナイツのメンバーを紹介しよう」

フリーマンの指示によりギャラクシーエンジェル隊の前にスペースナイツの全員が召集されていた。

「ブルーアース号のパイロットのノアルだ。最近はソルテツカマンに入って戦う事の方が多いけどな」

「同じくブルーアース号のパイロット、如月アキです。……蘭花<sup>ランファ</sup>さん、でしたっけ？

ちよつとDボウイと距離近すぎじゃないかしら？」

「もう、アキだったらヤキモチさんかしら？ 私はレビン。スペースナイツのメカニック担当よ！」

「同じく、メカニック担当の本田だ。よろしくな」

「オペレーター担当のミリーです！ ほら、次はDボウイの番よ！」

後で合流したレビン、整備班班長で『おやつさん』というあだ名を持つ大柄な男性、本

田と、元気に笑顔を振りまく少女、ミリー。

「……」

その横でDボウイは仏頂面を見せていた。

機嫌が悪いとか緊張しているとかではなく、

「あはあくんDボウイ様あく♡」

なんかよく分からないくねくねしたチャイナ美女に抱き着かれて反応に困っていたのだ。

「……Dボウイだ」

「はいはい質問！ DボウイさんのDって何の略ですか？ あ！ やっぱ言わないで下

さい当ててみせますよ！ うーん、そうですね！ ドリーム！ ドリームのDですよね

!？」

一同ずつと気になっていた様子だったので、それを率先して聞いてくれたミルフィーユに内心感謝していた。

一方で、その回答を聞いたノアルは首を振りながら否定する。

「おっと、中々にロマンチックな回答だが外れだぜ。正解は『デンジャラス・ボーイ』でDボウイだ。因みに、こいつがテッカマンブレードな」

「まあ、あの時のヒーロー！ 顔も声もオツケーで強いなんて文句なしにいい男じゃな

「い!!」

「ちよつと!」

「待てつてアキ。きつと向うの世界ではあれが普通の挨拶なんだつて」

「なんか蘭花のせいで私ら全員揃つて変態扱いされてるぞ! 急いで引つpegせ!!」

「なんだか取つ組み合いで喧嘩を始めようとしていたアキと蘭花を、双方のメンバーが頑張つて止める。」

「原因の渦中にあるDボウイだけは我関せずと言つた顔でフリーマンと、その隣にいたウォルコット中佐の方へと歩み寄つていく。」

「チーフ。少し話がある」

「私からもなDボウイ。少し急ぎの用だから、先に話していいか?」

「……ああ」

「うむ。記念すべき異文化コミュニケーションを楽しんで貰つている最中非常に申し訳ないのだが、我々スペーススไนツに転属命令が下りた。転属はフェンリル極東支部だ」

「極東?」

「実は、最近ラダムの動きが妙だな。ミリー、例の地図を出してくれ」

「ラーサ!」

フリーマンの指示でミリーは部屋に備え付けてあつた大型ディスプレイに世界地図

を展開した。

それを待っている間、ウォルコット中佐はひっそりとDボウイの方へと近付いてくる。

「あのー、Dボウイさん。『ラーサ』という言葉は、了解、という意味の言葉で合っているのでしょうか？ どうやら翻訳機がそのまま再生しているのですが……」

「ああ、それで合っているよ、中佐」

「おほほ、すいませんね。こういう所で積極的に前に出ないと出番が回ってこなそうだったもので」

「？」

「諸君、この地図を見て頂きたい。ここ数週間、ラダムの襲撃を受けた地域を各支部が調べた結果なのだが、ご覧の通り、アジア方面。特に極東ブラックスポット支部近辺においてラダムが本格的な兵力投下をしている事が伺える」

フリーマンの言葉通り、地図にはラダムが現れた場所に赤い光点を指示していたが、その大半がアジア大陸や旧日本へと集中していた。逆に、ヨーロッパや欧州方面はほぼ真つ白だ。

「私はこれをラダムの重要な作戦の一環であると考え、迅速な対応を取る為にスペースナイツの転属を決定した。つい先程、先方に受理された所だ」



「ちよ、ちよつと待つてくれチーフ！」

「なんだノアル？」

「話分かるが、そしたらこのテキサス支部はどうなるんだ？ ゴッドイーターが居るって言ってもたつた三人。しかも一人はよちよち歩きの新米だぜ？ この広大な土地をブルーアース号なしで守るのは無理があるんじゃないのか？」

「……俺もそう言つたんだがね、どうやら別の所に飛ばされるんだとよ」

そう言いながら部屋へと入つて来たのは、右手に赤い腕輪をはめた、三人の男女だった。

三人の内、長身でタレ眼の男、真壁ハルオミは続ける。

「なんでも三人仲良くグラスゴー支部に転属だと。ま、あそこならアラガミやラダムの出現率も低いし、俺達だけでも何とかなる」

「ハルオミ！ でもよ……」

「おいおいノアル。自分たちがいなきや不安だつてか？ 大丈夫だつて。なんでもグラスゴーには最前線に出たがる武闘派の支部長が居るって話だし、のんびり羽を伸ばさせてもらうさ」

「ちよつとハル。遊びに行くんじゃないんだからね？」

ハルオミの横にいた長髪で眼鏡の女性、ケイト・ロウリーは呆れた様な声を上げた。

スペースナイツにこの二人の神機使いを入れたメンバーが、テキサス周辺のみならず、南米ほぼ全域を警備していた『世界一防衛範囲が広いフェンリル部隊』である。

そしてもう一人、未だ専用の神機が見つからず、訓練や雑事のみに従事している少年がいた。

ギルバート・マクレイン。

少し前までただの素行の悪い少年だった彼は、ハルオミとテツカマンブレードであるDボウイに命を救われ、改心をしたのだ。

「Dボウイさん」

「どうした、ギルバート？」

「俺、Dボウイさんから教わった槍捌きで絶対強いゴッドイーターになってみせます！」

「そう言えば、槍型の神機が開発中という話だったな。頑張れよ、ギルバート」

「はい！」

「相変わらず、ギルとDボウイは仲良いわね。声も似てるし、兄弟みたい」

「兄弟、か……」

「なあチーフ。三人がグラスゴーに飛ばされるってんなら、余計にこの辺の化け物退治はどうしようってんだよ？」

「無論、心配はいらない。実は『移動式フェンリル支部』の試作機が完成してな。外宇宙

開発機構の技術提供で完成が早まった事の礼として、テキサス周辺で試験運用されるらしい」

「移動式フェンリル支部。いつの間にそんな物が……」

「ともかくだ。これで後顧の憂いなく、我々は極東支部に行く事が出来る筈……だったのだが」

「なんだ、まだあるのかチーフ」

「あるというか、君達が『連れてきてしまった』んだがね」

「……あー」

そう言うのと、スペースサイトの面々はギャラクシーエンジン隊の方へと視線を向けた。

「ウォルコット中佐。我々には貴方達を拘束する権限も、理由もない。ここに留まるなら手配するし、どこか他に行く当てがあるなら止はしないが」

「何だったら、一緒にグラスゴー支部に行こうぜ。こんなに美しいお嬢さんが一緒だなんて、滅多にないからな」

「ハルはちよつと黙ってて！」

ケイトに凄まれて、渋谷部屋の端へと移動するハルオミ。

ギルバートが心配そうに歩み寄ろうとしたので、ケイトがとつ捕まえて動きを制す

る。

「構ってほしただけだから、調子つかせちゃダメよ」

「おやつ用を持ってきたクッキーとか、いります?」

「女の子が絡むのは最もダメよホント軽いからコイツ!」

「相変わらず苦労してるわね、ケイト……」

横目でチラチラ見ているハルオミと『なんだか面白そう』という理由だけで絡みに行くこうとするミルフィューをケイトが制し、それを見たアキがため息をつく。

「……あのー、フリーマン司令達は『極東』なる場所に行くのですよね? それでしたら、我々も同道した「はいはい!」もうロストテクノロジーとかどうでもいいので、私Dボウイ様に付いて行きまーす!!」

「……ミント。ガムテーム、残ってるか?」

「ダメですフォルテさん。マジックテープしか残っておりませんわ」

「くそつ、さつき使い過ぎたか!」

「……ウオルコット中佐、理由をお伺いしても?」

所構わず漫才を始めるエンジェル隊の娘達を無視して、フリーマンは話を進める。ウオルコット中佐も慣れているのか、真面目な流れをそのまま維持して続けた。

「はい。実は、我々が探しているロストテクノロジーは『鋼の聖女』と呼ばれている物で



—『第97管理外世界地球』フエンリルロシア支部隣接空港—

「あつついですわー……ここちよつと暑すぎだと思いませんかヴァニラさん？」

「……」

「……ヴァニラさん？」

『たつ、大変ですよ！ ヴァニラさん、立ったまま気絶しちやつてます!!』

「何だか面白い光景ですけども……今はとにかくメディック！ メディック!!」

ピンクの良く分からないぬいぐるみのノーマッドを抱えたまま直立不動だったヘツドギアを頭に乗せた縦マキロールの少女、ヴァニラ・<sup>アッシュ</sup>Hの周りをウサ耳青髪の少女、ミント・ブラマンジエがせわしなく動き回る。

事態に気が付いたミリーが救急箱を求めてブルーアース号の中へと戻っていった。

ここは目的地の極東ではなく、道中に立ち寄ったフエンリルロシア支部だ。

かつては極寒の地とも言える程寒い地域であったロシアだが、第三次大戦とアラガミの襲来による大規模な異常気象により、常夏の世界と化してしまった。

ハルオミ達をグラスゴー支部に届けた後、スペーススナイツのメンバー十ウオルコット中佐を乗せたブルーアース号はエンジェル隊の搭乗する紋章機と共に、ヨーロッパの広大な空を極東に向けて横断している最中だった。

しかし、フリーマンの指示により、一度ここで降りる事となったのだ。

本来なら予定にはなかった行動なのだが、丁度この地に極東支部長がやって来ていたという事で、道中ついでに拾う話になったらしい。

燃料節約のために空調を利かせて待機する事も出来ず、一同が灼熱の大地の中をぶつくさ文句を言いながら待機していると、施設の方から三人の男女がブルーアース号の方へと近付いてくるのが見えた。

「直接会うのは何年ぶりになるかな。久しぶり、フェンリルテキサス支部支部長兼、外宇宙開発機構所長兼、スペーススナイツの司令のハインリッヒ・フォン・フリーマン？」

「今はただのスペーススナイツ司令だよシツクザール。やっとその長い肩書から解放された訳だ」

（彼らの基準で）軽いジョークを交わした所で、男がエンジェル隊の方へと視線を移動させる。

「そちらの一団が、例のギャラクシーエンジェル隊だな？」

「そうだ。諸君、紹介しよう。こちらがフェンリル極東支部支部長のシツクザールだ」

「只今ご紹介に与った、フェンリル極東支部支部長のヨハネス・フォン・シツクザールだ。そして、私の隣にいる彼女は、これから極東支部に転属となる新型ゴッドイーターだ」

シツクザールに紹介された新型ゴッドイーターは、銀色の髪に、赤いベレー帽とミニ

スカートを纏った、白い肌の少女だった。

胸元が超絶怪しい服を着て身の丈以上の大きなケースを持った彼女は、特に親しげにする様子もなく、昔のロシアを彷彿とさせる冷たい目でスペースナイツやギヤラクシー エンジエル隊の面々を観察してから、口を開いた。

「アリサ・イリーニチナ・アミエーラです」

「そして、その隣が、医者のおオグルマ先生だ」

シツクザールは、アリサの隣にいた白衣の中年男性の簡単な紹介を済ませる。本人も深く語るつもりがないのか、軽く会釈するだけで何か言いたいことはない様子だった。

「細かく紹介してやりたいが、何よりここは暑い。まずは極東支部に戻り、改めて場を設ける事にしよう」

こんな暑い中コートにマフラー姿の男は暑さに適応しているのかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい様子だった。

いつの時代でもファッションは命がけらしい。



## 第6話『空中戦』

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』アジア旧日本海上空—

「ミュキ……」

無理矢理席を増設した事によりすし詰め状態となったブルーアース号のコックピットの一角で、Dボウイは妹の名を小さく呟いた。

その時だ。

けたたましい警戒音と共に、コックピット内が赤いランプで照らされる。

「ミリー、何があつた!？」

「高速で接近する機影を多数確認! 飛行型アラガミです!!」

「アキ、極東支部に救援依頼を送れ。大至急だ!」

「ラーサー!」

ミリーが観測用のレーダーを見る横で、アキが素早くキーボードを打ち込んでいく。間髪入れずに、フリーマンは別の指示を部下に飛ばした。

「Dボウイ! 君は先行出撃してブルーアース号の護衛だ。こうも人が多いとブルー

アース号での戦闘は無理だろう」

「ラーサ！」

『おっと、ちよつと待ちなチーフさんよ。私達の存在を忘れてるんじゃないのかい？』

通信ウインドウ越しに自信満々の表情を浮かべていたのは、フォルテを筆頭にしたギャラクシーエンジェル隊の面々だった。

『そのアラガミ？ は、宇宙で私らを襲った虫共とは違うみたいだけど、要は敵なんだろう？ 軽く撃ち落としてくつから待つてなつて』

それじゃ、と短く挨拶を済ませてからウインドウが閉じたと思うと、ブルーアース号周辺を飛んでいた紋章機達がフォーメーションを変更。

ブルーアース号の前面に扇状に展開する形で編隊飛行を始める。

「ミリー、観測を！」

「ラ、ラーサ！ エンジェルフレーム紋章機、飛行型アラガミへ攻撃を開始！ 着弾まであと10!!」

「果たして異世界の武器は連中に通じるのか……」

「……3……2……1……着弾確認！ 全弾命中です!!」

「何体落とせた!?!」

「確認します!」

しかし、ミリーがレーダーで観測するよりも先に、再びエンジェル隊との通信ウイン

ドウが開いた。

先程とは違い、焦りの表情が伺える。

『おいどういう事だい！ 連中、掠り傷一つも受けちゃいないよ?!』

『すつごい硬いです!!』

「やはり無理だったか！」

「チーフ！ 予定通り俺が出てアラガミを駆逐する!!」

「そうだな。連中に自分たちの天敵がゴッドイーターだけではない事を教えてやれ!!」

「ラーサ！」

シートを離れたDボウイは、ブルーアース号後部にある格納庫へと走る。

格納庫には、胸部装甲が開いたパワードスーツがあるが、Dボウイはその前を素通りする。

彼が向かった先には、パワードスーツより一回り二回り大きい元作業用ロボットのペガスが収納されており、相棒の到着を待ちわびていた。

Dボウイはペガスの前に立ち、胸部装甲に備え付けられたクリスタルへと意識を集中させる。

「ペガス！ テックセッターッ!!」

『ラーサ!』

Dボウイの叫び呼応するように、ペガスは台座ごと180度回転し、背面装甲を展開。その先には、人が一人入れるほどのスペースが確保されていた。Dボウイは躊躇なくその中へと身を投じる。

ブルーアース号の底面ハッチが開き、背中のウイングを大きく開いたペガスが宙を舞う。

そして大空の真ん中で、ペガスの頭部パーツが開き、中のDボウイが外へと現れた。

否、今の彼はDボウイではない。

赤と白の鎧を纏い、両刃の槍を携える、宇宙の騎士。

そう、彼の名は。

「テツカマン！ ブレード!!」

〔2〕

「行くぞ、ペガス！」

『ラーサー！』

両刃の槍、テックランサーを携えたブレードが、ペガスの背に乗りアラガミの群れへと切り込んでいく。

アラガミは黒い卵に白い女神の石灰像を模した口のある小型アラガミのザイゴートと、青いドレスを纏った女性の風貌を持つ中型アラガミ、サリエルによる構成だった。

飛行能力を持つこのアラガミは、神機使いにとつても戦法が限られる相手だ。

しかし、テックマンには関係ない。

「うおりゃあああああああああああ!!」

テックランサーをコマの様に回転させるブレード。

紋章機五機による一斉攻撃で傷一つ負わなかったその堅牢な身体が、いとも容易く引き千切られ、その体を瓦解させながら眼下に広がる大海原へと落下していく。

だが、アラガミ達もただの的で終わる気はない様だ。

二種類のアラガミが得意とするのは遠距離攻撃。

ザイゴートの毒の弾とサリエルの光弾が分厚い弾幕を張りながらブレードを次第に追い詰める。

上下左右縦横無尽に移動する事で攻撃を掻い潜り、その間際に敵を切り捨てるブレー

ドだが、如何せん数に圧倒的な差があり過ぎた。

「くっ、やはりボルテツカを使わざるを得ないか！」

ボルテツカは、威力、範囲共に高いテツカマンの必殺技だ。

しかし、一度の変身で一発しか使用できない事から、使い場面は自然と限られてしま  
う。

だが、彼に迷っている時間は無かった。

こうしている間にも、アラガミの弾幕は激しさを増していく。

「せめて10秒……いや、5秒隙があれば!!」

『5秒10秒と言わず、1分くらいゆっくりさせてやるよDボウイ!』

ブレードの横合いから、ミサイルと砲撃の一斉射が轟いた。

続く様に五体の銀河の天使達がアラガミの群れの中をかき乱すような滅茶苦茶な軌道を描いて戦場を暴れ回り始める。

「エンジェル隊か! しかし、君達の武器ではアラガミには對抗する事は……」

『例え攻撃できなくても、困くらいこなしてみせるさ! 行くよ皆!!』

『うおおおおお! 気張るのよ蘭花・フランボワーズ! 死ぬのが怖くて恋が出来るかアーツ!』

『キヤー! そう言えば、自分の部屋の冷蔵庫にある卵を使い切るのを忘れてしまいま

した!!』

『ミルフィーユさん、流石にあの黒卵を見てそれを思い出すのはどうかと思いますよアババババババヴァニラさん! そんなチキンレースみたいな変態軌道しなくても良いんですよ!』

『当たらなければどうという事はない……』

『皆さんやる気十分みたいですけども、結構一杯一杯なので早めに対処して頂くと助かりますわーっ!』

そんなエンジェル隊の動きが功を奏したのか、ブレード一体に集中砲火を浴びせていたアラガミ達の狙いが分散される。

宣言通り1分程度の余裕がブレードにもたらされる。

「助かった! 後は任せろエンジェル隊!」

『お前ら最後の仕事だ! 敵さんをDボウイの真ん前に案内してやりな!』

『了解!!』

ペガスが変形し、ハイコート・ボルテツカの発射体勢が整うと同時、5機の紋章機達も直線軌道で射線上から退避する。

ブレードが肩の装甲を展開すると同時、彼の前にフェルミオン粒子の球体が生成されていく。





しかし、距離を考えればアラガミがブルーアース号と接触する方が早い。

「クソツッ！ 何か手は……」

『おっと！ まさかこの期に及んで俺の存在を忘れてるんじゃないだろうな、Dボウイ  
!!』

通信に割り込んできた声の主は、ノアルだった。

『スペーススナイツにやもう一人テツカマンが居る事を教えてやるぜ、この卵野郎！』  
呼応するようにブルーアース号の上部ハッチが開き、中から青と白のテツカマンが現れる。

否、正確にはテツカマンではない。

ラダムのテツカマンのデータを参考に作られた地球製テツカマン、『ソルテツカマン』  
だ。

ソルテツカマンはバックパックに装備された射撃武器、フェルミオン砲を回転させ、  
砲身をザイゴートへと向けた。

右腕部分に装着されていたレーザーライフルと合体させる事によりフェルミオン砲  
の展開は完了だ。

それと同時に、射撃用の特殊なバイザー付きヘッドパーツがソルテツカマンの頭部へと  
装着される。

『フェルミオン砲を食らいやがれ!』

フェルミオンとは、テツカマンのボルテツカで使用される反物質『フェルミオン』を解析し、そのまま兵器に転用した物だ。

廉価版なので一発の威力は本家には及ばないが、燃費を抑えた結果使用回数が確保された。

だが、そんな廉価版とは言え、アラガミ一匹程度消し飛ばすのには十分すぎる威力を持っていた。

反撃される事を考慮していなかったザイゴートは成す統べなくフェルミオン砲の光を浴びて消し飛んでしまう。

【3】

『助かったぞ、ノアル!』

『へッ、主役は最期に遅れて登場するものなのさ!』

『ノアルがまた調子に乗ってるわ……』

『しかし、助けられたのは事実だ。それよりアキ、極東支部からの救援は?』

『……現在軍用ヘリで第一部隊が急行中。10分後には合流可能だそうです』

『10分か……Dボウイの方の『残り時間』は?』

『まだ20分以上ありますが、ボルテツカを使用したのもう限界が近いかと』

「そうだな。後はノアルに任せて、一旦Dボウイを下がらせよう」

一通り支持を出し終えた所で、フリーマンは椅子の上で一度深く深呼吸する。だが、彼らに与えられた平穩はその一瞬のみだった。

再び警報が船内に鳴り響く。

「チーフ！ レーダーに新たな反応あり！ 上空から多数接近中!!」

「上空!? まさかラダムか!？」

『こちらミント！ わたくしの方のレーダーでも敵を感知！ 後ろから黒い卵の御一行がやってきますわ!!』

『あーっ!! そう言えば今日は卵パックの特売日で『ミルフィーユはちよつと卵から離れなさいよ!!』

目尻に涙を浮かべながら心の底からエンジェル隊の台所事情を心配するミルフィーユの言葉を蘭花が一刀両断する。

『お待ちくださいいな！ ラダムと思しき一団の中に、人型の生命体を一体確認致しましたわ!』

『見えた！ 奴はテツカマンだ！ 俺が叩く!!』

『待ってDボウイ！ 今の状態でテツカマンと戦うのは得策じゃないわ!』

『だが、テツカマンは俺でしか倒せない。いや、俺が倒さないといけないんだ!!』

アキの叫びを聞いてもなお、ブレードは止まらずに通信を遮断。単身ラダムの群れへと向かっていく。

「仕方ありませんな……あー、エンジェル隊の皆さん。ここはDボウイさんを援護してさ」『今行くわDボウイ様アーツ!!』

『おい待て蘭花！ くそつ、皆、あの脳筋を追いかけるよ！』

『おいおい、俺一人でアラガミとやり合うのか!? 少し数が多すぎるぜ！』

『なんだよ主役だつて啖呵切つた癖に情けない奴だねえ……蘭花の援護はヴァニラとミルフィーユに任せる！ ミントは私と一緒に死神とダンスだ!!』

『ちよつと待つてくださいいフォルテさん！ 何でわたくしがまた囧などあああああああああああ勝手に操縦がオートにあああああああああ!!』

『ヴェハハハハ！ こんな事もあるうかと、仕込んでたんですよオート機能!!』

『今だけは良くやったノーマッド!』

『後で腹ん中のワタ引きずり出してやりますから覚悟しておきなさいこの腐れぬいぐるみああああああああああああ!!』

「……」

「……ウオルコット中佐」

「いや、良いんです。ちよつと出しやばつて指揮官みたいな事をしようとした私がいけ

ないんです。どうせ私は昼行灯で窓際族ですから……」

窓から明後日の方向を見続けるウォルコット中佐に、フリーマンはこれ以上かける言葉を見つける事が出来なかった。

〔4〕

上空からブルーアース号目掛けて降下する一団の中に紫色の円盤の様な生命体の上に立った深緑色のテッカマンの姿を見たとき、思わずテッカマンブレードはその名を口にした。

「テッカマンアックスか！」

「ハツハツハ、久しぶりだなブレード！ いや、ここは敢えてタカ坊と呼んでやるかな！」

「貴様は俺の知るゴダードではない！ その体に乗っ取った悪魔、ラダムだ!!」

「つれないなタカ坊！ どれ、昔の様に稽古を着けてやろうじゃないか！」

「笑わせるな！」

「逆立ちしたってワシに勝てないお前との戦いなど、稽古と呼ぶのにふさわしいわ!!」

ブレードのテックランサーと、アックスが持つテックランサーの切っ先が激突する。

アックスの持つテックランサーは先端に斧の様な半月の刃が備わっており、アックスは槍というより斧を振り回す様にブレードの攻撃を逸らしていく。

「ダガーを倒した程度で調子に乗っているようだが、今のお前はまだまだ半人前よ！」  
「いつまで師匠面するつもりだ！」

「師匠らしく『お前が俺を倒すまで』とでも言ってるみるか!？」

アックスの言葉に逆上してテックランサーを乱暴に振り回すブレードだが、どこから攻撃しても綺麗に捌かれ、反撃を許してしまふ。

師匠を称するのは伊達では無く、アックスはブレードの、Dボウイの戦う時の動きの『癖』を完璧に把握していたのだ。

「ボルテツカが使えない今のお前なら潰すのは容易だからな。『特異点』探しの邪魔だけはさせんぞブレード！」

「『特異点』だと？ ミユキはもしかしてそれを追って……う？」

「ほう、テツカマンレイピアもここに居るのか！ これはますますこの先に通せなくなってしまうたな！」

「しまっ……?!？」

その時だ。

赤と白の紋章機、蘭花の乗るカンフーフアイターが二人のテツカマンの間を引き裂く様にして飛び込んできた。

「又ウ!？」

『相手が疲れている所を狙ってくる卑怯者が図々しく師匠なんて名乗るんじゃないわよ！』

アンカーアームの先をそのままテッカマンアックスにぶつけ、円盤生命体の上から彼を殴り落とす蘭花。

紋章機のパイロットである以前に一人の格闘家である彼女の拳を感じ取ったアックスは笑いながら、

「拳の付いた戦闘機とは中々面白い！ だが今のワシはラダムのテッカマン。勝つ為なら己の格闘家としての矜持も棄ててみせるわ!!」

一人の格闘家である以前にテッカマンだった彼はアンカーを根元からテックランサーで切り落とし、いとも容易く窮地から脱して見せた。

再び円盤生命体の上に陣取り、態々落下していくアンカーアームを見ながら余裕の態度をブレード達に見せつける。

「女の手を借りてもこれかタカ坊！ 正直見損なつたぞ！」

「くそっ！」

『大丈夫ですかドリムボウイさん！』

『デンジャラスですよミルファイユさん!!』

ミルファイユとヴァニラ（喋っているのはノーマッドだが）も合流するも、アックス

は以前余裕の体勢を変えなかつた。

「ラダム獣よ、あの戦闘機の動きを止めておけ！ ブレードにはワシが直接引導を渡してやる！」

「キシヤアアアア!!」

奇声を上げながら突撃するラダム獣の群れと、それを先導するアックスに対抗するべく、ブレードとミルフィュー達は少ない時間で迎撃準備を整える。



## 第7話『宙を舞う神機使い』

〔一〕

一方その頃、ブルーアース号を護衛していたノアル、フォルテ、ミントもまた苦戦を強いられていた。

『おいノアル！ 攻撃の頻度が落ちてるよ！ まさかサボってんじゃないでしょうね！?』

『うるせえ残弾気にして慎重になつてんだよ！ クソツ、ちよこまか動く上に数に限りかねえ！』

『ああもう、腹いせに攻撃してもヒビ一つ入らないなんて、なんて憎たらしい卵でしょう！ はっ！ まさか、この前ミルフィーユさんとショッピングに行った時にコーナーの角の棚ごと割った卵達の怨念がたくしを執拗に追いかけてきているのでは……?』

やけくそになったミントは他の事を気にできる程度の余裕を見せてはいたものの、緊迫した状況は脱せてはいなかった。

「第一部隊到着まであと5分です！」

「それまで持ち堪えられるのか……?」

「これはもしかして、悠長に構えていられなくなるのも時間の問題ですかね……?」

焦りが滲み始めたフリーマンとウォルコット中佐の後ろの席で沈黙を守っていた『彼女』が、遂に動き出す。

「支部長。ここは私が出ます」

彼女、アリサ・イリーニチナ・アミエーラは横に置いてあつた巨大なケースを片手で軽々と持ち上げ、座席から立ち上がった。

「君はまだ訓練生上がりだろう? それに、空中戦を想定した特殊な訓練など受けていない筈だが」

「例えどんな戦場であっても、アラガミと戦うのはゴッドイーターの役目です。出撃の許可を」

「許可も何も、君はまだ極東支部の人間ではない。向うで正式な手続きを済ませるまで、私に君への命令権は存在しないよ」

「それでは、自己の判断で向かわせていただきます」

一人ブルーアース号後部の格納庫に向かいながら、アリサは嚴重にロックされていたケースを開いた。

現れたのは、青い刀身の神機だ。

片刃のロングブレードに、ガトリング砲デザインのアサルト、青い円盾のセットが、彼

女の扱う神機だった。

訓練が始まった頃からの相棒を携えて、上部ハッチへと至る昇降機に乗るアリサ。

『上部ハッチ開放します！　アリサさん、ご武運を！』

「……」

ミリーの言葉を聞きながら、アリサは目を閉じた。

自身の内面世界に入り、記憶を反芻する。

憎き敵、アラガミ。

その姿を、思い出す。

あの、あの憎き『黒いアラガミ』を倒すまで、自分は死ねない。

ハッチが開き、アリサの身体を強風が襲い始めると同時、目を開く。

もう、あの頃の弱かった自分はいない。

パパとママと死なせてしまった自分はいない。

手にした神機の重さを全身で感じながら、アリサは一步、前へと踏み出した。

「ん？ おい！ いくらゴッドイーターって言っても、こんな空の上じゃ……」

「その話題は先程終わりましたので」

ソルテツカマンに入るノアルの言葉を軽く遮りながら、アリサは神機を銃形態へと変形させながら跳躍する。

「ッー」

直後、ドガガガガガガガガガガガガガガ!! と神機の銃口から轟音が鳴り響き、数多のオラクルの弾丸が射出される。

神機は言わば、武器の形をした『アラガミ』だ。

当然、どの攻撃も程度の差こそあれ、アラガミには有効だ。そんな死の弾丸を、アリサは容赦なく空中にバラ撒いたのだ。

『おいやバツ……！ 避けるミント！』

『えっ？ きゃあああ!?!』

放たれたオラクル弾の一発がミントの乗るトリックマスターを掠める。

掠めた弾丸は速度を落とす事無く、死角から襲おうとしていたザイゴートを仕留めていた。他の弾もほぼ直撃が悪くても至近弾だ。実質全弾命中と言っても差し支えないだろう。

『ちよつ、危ないじゃありませんか！ もう少し違った方法を取って頂いても良かったのではあります』

「いえ、良い位置です」

激昂するミントの言葉を遮り、空中で自由落下していたアリサはフォルテの乗るハツピートリガーの上に飛び乗る。

反動をそのままバネにして大空へと舞い戻っていく。

『私を踏み台にしたあ!?!』

フォルテの叫びをバックに、神機を近接形態へ変形させる。

近くにいたサリエルを切り捨て、返す刀でザイゴートを二体巻き込んで三枚おろしにしてしまう。

しかし、アリサは新型とは言えただのゴッドイーター。テッカマンや紋章機のような飛行能力は存在しない。

だが彼女の目には諦めの表情など一切なかった。ただ冷めた目で憎き怨敵の親類を

見据えるだけだった。

それを隙だと勘違いした一体のサリエルが奇声を上げながら特攻してくる。

だが、それこそ彼女の待ち望んだチャンスでもあった。直後、神機から伸びた巨大な『牙』がサリエルに喰らい付く。

プレデターフォーム  
捕食形態。

本来ならアラガミから素材やコアを回収する為の形態だ。

しかし、アリサはそれでサリエルを『掴み』、まるで空中ブランコにでも乗っているかのような華麗な動きで高度を上げた。

回転の支点となったサリエルは神機の罅によって食い破られ、そのまま下へと落下していく。

「これで……ッ！」

刃を上段に構え、勢いよく振り下ろす。当然、足を付ける地面がないので踏ん張って力を溜める事は出来ないが、アリサは逆に地面がない事を逆手に取り、そのままコマの様に縦に回転を開始。

そのまま眼下にいたアラガミの残党を一掃したのだ。

「終わりました。楽勝ですね」

「……すげえ」

ブルーアース号の上に綺麗に着地する所までを見て、援護射撃を忘れて見とれていたノアルがつい感嘆の声をあげてしまう。

『あー、こちら極東支部所属ゴッドイーター第一部隊、隊長の雨宮リンドウ少尉であります。只今そちらを目視で確認。で、アラガミが全滅しているようですが、とりあえず合流します』

「……」

なんか適当な調子の男の声が通信で流れてくると、呼応するようにフェンリルが使用する黒いヘリコプターがブルーアース号へと接近していた。

ヘリの扉は開かれており、そこから赤黒い神機を持った男と、その横でドアに必死にしがみついている眼鏡の少女が全力で何かを叫んでいた。

アリサからは何を言っているか分からないが、辛うじて悲鳴を挙げていそうな口の動きをしている。

「おい……おい……」

「……」

何やら視界がぐらつくと思ったら、ソルテツカマンことノアルに肩を掴まれて上半身

を揺さぶられていた。

「私が、何か？」

「何かじゃねえよ！ 『味方に向かって』撃つなんて、正気とは思えないぜ!!」

「え……？」

ノアルに指摘され、自身の手元を確認するアリサ。

そこにはいつの間にか銃形態に変形していた神機の銃口がヘリへと向けられており、何発かオラクル弾を発射した形跡が確かに残っていた。

「何で……？」

神機を変形させながら、アリサは困惑してしまふ。

何故だろう？ 『居る筈のない』怨敵の姿が一瞬映った様な気がしたのだが、とまで考えて、アリサは首を横に振る。

「……一つ、良いですか？」

「なんだ？」

意識を切り替える為にも、アリサは近くにいたノアルに話しかけ始める。

「噂のスペースナイツやギャラクシーエンジェル隊って、意外と大したことないんですね」



「おまつ、最後に出て来て美味しい所全部持って行った奴の台詞かよ！」

『人を踏み台にするわ、味方に誤射するような奴に言われたかないねえ!!』

『全くですわ！ 貴女これからデンジャラスガール決定ですわ!!』

「事実を言っているだけです。それと、変な名前付けないで下さい。ドン引きです」

「畜生、最初に俺達に会った頃のDボウイより酷いな、お前!!」

【2】

「やれやれ、まさかあんな隠し玉が用意されていたとはな。増援も来てしまった様だし、タカ坊、本日の稽古はここまでするか！」

「逃げるのか、アックス！」

「見逃してやる、と言っているのだよバカ弟子め！ 正直癪だが、何、折を見てレイピア共々地獄へ葬ってやるさ！」

劣勢側に立たされていたにも関わらず、全く余裕を崩さなかったテツカマンアックスはラダム獣を囿に使い、その場を去ってしまう。

「くそっ！」

残った敵をミルフィーユ達と共に蹴散らしたブレード。

だが、今の彼には遙か彼方のオービタルリングに戻ったアックスを追いかける力も『時間』も残されてはいなかった。

しかし、と眩きながら、ブレードはブルーアース号の方へと視線を向ける。

丁度、援軍だったヘリが合流を果たしている最中だった。

『『新型』となると、ここまで違いが出るものなのか……？』

知古の神機使い達の顔と彼らとの戦いの日々をを思い浮かべながら、ブレードはミルフィーユ達と共にブルーアース号へと戻っていった……。

## 第8 『旧友たちの邂逅』

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』フエンリル極東支部『アナグラ』内部—  
本日のお仕事。

日本海上空で襲撃を受けたシツクザール支部長、及び新たに仲間になる方々の救出。  
しかし、肩口までで揃えられた黒髪を持つ男物眼鏡の少女、有栖レナはやった事と言  
えばヘリコプターの中で高さで揺れで震え、挙句味方に『誤射』されて半分泣きながら  
絶叫しただけだった。

これでは何をしに行つたかさっぱり分からないというものだ。

「あー、この仕事向いてないのかなあ……」

そんな彼女は現在、神機格納庫の端で体育座りをしながら缶ジュース片手に黄昏れて  
いる最中だった。

噂では新しい人の内一人は自分と同じ『新型』で、尚且つ初戦で華麗に空を飛んだり  
跳ねたりしていたそうだ。それに比べて自分のこれまでの戦いといえれば？

初戦で人のいる教会の屋根をブチ抜いて落下。

先輩の死に動揺して神機を空振り。

「……はあ」

思い返すだけで憂鬱にもなろうというものだ。

ぐい、つと缶ジュースに口を付けて傾けるレナ。

柄も見ないで適当に選んだものだが、正直外れだった。一気に飲み干し空き缶をゴミ箱に放り棄てた後、再び同じポジションでブツブツと呟き始める。

「こんな所で何してるの、レナ？」

ボーっとしていたレナを見かねて声をかけてきたのは、上はシャツ一枚に作業ズボンを穿いた、全身煤だらけの少女だった。

神機の整備を担当している桶くすのきリツカだ。

「リツカこそ、何してるのさ？」

「何って、ここは私の戦場だよ？」

「そっかー。ここにも私の居場所はないのか……」

「何ナイーブになつてんの？」

歳が近いという事もあり、二人は出会ってすぐ仲良くなっていた。

元々友人が少ないのと、リツカが技術班所属で友達が少ない所で変な意気投合の仕方をしたらしい。

リツカが自分の隣に座ったのを確認してから、レナは口を開いた。

「いやあ。新しくやって来た賑やかな人達の中に、一人神機使いが居たじゃない？ ああ人の華々しい戦果を聞いて、私なんて足元にも及ばないなあって」

「ああ。そんな事」

「リツカには分かんないよ私の気持ちなんてさー」

「いや、解るよ。沢山の神機使い達を見てきたから」

ちよつとこつち来て。

とリツカに腕を掴まれながらレナが連れていかれたのは、普段は整備班くらいしか入らない彼らの戦場、神機の工房だった。

壁際に均等に配置された作業台にはまさに現在修理中の神機が並べられており、リツカはその内の一台を指し示す。

「ほら、これ……彼女、例のアリサって女の子の神機なんだけど」

「この『ガラクタ』が？」

頭をポリポリ掻きながら、レナは顔をしかめた。

今彼女の目の前にあったのは、辛うじて元が神機である事が解る程度の残骸だった。

刃は欠け、銃身は折れ、至る所に凹みが生じている。

「高々度での高速変形や、捕喰形態で敵を『掴む』攻撃。本来想定されていない無茶な使

い方をし過ぎたみたいなんだよね」

「そんな使い方思いつかないよ普通」

「そう。私達も『思いつかなかった』。だからこそ、それに対応する調整をしようとも思っていないかったんだ。まあ、これは『新型』だからこそと言えるね。なんとつてウチの支部にもレナ一人しかいない様なレア物なんだから」

「私ってそんな貴重だったんだ……でもでも、そのアリサ？　なら私よりもずっと上手く使いこなせるんじゃない？」

「いや、ダメだよ。私から言わせてもらおうと、レナの足元にも及ばない」

え？　という素っ頓狂な声を上げるレナ。

気にせずリツカは続ける。

「あの子、神機を全く大事に扱ってないんだよ。確かに、神機は人じゃない。アラガミを倒す『兵器』だって事は重々承知してる。でもね、ゴッドイーターって、チーム戦が基本だけど、たった一人で任務に赴く事だって少なくないんだ。そんな時、たった一人で戦うゴッドイーターを支えてくれるのが神機、この子達なんだよ」

「……そっか。こいつらも『仲間』なんだよね」

「そう。レナの場合はまだまだだけど、神機を大切に、でも性能限界まで引き出そうとしているのは解るんだ。だから、ただの道具としか思っていない使い方をするアリサとは雲

泥の差があるんだよ」

「え？ 私を使い方までわかるの!？」

「当然。レナの優しさが神機にも伝わって、私達に教えてくれるんだよ」

リツカのその言葉に感銘を受けたレナは、思わず自分の視界が霞んでいる事に気が付いた。

それが涙と分かるや否や、リツカに抱き着き頬ずりを始めてしまう。

「ちよ、ちよつとレナ!？」

「ありがとうリツガア……わだじ、がんばるう……」

「分かったからちよつと離れて！ 鼻水！ 鼻水が顔に!!」

「ずびー……ッ」

女の子らしからぬ間抜け顔で鼻水を拭うレナを、リツカはため息交じりに見守る。これでは友人というより姉妹だ。

「甘えん坊の妹レナは「そうだ」と呟き、しつかり者の姉リツカに新しい話題を振る。

「ならば、神機にも名前付けてあげようかな」

「おつ、良いね。きつと喜ぶよ」

「そうだなあ……」

うーん、と唸りながら記憶の中にある、良さげなワードを検索するレナ。

「……『残虐行為手当』とかどう?」

「いや、意味分らないし。どこをどう思考したらそんな単語創造するのさ!」

間髪入れず却下された。

「じゃあ、『油揚げ定食』?」

「何も妥協出来てない!」

自分で言っておいてなんだが、何ともしつくりこない単語ばかりであった。何とか、聞く分には問題ないが、自分の口から出すのには抵抗がある感じだ。

「えーつと、じゃあ……『護業』とかどうかな?」

「(ぎ)ぎよう?」

「そ。護る業と書いて護業。なんか色んな武器がある所とかベストマッチな感じだよね!!」

「レナが何の電波拾ったか知らないけどさ、まあ、さっきのナントカ手当とかナントカ定食よりは断然良いと思うよ、うん」

「よーし、心機一転。頑張るぞ、護業ちゃん!!」

「……一つ得た事と言えば、レナにはネーミングセンスが皆無だという事だね。これだと将来のお子さんの名前とか大変なの付けそう」

「むー。じゃあその時はリツカに付けてもらう!」



「ちよつ、何で私なの!?　だ、旦那さんに頼めば良いんじゃない……」

「じゃアリツカが今から私の旦那さんだ!!」

「待って」

自分でも滅茶苦茶な事を言っていた事にレナが気が付いたのは、いつの間にか部屋で寝ていた彼女が、飲んでいた缶ジュースの成分表に『アルコール度数15%』と表記されている事に気が付いた後だった。

(※本作品はフィクションです。お酒タバコは二十歳になつてから!)

## 【2】

レナがリツカとイチヤイチャしていたその頃、アナグラの作戦会議室に集まったヨハン、ペイラー・榎さかき、フリーマン、Dボウイ、ウォルコット中佐、ノーマットの5人（+ぬいぐるみ）は巨大な机を囲んでいた。

しかし、これからは始まるのは親睦会を兼ねたパーティーではなく、今後の方針を決める大事な会議だった。

「では、これより我々フェンリルと、スペースナイツ、ギャラクシーエンジェル隊による

合同会議を開始したいと思う。榊博士、現在極東支部が置かれている状況を彼らに解説して欲しい」

「解つたよ、ヨハン」

榊博士と呼ばれた丸眼鏡の男性、ペイラー・榊が席から立ちあがる。

「……榊博士。気持ちにはわかるが、一応仕事 중이다。公私混同は控えてくれ」

「ああ、済まない。僕とヨハ……シツクザール支部長とフリーマンチーフは知古の間柄でね。つい昔を思い出してしまつて」

改めて、とペイラーは会議室に集まつた一同を見渡し、口を開き始めた。

「フエンリル極東支部技術部門主任、ペイラー・榊です。今後とも、よろしく。さて、挨拶が済んだ所で本題に入ろうか。まずはこちらの世界地図を見ながら話を進めていこうと思う。この画像は既に本部を通して全支部へと送信された『ここ数か月のラダム出現パターン』の分布図だ。既にご存知の通り、ここ、極東を始めとしたアジア大陸周辺での目撃情報が頻発している。スペースナイツを要するテキサス支部の様に空中、果ては宇宙での積極的な活動が出来ない我々では、降下してきたラダムに対し、後出しでゴッドイーターやフエンリルギルドのメンバーを送らざるを得ない状況だ。この状況を打破する為にヨハンが四方八方に手を尽くしてスペースナイツを呼んできてくれた訳だね。しかも、ギャラクシーエンジェル隊という、嬉しい誤算付きで、ね」

「呼び方が戻っているぞ、ペイラー」

「そういう君こそ」

「……話が円滑に進むなら、それでいい。ペイラー、続けてくれ」

「やれやれ、自分だけ逃げたか……さておき、ここに来る前にギャラクシーエンジェル隊の皆はアラガミ、ラダムとの三つ巴戦になったようだけど、アラガミが如何にして脅威足り得るのか、というのを身を持って実感して頂いたと思うんだ」

「それはもう、しつかりと」

『僕の場合、戦闘が終わった後の方が死ぬかと思いましたがどね……』

ウオルコット中佐に続き、そう言ったノーマッド。彼(?)の身体は全身に包帯や絆創膏を纏った重症患者のコスプレ状態だった。

匣に使われたミントの怒りを買って、それはもう描写出来ない程グロッキーな惨状になっていたので。もうしばらく花柄模様のあしらわれたチェインソーは見れそうになり。

「そもそも、アラガミやラダムが何故この地球を狙っているのか。部外者としてはそれが気になりますな」

「残念ながら、アラガミもラダムもまだ不明な点が多くてね。ラダム到来から約半年、アラガミに至っては二十年程経過しているにも関わらず、研究成果の方の進捗は時間に

伴っていないのが現実だ」

しかし、とペイラーは一度話題を区切り、沈黙を保っていたスペーススーツの面々へと視線を向けた。

「フリーマン達は何か掴んだようだね？」

「あまり精査できていない内容ではない為、まだ私見の域を出ないのだが、我々はアラガミとラダム、そして『ノーバディ』には何かしらの因果関係があると踏んでいる」

『ノーバディ？　ここにきて新しい単語が出てきましたね』

「宇宙でお前達を襲った『黒い球体』を覚えているか？　あれを俺達は『ノーバディ』と呼んでいる」

「地上ではその姿が一切確認されず、宇宙ではラダムを頻繁に襲撃している事からアラガミの一種であると我々は睨んでいたのだが、つい先日『所属不明の戦艦』が、ノーバディに『吸収』された事からその線は更に濃厚になった」

「確か、アラガミは『他の物質を捕喰して取り込む』という話でしたな」

「少し違うかな。『捕喰行為によって得た物質から情報を学ぶ』というのが正しいアラガミの生態だよ」

「話を戻そう。地上のアラガミの様に何かしらの生物を模していない事から『名無し』という名を冠することが決定された。無論、これは未だ連中がアラガミと断定されていない

いという意味も込められているのだが」

「あのー、先程から話を逸らしてばかりで申し訳ないのですが、先程一瞬触れた『所属不明の戦艦』とは？」

「今から一週間程前にラダムとノーバディに襲われていた、正真正銘謎の戦艦だ。最も、本当に戦艦だったかどうかまでは確認出来なかった。その前に『取り込まれてしまった』のですね」

「……ノーマッドさん。管理局から頂いた『L級次元航行艦』の画像を出して頂けますか？」

『分かりました。では、パネルのコードをこちらに』

ノーマッドの指示に従い、ウォルコット中佐はディスプレイから伸びていたコードを狸なのかペンギンなのか良くわからぬ謎の生命体を模したぬいぐるみの口へと容赦なく突っ込んだ。

「「……………」」

余りにも異様な光景にウォルコット中佐を除いた4人はドン引きしてしまうのだが、シールドでカオスな事が日常茶飯に起きているトランスヴァール組には気にも留めなかった。

『うわあ……これはまた原始的な機材を使っていますねえ。出力時に解像度が落ちてし

「まいそうですが、それでも良いですか？」

「構いませんよ。お願いします」

『では皆々様。画面の方にご注目してください』

ノーマッドの指示に従い、画面へと注目する一同。そこに写ったのは、

なんかやたらモザイクかかって見えるライトグリーン髪の少女、ヴァニラのHあられもない画像だった。

『あー、すいませんヴァニラさんとの思い出のツーショットを出してしまいましたフヘヘヘ』

照れながら画像を切り替えるノーマッドだが、一同（今度はウォルコット中佐含む）の顔は先程にも増して引きつっていた。

元は普通の写真なのだろうが、輪郭が解る程度のモザイクのせいでもことなくいやらしい画像に変貌していたからだ。

こう、R-18的なアレとだけ言うのと聡明な紳士諸君はご理解頂けるかもしれない。

その後も、タコのような生物に絡まれる赤髪の女性や、砂漠を歩く複数の着ぐるみ、フ

リフリミニスカートを履いてステッキを持つ少女達、大木のど真ん中に青い髪の少女が生えているシニールな写真（全て画質が酷いので詳細は不明）が流れていく中、1枚の写真へとたどり着いた。円錐を2つ平行につなげた様な形をした人工物が、虹色の空間を背景に浮かんでいる。

例に漏れず解像度が低いが、確かに、戦艦と言われればそう見えるかもしれない。

『こちらが、時空管理局から頂いた彼らの主力艦『L級次元航行艦』の画像ですね。半年ほど前から世代交代が始まっているらしいので、現在このタイプの艦はほとんど残っていないそうですよ』

「どうかね、Dボウイ?」

「色は少し違うが、これで間違いない。俺達の前で『喰われた』連中と同じものだ」  
「それはつまり……?」

時空管理局の遺失物管理部隊。

奇しくもギャラクシーエンジン隊と同じ使命を持つ別世界の戦艦は、彼女らが到着する前から既に『存在しなかった』のだ。

「……」

衝撃の事実にも、思わずウォルコット中佐は沈黙してしまふ。

そして、思ったのだ。

ただの異文化交流を兼ねた合同での宝探しの筈が、随分と話がシリアスな方向に進み過ぎてはいないだろうか？ と。



## 解説回：ペイラー・榊のGE講座【2】

〔ペイラー榊のGE講座2〕

やあ。今日も揃っているね！

前回、アラガミの捕喰、学習機能についての話をしたけれど、ちゃんと覚えているかな？

さて、今回は僕達フエンリルが戦うべきもう一つの天敵『ラダム』についての話だよ。これに関しては日も浅いから君達もよく覚えているだろう。

半年前、突如として宇宙の彼方からやって来た彼らは、何の宣戦布告もなしに地球への攻撃を開始した。

……こんな事を言うと、自分がSF物語の登場人物になったみたいでワクワクするんだけど、どうかな？

寄り道はさて置き、最初我々はオービタルリング内で異様な進化を遂げたアラガミの一種であると仮定を導き出したんだ。

なんせオービタルリングは十数年前に、地上のゲートをアラガミに破壊されてから、行き来は不可能だったからね。何があつたも別段不思議じゃない。

それに、彼らの尖兵である虫型のエイリアン『ラダム獣』はアラガミ同様、既存の兵器では傷を負わなかったからね。

ただ、観測後、神機使いが倒したラダム獣の遺体から……そう。

『単細胞生物であるオラクル細胞の群体』である筈のアラガミが組織形勢を保つたまま死ぬなんてありえない話だ。

その遺体から、ラダム獣が地球外生命体である事が発覚したんだ。

そして、地上へ降り立ったラダム獣は地中へ潜り、やがてラダム樹という植物へと変貌するんだ。

ラダム樹一帯の気成分が大きく変化する事から、ラダム獣を使役する宇宙人、テツカマンが自分たちの住みやすい環境にラダム・フォーミングしていると予想されているんだね。

アラガミだけでも手一杯なのに、宇宙からラダムが降ってきて開拓を始めた。

これはもう人類絶望待ったなしだと言いたい所だけど、実際は今日まで生きながらえ

ている。

それは何故か？

それは、彼ら二種がお互いを攻撃し合っているからなんだ。

ラダム獣を見かけたアラガミが突如神機使い達との戦闘を切り上げ、執拗にラダム獣に攻撃していた。という報告も上がってきている。

似た様な現象が世界各地で発生した事から、この事実には確信を持てたという訳だね。

これは推論ではあるんだけど、両者の間には何か浅からぬ因縁があるのかも知れないね。例えば、アラガミは、過去にラダムと戦った事がある、とかね。

その仮説を裏付ける一因として『ラダムの攻撃はオラクル細胞の結合を切り裂き、アラガミも捕喰したラダム獣の特性を学ばない』という独自の特徴があるからなんだ。

おっと、この先は話が長くなりそうだ。今日の講義はここまでとしよう。

## 第9話 『上条教会』

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』フエンリル極東ブラックスポット支部『アナグラ』内部

「前から思ってたんだけど」

肩口までで揃えられた黒髪で男モノの黒縁眼鏡をかけた少女、有栖レナは自室前に設置された自販機の前で一人、呟いていた。

彼女の目の前の自販機には先日誤って飲んでしまった忌むべきアルコール飲料の他にも色とりどりの商品が並んでいる。

「……どう考えても人類の飲物じゃないよね、これ」

少し喉が渴いたという理由でこの場所へとやってきたレナだったが、どうも彼女の考える『喉が渴いた時に飲む飲み物』が一切表示されていない事に困惑していた。

「苺おでん、冷たくいおしるこ、黒豆サイダー、きなこ練乳、ヤシの実サイダー、ガラナ青汁、スープカレー、冷やしカレードリンク、カツサンドリンク……」

端から順番に読み上げていくも、次第に怪訝な表情を見せていく。

最も、この荒廃した世界で生まれ育ったレナにとって、名前の由来となったモノのオリジナルは見た事ないものばかりだが、少なくとも本家を冒読するかの如きデザインと味なのは理解出来た。

というか、まだ豊かだった時代の人達が今の自分たちより味覚が狂っていたとは思いたくなかったのかもしれない。ファミレスやカラオケのフリードリンクコーナーで片っ端から順番に入れて混ぜるオリジナルブレンドゲテモンドリンクに通じる狂気を感ずるのだが、しかし残念な事にレナやこの世界の人間にとってこの例えが通じる人間は少ない。一番理解してそうなのが異世界人のギャラクシーエンジェル隊というのがまた変な話だ。

結局、一番マトモに見えたヤシの実サイダーを購入。本物のヤシの実とどこまで味が一緒かも定かではない炭酸飲料水で喉を潤していく。

「ぷっは。まあ、味は悪くはないんだよね……間違いないクイツよりは」

誰に聞かせるでもなく一人ブツブツ呟くレナの目線の先にあったのは、自販機のカオスなラインナップな中でもひとときわ目立った飲み物だった。

「スーパージェル状デロドロドリンク……」

そう書かれた飲料（？）の外見には黄緑を基調としたドロドロの液体の絵が描かれており、蛍光灯の明かりが反射して艶やかに光る特殊なコーティングが施されていた。も

う缶のデザインからヤバさが滲み出ている。

「……どう考えても人類の飲物じゃないよね、これ」

「そんな二回も言わなくて良いんと思うんだ」

「だってどう見てもどうええええ!?!」

誰も居ないと思っていた所で話しかけられて飛び上がるレナ。

手に持っていたヤシの実サイダーの缶は空だったが、代わりに他の所から込み上げそうになったのを必死に抑え込む。

「さ、榊博士……?」

「ふむ、驚かせるつもりはなかったんだけどね? 余りにも気が付いてくれなかったから、つい」

丸眼鏡をかけた男性、ペイラー榊はどこか悲しそうな表情でレナに話しかける。彼が悲しむ理由は単に存在が認知されなかったから、あるいは他に原因があるのか。

「申し訳ありません……」

ペイラーの心ないざ知らず、ヘコヘコと頭を下げるレナ。

ペイラーはここ、極東支部の技術主任だが、同時にゴツドイーター達への講座の際は教鞭を振るう事がるので、どちらかと言うと『先生』という印象の方が彼女には強かった。

「しかし、最近入れた冷やしカレードリンクは売れ行きがよろしくないみたいだね。昔作った他のドリンクが親しまれているのは嬉しいけど、やはり全く違うアプローチの作品を作らざるを得ないか……」

「あ、あの、榊博士！ こんな所に態々何の用事ですか!？」

『昔作った他のドリンク』とかいう聞き捨てならないワードが聞こえた様な気がしたが、更に後に続いた『全く違うアプローチの作品』に本能で危険を感じたレナは、無理やりにも話の軌道を逸らす。きつと時間稼ぎ程度にはなってくれる筈だ。

「ああ、そうだった。すまないレナ君。急ぎの任務が入ったんだ。是非とも、君の手を借りたい」

「急ぎの任務、ですか?」

「と、言つてもただ人を呼んできて欲しいだけなんだけどね。とりあえず、私の部屋まで一緒に来てくれるかい?」

「わかりました」

空き缶を丁寧に潰してゴミ箱へと投擲すると、予めペイラーが呼んでいたフロア移動用のエレベーターへと二人して乗り込むのだった。

エレベーターに揺られて数分としない内に到着したペイラーの研究室兼自室には、先

日華夏の村騒動で一緒に行動した長身サンングラスの謎神父ブレイドと、スパーズナイツメンバーとして極東に転属してきた本名不明の青年Dボウイ。

そして『自称』異世界人のギャラクシーエンジェル隊、それに所属する一人の少女だった。

ライトグリーン<sup>アッシュ</sup>の髪を縦ロールにして金属製ヘッドギアを付けた彼女の名前は確か、ヴァニラ・H<sup>アッシュ</sup>だったか。

無表情で棒立ちのヴァニラに対し、チンピラ座りで彼女の真横を陣取るブレイドと、その更に横で困り果てるDボウイの様子は先程の自販機の内容とどっこいどっこいレベルで異様な光景だった。

「ヴァニラたんヴァニラたんゲへへへへへ」

『ちよつとなんちやつて神父さん！ 僕のヴァニラさんにそんな汚らしい手で触れようとししないで下さい！』

「玩具風情が失礼だな！ 神に仕える身であるこの俺がそんな邪な気持ちで女の子と触れ合いたいと思っていると言うのか!？」

『じゃあその手をワキワキさせるの今すぐやめるんですね!』

「……すまない榊博士。俺にはこれを止める術がない」

ヴァニラが手に持っていたピンク色の謎のぬいぐるみ、ノーマッドとブレイドが一人



の少女の為に醜く言い争うのを、横に居たDボウイは成す統べなく放置していた。

「うん、少し異様だけど、ちゃんとコミュニケーションが成立している所は僥倖と言えるだろうね」

ペイラーがこの状況をどう『僥倖』と認識出来るのか甚だ謎だったが、Dボウイと同じように困惑していたレナは黙って流れについて行けない常識人アピールをする。

「さて、集まってくれた所で状況を説明させて欲しい。今、この極東支部では二人のテツカマンが居るんだ。ここに呼んだDボウイ君と、彼の妹のミュキ君だね。酷い熱を出していたミュキ君を療養させるために隔離病棟で安静にしてもらっているんだけど、ここに来て少々厄介な問題が発生したんだ。実は、そのミュキ君の容態が芳しくないんだ」

「なんだって!？」

Dボウイが驚愕する中、困り顔のままにペイラーは続ける。

「まだ時間はあるから心配しないでくれたまえ。……検査の結果、いくつかの臓器が酷く損傷している事が発覚したんだ。更に運が悪い事に、テツカマンとして身体をフォーマットされた際の弊害なのか、通常の臓器移植を受け付けてくれないんだ」

「俺の臓器を移植することは出来ないのか博士!？」

「ほぼゼロ距離までペイラーに詰め寄るDボウイだが、彼は両手で押し返ししながら、その手も考えたけど、君は対ラダムとの切り札だ。一応、ブルーアース号や紋章機への

フェルミオン砲換装作業は順調だけど、いつラダムのテツカマンが襲ってきてもおかしくない今、君の身体から臓器移植する方法は取る事が出来ない」

「くそ……！」

「そこで、だ。少しインチキくさい方法だけど『ニードレス』に頼る事にしたんだ」

「ニードレス、ですか？」

「ここからはブレイド君に説明してもらおうかな」

「面倒だが、まあ、良いだろう」

キョトンとするレナに対し、今度はブレイドが説明を始めた。

先程まで言い争っていたぬいぐるみから視線を外し、レナ達の方へと向き直る。

「俺の連れにイヴって女が居るんだが、そいつの持つフラグメント『ドツペルゲンガー』を使って、そのDボウイって奴の健全な臓器をまるまるコピーして移植しようって訳らしい」

「その、『ドツペルゲンガー』と言うのは？」

「細かい原理は知らねえが、質量が大きく変わらなければ、どんなものにも姿を変える事が出来るフラグメントだ。その応用で自分や他人の傷を癒す事が出来る」

「無論、細かい問題は残るけど、現状を打開できる大きな一手である事は変わりない訳だ。そこでレナ君。君はヴァニラ君の紋章機に彼らと同乗し、イヴ君を無事にここまで

招いてほしいんだ」

「それは構いませんけど、なんで私なんですか？」

「ふむ。イヴ君を呼ぶだけならブレイド君だけで充分だけど、車を使用しても時間がかかる。ミュキ君の兄として協力してくれたDボウイ君と、換装作業を一番最初に終えたヴァニラ君の紋章機も必要だが、何分初対面だ。問題があれば困るだろう？」

「だからこそ、とペイラーは悪魔の様な一言を付け加えた。

「他の神機使いもほとんど任務に出ている事だしね。極東支部のゴッドイーターを代表して、是非とも君には円滑なコミュニケーションの為に潤滑油になってくれればと」

「……」

ただ単に貧乏くじを引かされただけだった。

【2】

—『第97管理外世界地球』極東ブラックスポット旧学園都市第十二学区『上条教会』

「……」

ギヤラクシーエンジェル隊一、無口で何を考えているか分からない少女、ヴァニラはこの任務への同行に並々ならぬ情欲を見せていた。

常に一緒に行動するノーマッドにすら「こんな情熱的なヴァニラさんは見た事がありません！」と言わしめる程、彼女は昂っていたという。

外見はその真逆に位置するほど無を体現しているが、別に感情がないとかではないらしい。

そんな彼女は現在、アナグラを出て北に数十キロほど離れた荒野に佇む一件の廃教会の前に訪れていた。

### 上条教会。

第三次大戦後に『上条』なる人物がここに移住を開始し、律儀に名札を掲げていたら勘違いされて今の『上条教会』という名が付いたそうだ。

「最も、俺やイヴなんかは、知り合いの伝手で後から転がり込んできた居候なんだがな」説明しながら、ブレイドは教会正面の扉を開く。

定期的に清掃されているであろう木製の大扉を開くとそこには、閑散としつつも、どこか神秘的な雰囲気包まれた空間が広がっていた。

教会の顔とも言うべき礼拝堂だ。

所々割れたステンドグラスから差し込む陽の光の下には女神像が立てられている。像の目の前には丸テーブルが設置されており、上には木箱が置いてあった。横幅4、50センチの長方形の木箱はまるで小さな棺桶を模しているようだ。

その木箱の正面、純白の布に金の刺繍が施された修道服を纏った人物が祈りを捧げていた。ここは教会だ。ブレイドが神父だとするならば、シスターがいてもなんら不思議ではない。

扉を開く音に反応したシスターが振り向くと、少女の顔がそこにはあった。長いストレートの銀髪に、エメラルドの様な緑色の瞳。『美女』と言うよりかは『美少女』という方が表現的には正しいだろう。

しかし、ブレイド以外の一同行はそこではなく、修道服の数か所に留められた安全ピンの方に目を向けてしまう。最初こそ違和感を覚えるも、あまりにも自然に馴染み過ぎていたので、独特の意匠が込められているのかもしれないと思うレナ達。

「あれ、今日は随分帰ってくるの早いねブレイド。もしかしてサボり？」

「ちげーよ。イヴはいるか？」

「さつき出かけたよ。お昼には戻るって言ってたし、もうすぐ帰ってくると思うかも」「そうか」

「……で、後ろの人達は誰かな？ とーまじやあるまいし、その辺歩いてたら女の子拾った訳じゃないよね？」

「仕事仲間だよ。ああ、紹介する。コイツはインデックス。俺らと同じ居候だ」

「む、その言葉には語弊があるかも。ここは私ととーまが最初に根城……もとい、移住した訳で正確には『先住の居候』の方が正しいよ」

居候である事は否定しないのか、と一同が思っている中、ヴァニラだけが小走りに女神像の下へと近づいていく。

そして、先程インデックスと呼ばれた少女と同じように、像の下に屈み、両手を合わせて祈り始めてしまった。

「神よ。罪深き我らをどうぞお赦し下さい……」

「おっ……おとおおおとおおおおおおお!! 凄い! 凄いよブレイド! すんごい久しぶりに祈ってる人見たよ!!」

おおよそシスターが言っているような台詞ではない気がするが、聖職者として祈りを捧げる人間が他に居るのがうれしかったのか、隣に座って同じように祈りを捧げ始めるインデックス。

「今日この日共に祈る仲間が出来た事を感謝します」

「私も嬉しいかも……」

涙声で女神像を見上げるインデックス。すると丁度、棺桶の様な木箱の蓋がゆつくりと開けられ、中から全長15センチ程の人形が登場した。

「ふああああ……」

「なんか出てきた?」

ウエーブかかった長い金髪に片目を眼帯で覆った色白の肌に、黒い三角帽を被った人形は欠伸をしながら、ゆつくりと箱から這い出して来る。

「そんなに祈ってくれるなら仕方ない。どれ、一つ『魔神』の力の一端を見せてや  
「ツツツツツツツツ!!」

ガタン! と勢い良くインデックスによって人形は木箱に戻され、その扉を幾重ものカギと鎖で嚴重に封印し始める。

「何をする禁書目録! 謙信深い信徒の前に神が現れて祝福するのはなんら変ではない  
だろう! 本音を言う暇だ相手をしろ!!」

「あー、知らない見えない何も聞こえないかも」

「じゃあ聞こえる様に何か言っちゃろうか! 原作とあまり見た目が変わってない癖に、作品の設定のせいで年齢が20前後引き上げられたのに容姿がほとんど変貌していない哀れな年増シスターの話をわばばばばばばば! 揺らすな! 狭くて暗い所で揺らすなあああああッ!!」

「なんだ教会なのに違和感しかないなこの景色……まあ良いか。奥の部屋で待つておこ  
うぜ」

謎の人形について一切触れないブレイドに案内され、レナとDボウイは教会の奥の扉  
から中へと案内されていく。

余談だがペガスとノーマッドは紋章機ハーベスターの横で警備を兼ねて待機してい  
た。AI同士気が合った(?)らしく、あまりにも仲が良さそうだったのであのヴァニ  
ラが明確に戸惑いの表情を見せたほどだ。

最も、ノーマッド以外には一瞬動きが止まった程度の認識しか出来なかった訳だが。



## 第10話『強襲!照山最次』

〔1〕

所変わって、上条教会内部居住地。

教会の内部と言うよりは、教会のすぐ横に住居を増設したような形の一軒家、が正しいが、こんな荒廃した世界では建築基準法も何もあつたものではない話なので割愛する。

「ほお、それでイヴを連れて来ようとして入れ違いになつた訳か。大変じゃのう」

教会の居候の内の人、木製の椅子に深々と座つていた白衣の老人、ギドは、寂しくなつて久しい自分の頭頂部を撫でながらブレイド達から事情の説明を受けていた。

「爺さん、テツカマンと聞いてもあまり驚かないんだな」

Dボウイにそう言われるも、ギドは冷静に両手を組みながら向き直る。年長者としての余裕が垣間見える動作だ。

「ブラックスポットに長く住んでいれば、大抵の事では驚かなくなるもんじゃよ」

「おい博士。そいつがテツカマンだぞ」

「何じゃとおおおおおおおおお!?」

ブレイドの指摘に、ギドはおっかなびつくり椅子から転げ落ちた。  
「思いつきり驚いてる……」

年長者の余裕が一瞬で瓦解する中、レナに冷静にツッコミをいれられるギド。

「じよ、冗談はさて置き……」

「その震える足止めてから言えよジジイ」

「ゴ、ゴホン！　しかし、極東支部にテツカマンが加わるかもしれないという事は、またシメオンとのいざこざが増すかも知れない、という訳か」

「ギド博士は、『ニードレス狩り』の事をご存じで？」

レナの問いかけに、ギドは頷く。

「フェンリル庇護下のアナグラの中じゃとあまり聞かないかもしれないが、相当の被害が出ているという噂じゃ。日本……今では極東と呼ばれるようになったこの国には東西二つのブラックスポットがあるが、それに対してフェンリルは極東支部一つでこの国と周辺を担当している。流石にフェンリルとて、世界を二分したシメオンの本格的な活動を支部一つの力で抑えるのは不可能じゃからの」

「私、何も知りませんでした……」

「最も、ワシも西側のブラックスポットがシメオンによつて掌握されたという話を聞くまでは与太話と思っておったがな。東側は極東支部が近い手前、おいそれと本格的な侵

攻が出来ないというのが実情じやろう」

「だが、それも時間の問題かもしれないな」

窓から外の景色を見ていたDボウイが呟く。

彼の視線の先には、荒野の真ん中にそびえる建築途中のビルが存在していた。

第三次大戦とアラガミ、ラダムの影響でほとんどの都市が壊滅し、新たにビルを建てようにも建築途中に襲われるのがオチだ。

そんな中、件のビルは何一つ損害を受ける事無く粛々と天を目指して伸びていた。

「シメオンの極東支社、と言った所か」

「こんなご時世にブラックスポットのど真ん中にビルを建ててるなんて、やっぱ金持ちボンボンの考えは分かんねえな」

ブレイドが懐から煙草を取り出し、一本口に咥えようとした、その時だ。

礼拝堂へと続く道への扉が開き、インデックスが部屋へと入ってきた。その顔は困り顔と怒り顔が混じった様な、端的にいうと機嫌の悪そうな顔をしていたのだ。

「ブレイド、お客さんだよ」

「客だあ？」

「今懺悔室の中に居るよ。『首に変なチョーカー付けた長身のアダムって男を探してる』って言ってたし、間違いなくブレイドの事だと思う」

「ブレイドさんって苗字アダムだったんですね」

「言ってなかったか？」

「なんかすつごい怒るの我慢してたみたいだけど、また何か恨まれる事した？」

「んな訳ねーだろこちとら神父様だぞ神父様ア。つたく、煙草吸いながら行くか」

どの辺に神父要素があるかさっぱり分からないブレイドが煙草を啜える。が、ライターの油を切らしている事に気が付いた彼は悪態を突きながら部屋を後にした。

「さて、と、それじゃあワシらも行くかの」

「こういう機会を逃すのは勿体ないからね！」

ブレイドが部屋を出て間髪入れずにギドとインデックスの二人はそろりそろりと部屋を出ていこうとした。レナとDボウイから逃げるといふよりかは、ブレイドの後をこっそり追いかけてようとしている様子だ。

「あの、ギド博士……？ インデックス、さん……？」

「レナ君たちも着いてくるかね？」

「なんだって久しぶりの懺悔だからね。気にな……ゲフンゲフン。あのブレイドの事だから何しでかすか分からないし、監視役を兼ねて同席するのはシスターとして当然の行

動なんだよ。その折に、懺悔室内部の会話が誤って耳の中に入ったとしても、それはそれとして致し方ない事なんだよ」

「……どうしましょう、Dボウイさん？」

「俺に聞かないでくれ……」

テツカマンとゴッドイーターである以前に常識人である二人には、暴走するジジイとシスターを止める術がなかった。

ペイラーに『潤滑油』扱いを受けたレナだが、そんな物全く必要ともせず暴走列車の如く話は進んでいく……。

【2】

「ん?」

インデックスに言われて礼拝堂へと戻ってきたブレイドはある事に気が付いた。

懺悔室は懺悔する側とされる側、つまり教会の人間が入る個室がそれぞれ存在するが、その両方から人の気配を感じ取ったのだ。

片方は、例の来客だろう。

ならばもう片方には一体誰が入っている?

すこし耳を近づけてみると男女の声が。どうやら二人で秘密の会話を楽しんでいる

らしい。

「よし、盗み聞きするか」

先程インデックスがオブラートに包んだ言葉を情け容赦なく言い放ち、懺悔室の壁へと耳をくつつけるブレイド。そのまま全神経を尖らせるように、会話を聞き取りのみに意識を集中させる。

『シスター様と神父様が不在の間、私がお相手致します』

『何度だって言うぞ。俺はこのアダムって男に用事があるんだ。他の奴は良い。男を出せ！』

『神は寛大です。どのような罪であっても、必ず救いの手を差し伸べてくれるでしょう』  
『このご時世で神様頼みする馬鹿がいるかよ？ 俺達は日々アラガミってカミサマと殴り合ってるんだ。そんな連中を拜んで懺悔する奴の気が知れないぜ』

『神の救いの手は平等。信仰心なき者であっても構いません。ここは私と貴方、そして神のみぞ知る空間。さあ、どうぞ心の奥底に眠る不平不満やら青春時代のちよつとほろ苦い記憶をぶつちやけてください……』

『……まあ、少し、無い事もない』

『お話下さい。全て受け止めましょう』

『なら、懺悔しなきゃならねえ事がある……実は、死んじまった仲間の一人にダイジュウジって男がいたんだが、そいつの大事にしていた本を間違つて燃やしちまつたんだ……』

『他には?』

『そうだな……アカギのトタンで組み上げたロボットをついうっかり押し倒して海の藻屑にした事もあるし、大将の旦那が可愛がついていたハムスターも誤つて燃やして証拠隠滅の為に夜食にした事もあつたな……それに、それにだな……』

「……」

「ほう、中々やりおるもんじやのう」

「私よりシスター出来てる。なんかジエラシー感じちゃうかも」

「しかし、懺悔の内容自体は実につまらないな。もつとヘンテコな事を言い出してくれた方が神としてはからかい甲斐があるのだが」

気が付くと、ブレイドの他にギドとインデックス、そして先程箱に嚴重封印されたは





「何やっとなじやブレイドおおおおおッ!!」

「何の騒ぎだ!? ラダムか!」

「もしくはアラガミ!」

流石に物音に異変を感じ取ったDボウイとレナも礼拝堂へと飛び込んでくる。

だが、ペガスが近くにいないDボウイと神機を置いてきたレナはこの状況で敵とは交戦出来ない。

「くっそ……何しやがる!」

「オラお目当てのアダムが来たやつたぞ文句あんのか!」

懺悔室にいた男は、オレンジ色の短髪で、背中に『夜露死苦』とペイントされた白い特攻服を纏っていた。

吹き飛ばされ、壁にぶつかったダメージをもともせず、男はブレイドの前に立ち塞がる。

「そうか。テメエがアダムか……。ここであつたが百年目、覚悟しやがれツ!! 仲間の仇……討たせて貰うぞっ!」

「仲間の仇だあ?」

「そうだ。そして俺の名前は照山最次てるやまもみじ。それだけ覚えて地獄の仲間に詫び入れてきな、アダムッ!!」

そう言うのと、男……照山の右拳から炎が噴き出し始めた。

何か道具を使った訳でもなく、ごくごく自然に現れたその炎は、照山の腕を焦がす事無く、しかし彼の猛々しい心を表すかの如く拳に纏う鎧と化していた。

「あやつまさか、ニードレスか!？」

「リトルボーイ!」

大型のアラガミさえも一撃で倒してしまうその一撃を、真正面から受け止めるブレイド。

しかし。

「なっ……、コイツ、俺のリトルボーイを受けて……!？」

「貧弱貧弱とはこの事かア!？」

さしてダメージを受けた様子もなく、照山を挑発しだすブレイド。

「効かねえんだつたら……効くまで殴るまでだ!!」

その後も、ブレイドは照山に一方的に殴られていたのだが、ギドとインデックス（+

謎の人形)は静観を決め込み、一切の手出しをしていなかった。

「あの、ブレイドを援護しなくても良いんですか?」

「ブレイドの奴、敢えて手加減しておるようじゃの。インデックス君、どう見る?」

「近くにルーンの気配もなく、かといってこれと言った魔術的装飾を身につけている訳で

もない……間違いないよ。あれは魔術じゃない」

「ならば、ブレイドの狙いは一つじゃな……レナ君、Dボウイ君。手出しは無用じゃ」  
なぜなら、とギドが続けようとした時、状況に変化があった。

「もう一発だ! リトルボーイ!!」

最早何度目か分からぬ、その拳。

だが、その拳がブレイドの身体に到達する前に、彼はニヤリと笑って呟いた。

「……『覚えた』!」

その言葉に呼応するかの如く、ブレイドの拳が炎に包まれる。

「リトルボーイ!」

「のわっ!?!」

自分の技である筈のリトルボーイの直撃を受けた照山は、数回バウンドしながら地面

を転がった。

「デメエ……。噂の『覚える』フラグメントのニードレスかつ?」

叩きつけられた体を起こしながら照山はそう告げた。一瞬困惑した様子を見せつつすぐに思考を巡らせている辺り、見た目よりは頭が良いのかもしれない。

「だが、同じ技でも、オリジナルより強い筈がねえ!」

照山の拳が再び炎に包まれる。対するブレイドも、同じように拳を固めた。

「つくづく馬鹿だなお前! 同じ技を持つ者同士の戦いで勝つのはな……」

「リトルボーイ!」

二人の拳が交わる。

「ぐわあ!」

鮮血に塗れ、先に拳を下げたのは照山の方だった。

一方のブレイドは依然として余裕を見せている。

そして、ブレイドは照山に『同じ技を持つ者同士ぶつかった』と時の勝者の条件を高らかに叫んだ。

「拳の頑丈な方だ!!」

【3】

「くっ! ……野郎、なんて硬え拳なんだ!」

出血で感覚がマヒした腕を無理やり動かしながら、照山はブレイドを見つめる。

「ウおらどうしたあ! 炎のニードレスの兄ちゃんよお!!」

「仮にも神父を名乗ってるんだから、そういう悪役みたいな物言いは遠慮してほしいんだ

よ」

め 白いシスターに呆れられながらも、尚も黒い神父はゆつくりと照山の方へと距離を縮

ていく。

しかし、照山にも引けぬ理由があった。仲間の仇がすぐ目の前にいるのだ。

彼 仮に『覚えられる』可能性があっても、出し惜しみをしている理由も余裕も今の

彼

には存在しなかった。

「勝ち誇るなら、俺の最強技を食らってからにしがれッ!!」

両の手から火の玉を出現させ、合わせる。

巨大な一つの火球となったそれは照山の腕から数センチ程浮き上がったもなお、その火の勢いを殺す様子は無い。

「遠距離技に切り替かえる腹積もりだな。避けられないとも思っているのか?」

「避けられるもなら避けてみる!」

ただし、と照山は続ける。

「テメエが良ければ後ろのジジイ共に当たるぞ!」

「!!」

本来ならアダム以外の人間には手出しするつもりはなかったのだが、前述のとおり彼には余裕がなかった。

だからこそ、目の前の男の良心に漬け込むような外道の策にさえ、彼は遠慮なく手を染める。

「喰らいやがれ! ヴァルカンシヨックイグニション!!」

巨大な火球が飛びかかったその時だ。



ブレイドに抱きかかえられていたインデックスとレナに駆け寄るDボウイ。  
そこには優しかった老人の姿はない。

「気を付けろ！ 『魔神』とて痛いものは痛いのだぞ!!」

「ちよ、ちよつと酔いそうだったかも……」

「なんか前にもこんな事あった様な……」

「この人でなしがーッ！ 避けるなアーツ!!」

「あ、なんだ生きてたのかジジイ」

所々燃えてはいるものの、割と元気そうだったギドに悪態を突くブレイド。

「俺が人助けする人間に見えんのか？ あ？」

本物の外道はここにいた。

その外道は、照山と同じように腕から炎の球を形成する。

「しまった！ 『覚えられた』か!？」



「ヴァルカンシヨックイグニシヨン!!」

「!」

しかし、照山は拍子抜けする。『覚える』フラグメントだからこそ、自分と同程度の物が来ると予想していたのだが、黒い神父が放ったのはサイズこそ拮抗するものの、速度に難があつた。

照山のヴァルカンシヨックイグニシヨンをスポーツカーに喩えるなら、黒い神父のそれは田舎の老人が運転する軽トラだ。

「まだ完全にはコピー出来てないのか…?」

まだ勝てる見込みがある。

そう思った照山の算段は、しかし黒い神父の次の一手で碎かれる事になる。

「マグネティックワールド・<sup>アンチ</sup>反発!」 『ヴァルカンシヨックイグニシヨン!!』

「なにイ!」

照山は失念していたのだ。

『覚える』ニードレスならば、他のフラグメントを『覚えている』可能性を。

しかし、それでも彼はその油断のツケを取り戻す事を諦めてはいなかった。

要は少し速度が上がっただけの自分の技。対抗策が思いつくのも容易だった。

「うおおおおおおリトルボオオオオオオオイ!」

迫りくる火の玉に対し、照山は炎の拳を下から救い上げるような形で叩き付ける。衝撃を炎で相殺し、軌道を逸らしたのだ。

「ハッ！ そんな小手先の技で俺を騙せると……！」

「ジャイルグラビテンション!!」

勝ち誇ろうとした照山の身体が重くなる。

比喩表現ではない。本当に重くなったのだ。

「なッ、か、身体が……!?!」

地面をよく見ると、自分の周囲の床もメキメキと音を当てて沈んでいるのが見て取れた。

「重力を操るフラグメントだ」

そして、と黒い神父は照山が現状を正しく把握するよりも前に、告げる。

「重力が強くなった場合、お前の頭上にいる『アレ』はどうなるだろうな？」

「しまっ」

瞬間。

マグネティックワールドによって速度を上げられ、グラビトンで無理矢理降下させたヴァルカンショットクイグニションが、照山の身体に直撃した――

【4】

「てめえ、能力を、合わせて……ッ!」

爆発から一命を取り留めた照山だったが、追い打ちをかける様に腹部にブレイドの拳が突き刺さる。

「ぐおお!」

「これはテメエに焼き殺された……ギドジジイの分だッ!」

「死んでません」

横から真顔で訂正をいれるギドだが、当のブレイド本人は気にせず話を進める。

「殺す前に聞いてやる。『仲間の仇』ってのは、何の話だ?」

ブレイドからすれば当然の話だ。

彼がいかに邪知暴虐で理不尽な性格をしているとはいえ、一応は分別を弁えるタイプの人間だ。

そりやまあ、こんな所で生きていれば近所さんとの諍いなんて紛争地帯みたいなレベルに発展する事は稀によくあるし、実際にお手々が真っ白だとは彼も思っていない。

だが、そこで妙に感じたのだ。ただのゴロツキの仇討としては、この男から放たれる気迫が並々ならぬものであると言うことに。

「とぼけんな！ 『ニードレス狩り』で罪もねえゴロツキ共を散々殺したじゃねえか！  
フェンリルと世界を二分するなんて言いながら、影で人殺しを良しとする糞企業がよ  
!!」

「あ？ 何言ってるんだテメエ」

「だから、とぼけんなよ……？」

予想に反した反応をしたのか、凄んでいた照山の態度が変わってくる。

「ちよ、ちよつと待て！ 前半はほぼ100%合っていたが、後半は違うぞ!!」

何か事情を察したのか、ギドがフォローを入れてくる。

「……な、なに言ってるんだよ……？」

だんだんと、照山の額から毛色の違う汗がダラダラと流れ始める。

「お前……アダム・アークライトだろ？」

「は？ 誰それ」

即答だった。

「え？」

「……………」

沈黙が、場を支配する。

「……………人違い？」

確認するように、照山はオーデイエンスを決め込んでいたレナやインデクス達に視線を向ける。

「……………」

「……………」

皆、何と言って良いかわからない、という顔をしていた。

なんたつて、ブレイドがゴロツキを見境なくボコボコにしているのは事実なのだ。その半分当たった事実に対してか、皆一様に口が堅くなっていた。

「ぶわっはっはっは！ まさか、根城まで突き止めて置いて肝心の名前を間違えるアホが居るとはな!!」





## 第11話 『ツンツン頭の男』

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』フエンリル極東ブラックスポーツ支部『アナグラ』—

アナグラ内部に存在する医務室。そこでは現在、テツカマンレイピア事、相羽ミュキの治療が行われていた。

患者のミュキと、臓器転写の為に同席したDボウイ、『ドツペルゲンガー』のフラグメントを持つイヴ・ノイシユバンシユタインの他に、アリサの主治医であるオオグルマ、ペイラーも加わつての治療行為は、開始から既に二時間程経過していた。

「……」

「……」

医務室前に備えられた椅子に座って待機していたレナとヴァニアはただ一言も発する事無く、手術が無事終わるのを祈っていた。

初めはなんとか会話して繋ごうかと思つたレナだが、あまりにも何を話したらいいのかわからず、現在に至るといふ訳だ。



そんな沈黙を破ったのは、廊下の向こうから近づいてくる一つの足音だった。

「やれやれ、まるでお通夜ムードじゃないか。まだ、誰も死んじやいないんだろう？」  
レナ達の前に現れたのは、白衣を着た老年の男性だった。

心なしか、顔が少しカエルに似ている気がする。

「あなたは……？」

「僕かい？ 僕は、ただの医者さ。今し方、榊博士に呼ばれちゃってね」

「お医者さんですか？ でも……」

「ああ、君。心配しなくても良いよ」

思った疑問を素直に口にしようとしたレナの言葉を、カエル顔の医者は制止した。

そしてこの数時間開かずの間だった医務室の扉を開けながら、ボソリと呟く。

「死んでさえなければ、僕に治せない病気はないよ」

「は、はあ……」

自信ありげに医務室へと入っていくカエル顔の男を見送った後、ほぼ入れ替わりで部屋から出てくる人影があった。

イヴだ。額から玉の様な汗を掻きながら現れた彼女の顔は完全にやつれている。おそらく、殆ど休憩なしで治療に専念していたんだろう。

「イヴさん！ Dボウイさんとミユキさんの容態は……!?!」

「あー、騒ぐなって。向こうはまだ修羅場なんだからさ。で、名前、有田だっけ？」

「有栖です！」

どうやら、このイヴという少女は他人の名前を覚えるのが極端に苦手らしい。

知古であるブレイドとギド以外の名前はことごとく間違つて呼ぶのが彼女にとって普通らしい。

「そんな事どうでも良いんだけどさ、この辺で『スーパーゲル状デロドロドリンク』売ってる場所ってどこかにないか？」

「それって……」

どこかで聞いた。否、見た気がする。

頑張つて思考を巡らせる。

「そう言えば、部屋の前の自販機で売っていた様な……」

「流石はフカヒレの基地だな！ なんでも揃ってる！」

「フェンリルって言いたかつたんですか？」

最早レナの訂正にも触れず、イヴは彼女に握り拳を差し出し、その手の中にあつた物を無理矢理渡した。

フェンリルが製造した、貨幣代わりの硬貨が数枚。

笑顔で接してきた彼女の表情が、変わった。

「とつとと走って買ってこいゴルアアアアアア!!」

「ひゃあああああああああああああああああああああ!?!」

なんでキレられたのかわからず、涙目のままレナは件の自販機の元へと走り出す。

〔2〕

「……おい、どうなってるんだ。ここの自販機」

アナグラ内部の通路に設置された自販機の前で、ツンツン頭の青年は絶句していた。

「なんで……なんで! 天下のフェンリル様の元で見た久しぶりの自動販売機の中に、

これまた見知った学園都市の摩訶不思議飲料水が我が物顔で居座ってるんですかね!?

しかも、なんか見た事ない奴増えてるし!!」

普通のお茶とか水が欲しかったのにーッ! と喚く青年だったが、このまま立っていても仕方がないと思っただのか、渋々コイン投入口に硬貨を入れて、『ヤシの実サイダー』のボタンを押す。

ガコンツ！

『スーパーゲル状デロドロドリンク』が現れた!!

「待つておかしい」

緑色のブヨブヨした物体が描かれた缶ジュース(?)を見つめながら、青年は呟く。  
「あのインデックスですら飲むのを拒否する劇物だぞ……う。俺に、飲めるのか……？」

ここで何かしら足掻いても、それ以上の『不幸』を予感した青年は、意を決して封を開けようとする。

その時だ。

エレベーターから降りて全力で走っていた少女が青年の前で体勢を崩し、そのまま青年にタツクルする形で衝突した。

「きゃっー！」

「ぶっー！」

少女が上に乗った状態で地面に叩き付けられた青年。

肩口までで揃えられた黒髪に、男物の黒縁眼鏡をかけた少女は目を回しながらうなされていた。とっさに『右手』を差し出そうとした青年は、少女の右腕に付いた赤い腕輪

を確認するや否や、その『右手』を引つ込めた。

しかし、その時『右手』に意識を集中しすぎたせいで、左手が無意識に少女を押し退けようと彼女の胸の方へと伸びていたのだ。

「あわ、あわわわわ……ご、ごめんなさい！」

神機使いの少女は慌てたように身を上げた。

「……不幸だ」

「ひつ、貧相だとは思ってますけど不幸とは酷いじゃないですか！」

顔を真っ赤にしながら少女は胸元を両手でガードしながら青年から距離を取った。

「……こんな状況で言うのもなんだけど、急ぎの用事とかあたんじやないの？」

「あつ！ そうだ！ スーパーゲル状うんたらかんたら！」

その単語にギョツと表情を変える青年など視界にも入れず、少女は自販機へと走る。

「えつと、スーパーゲル状……えつ」

「どうしたんだ？」

倒れた体を起こしながら、青年は少女に声をかける。

「ない……売り切れている……ッ！」

自販機で展開されているドリンクの中で一際異彩を放っていたスーパーゲル状デロドロンドリンクの下には「売切」という無慈悲な単語が光っており、少女は思わず膝か

ら崩れ落ちてしまう。

「そんな……だとしたら、イヴさんは、ミュキちゃんは……」

「ん？ なあアンタ。今イヴって……」

青年が『とある少女』の名に反応した、その時だ。

丁度、少女と、青年が手に持っていたドリンクの目線が合う。

「あつた!!」

先程セクハラ紛いのことをされた事も忘れて、少女は青年の眼前にまで急接近した。

数多の女性とラッキースケベを起こしたという青年だが未だ心は純粹少年なのか、思わず顔を背ける。

「これ、譲って下さい！ 人の命がかかってるんです!!」

「……これが？」

思わず缶のパッケージに目を向ける青年。人を助けるようなデザインはしていない。

「お釣り、いらないんで！」

困惑する青年などお構いなしにドリンクをひったくり、代わりに持っていた硬貨を渡す少女。

青年が心の底から欲しいと思っていたらどうしていたのだろうか。

「おい、ちよつ」

青年は声をかけて追いかけようとするが、少女はエレベーターに飛び込む様に消えていき、青年は一人置き去りにされてしまう。

硬貨には、少女の汗が若干にじんでおり、ほんのちよつぴり男の、健全な青少年の色々が燻られる。そんな年ではないんだが。

「いや、よく見ると足りねえじゃねえか!!」

青年の叫びが廊下にこだまする。

ああ、今日も良い感じに不幸だな、と心の涙を堪えながら渋々不足分を自分の財布から取り出すのだった。

今度は『黒豆サイダー』のボタンを押す。

ガコンツッ!

『スーパーゲル状デロドロドリンク』が現れた!!

「だから何でだよツツツツツツツツツ!!」

〔3〕

「イヴさん！ 買ってきましたよハイパーナントカ！」

「遅いぞ有田ア！ 一週間くらい待った！」

「流石にそれは言い過ぎだと思ふな!!」

息を切らしながら戻ってきたレナの腕からスーパーゲル状デロドロンドリンクをひったくったイヴは何の躊躇もなくゲテモノデザインの缶の蓋を開き、おおよそ飲料水では聞けないであろう音を立てながら一気飲みをする。

文字に起こすと『ゴキユツ!』とか『ゴポオ:』とかである。

「ふいー…生き返った」

「…え？」

てつきり医療行為に必要だと思つたレナは呆気に取られてしまう。

「あの、イヴ…:さん? それって医療行為に必要だったり、必要なかつたりするものなのじゃ…:…?」



「は？」

レナの言葉に、イヴは固まる。

「そんな訳ないじゃん。疲れたから栄養補給したかっただけ」

「……」

本当にただのパシリだった。

「じゃ、僕帰るから。ヴァジュラ、送迎よろしく！」

「……（コクツ）」

名前を間違えられても特に問題なく意思疎通していたヴァニラに連れられ、イヴは格納庫の方へと去っていく。

それと入れ違いで部屋の前へとやってくる二人の女性がいた。スペースナイツの如月アキと蘭花・フランボワーズだ。

「レナ。Dボウイの様態はどう？」

「さ、さあ？ 私もここで待っていただけで内情には詳しくないので……」

「つつかえないわねー！ ゴッドイーターって身体能力強化されてるんでしょ？ 違う、パパッと壁越しに見えたりしない訳!？」

「流石にそこまで便利じゃないよゴッドイーター……」

通常兵器の全く通じないアラガミに対抗するため、人体にアラガミと同じ『オラクル

細胞』を移植したゴッドイーターは、いわば『半分アラガミ』といって差し支えない。適合すれば、という条件こそつくが、その身体能力は常人を遥かに上回る。アラガミのみならずラダム、ラダムテツカマンに対する切り札として有能な彼女ら彼女らではあるが、特段変った能力は持ち合わせていない。

その手の領分は『学園都市』の超能力者や『ニードレス』、『魔術師』の分野だ。

連中普通にアラガミやゴッドイーターに追従してそれ以上に暴れ回るので若干チート臭い所があるのでは？ と超パワーを手に入れてもちつとも優越感に浸れなかった少女レナ。

「それはさておき、二人はいつもDボウイさんと一緒に行動されてますよね。仲、良いんですか？」

「誰がこんなヤツと!」

二人の言葉がハモる。

「私はほら、同じスペーススナイツの仲間として変なストレスを抱え込まないように常に行動を共にしているだけで……ッ!」

「はっはーんそういう事言っちゃう? 私はもうDボウイ様にゾッコンラブ♡なので例え火の中水の中因果地平の彼方でも付いて行くって決めたんだから!!」

「戦闘中邪魔になるでしょ!」

「これまでの戦闘で私邪魔になったかしらーん？　むしろテツカマンブレイブと私のカ  
ンフーフアイターの相性は色合い的にも戦力的にも最高だと思っただけですけど」  
医療の現場、その手前という事を忘れてやんややんやと口喧嘩を始める二人。

色気より食い気で生きてきた万年貧乏少女レナには野菜に似た名前の宇宙人同士の  
超スピード戦闘を眺める地球人の如く困惑するしかなかったのだが、このまま騒がれ続  
けると医療行為に支障が出るのでは？　という至極真つ当な結論に居たり、会話にメス  
を入れるべく頑張つて一歩踏み出した。

「あの、つまりアキさんも、Dボウイさんの事好きなんですか？」

「えっ、いやそのツ、そういう感情とはまた違うというか何と言うか……」

なんか物凄い勢いで委縮していくアキ。

「普段は男勝りだけど心は乙女ってヤツ？　でも現実には過酷なのよ。そうやってしどろ  
もどろしている間に私みたいな積極的な女にイイ男を取られていくという事実を知っ  
ておくべきだと思うわ！」

「わっ、私は！」

レナの言葉に巧みに便乗した蘭花によってどんどん追いつめられるアキだが、顔を  
真つ赤に染め上げながら必死に反撃の言葉を搜している様だ。

だからだろうか、普段彼女が言わなそうな積極的な台詞が飛び出してきたのは。

「私は、Dボウイの30分を貰ってるんだから！」

「……は？」

「??」

意味が分からず、困惑するレナと蘭花。

ギャラクシーエンジェル隊と出会う前に自暴自棄に陥ったDボウイを慰める為のいわば口説き文句だったのだが、無論その意味を正しく把握しているのは当の本人達だけだ。

しかし、意味を知る本人にとっては投擲の失敗したブーメランの如く自分にだけ刺さったのか、若干涙目になりながらその場から走り去ってしまう。

「意味わかんない……」

わかんないけど、と蘭花はそのまま続ける。

「今、すごく敗北を感じたわ……」

「私にはまったく理解できません……」

結局、Dボウイと相羽ミユキの手術が終わるまで二人はただ茫然と一人の少女が走り

去った廊下を見続けるしかなかった。

【4】

—『第97管理外世界地球』フェンリル極東ブラックスポット『照山一行の隠れ家』—

「いっつ……あの青髪の女、容赦なく人をぶつとばしやがって……」  
夜。

街灯一つないブラックスポットの真ん中は正しく暗黒そのものだ。

元々『夜景にぼっかり空いた黒い穴』がブラックスポットの語源であるから当然と言えど当然だが、アラガミやラダムの襲来によつて今は地球上ほとんどがこの状態と言つても差し支えない。

隠れ家として使っている洞窟の中ではかない焚火に照らされながら、照山最次は苦虫を噛み潰したような表情を見せていた。

「人違いをしたとはいえ、問答無用で攻撃してくるといふのは、向こうにも問題がありませんね……」

照山の話の聞きながら彼に傷の手当—本格的な医療道具がないので、近場の街で仕入

れた簡素な包帯や消毒液で適当にその場しのぎだけだが―をしていた赤髪の少女、アミタの手がふと、止まる。

「今度は私も行きましようか？」

「お姉ちゃんだけずるーい！ 未央も遊びにいきたいー!!」

二人の後ろで暇そうにぬいぐるみで遊んでいた未央も会話に参加する。

かれこれ数日、三人は行動を共にしていたが、アミタが妹のキリエを完全に見失い、未央もまた友人とはぐれたままとなっていた。

流れ者の照山ではフェンリル庇護下のアナグラには入れないし、シメオンに至っては仲間の仇だ。殴りこむならともかく人探しとして頼るなどもつての外だった。

「未央、遊びに行くわけじゃないんですよ」

「えーっ！ でも悪い人じゃないんですよ？」

「いや、話を聞く限り明らかに悪党の類だと私は思ったんですけど……」

「でも未央、聞いたことあるよ！ 『きょーかいは困ってる人を助けてくれる場所』だって！ 仲直りすればきつと野宿生活ともおさらば出来るかも！」

「それは、一理ありますね……」

「確かに、あのブレイドって男以外はマトモっぽかったしな。それもアリかもしれねえ」  
だがな、と照山は続ける。

「奴が仲間の『仇』じえねえのはわかった。だが、このまま負けっぱなしなのは癪だ。傷が治り次第また挑みに行く。恥ずかしい話だが、今の俺じゃシメオンに一人乗り込むには力不足だしな……」

「好敵手見つけたり、つて感じですね」

「そんな感じだ」

「それじゃあ余計に私達だけ教会にご厄介にはなれませんか、未央！」

「うん！ おじさんが頑張つて強くなるの、未央応援するお☆」

「だからおじさんじゃねえ!!」

絶望に満ちた世界、そのど真ん中で偶然居合わせた三人の笑い声が夜の帳に消えていく。

夜空に煌めく星空が、今日は一段と綺麗に見えた。

# 解説回：なるほどGA講座★★★

【なるほどGA講座★★★】

こんにちは！ ミルフィーユ・桜葉です！

今日は『テツカマン』について、もうちよつと内容を掘り下げてお話していこうと思います！

『ラダム獣』は正真正銘、生まれも育ちの遠い宇宙の向こうなのは間違いないのですが、Dボウイさんこと相羽タカヤさんはれっきとした地球人である、という所までお話ししましたね！

これは一体どういうことなのでしょう？

その秘密は、探索宇宙船『アルゴス号』の事故にあります。アルゴス号はタイタンという衛星を観測するために開発された宇宙船で、Dボウイさんとそのご家族は宇宙船の乗組員だったそうです。

Dボウイさん、私達ギヤラクシーエンジェル隊と同じでエリートだったんですね！

通りで蘭花さんともすぐ仲良くなれた筈です！ あ、アキさんともすぐに打ち解けて



ましたね！ 流石蘭花さんです！

……え？ なんですか蘭花さん？ 『別にアイツとは仲良くない？』

またまたー！

コホン。

しかし、そんなアルゴス号は木星に向かう途中で事故に巻き込まれ、地球との連絡が途絶えた、と、いう事になっているそうです。

ここでラダムとファーストコンタクトを果たしてしまっただけですね。この辺りは私も詳しく聞いていないのですが、なんでもラダムはアルゴス号の人間を襲って改造し、テツカマンにしてしまった様なのです！

タカヤさんもラダムに捕まり、テツカマンとして改造されてしまったそうなのですが、ラダムの尖兵としての洗脳が完了する前に、タカヤさんのお父さん、相羽孝三さん

の手によって地球へと脱出する事に成功したという訳です！

しかし、テツカマンへの改造手術って、どのような感じだったのでしょうか？

やはり王道の丸テーブルの手術台に拘束されて、『きみはー、改造手術をー、受けてしまったのだー』って悪い人に親切丁寧に説明されて……

あ、ちがうんですか？ 古いんですか？

えーっ！ トランスヴァールでは流行ってるんですけど、やっぱり異世界だと色々事情が違うんですね！

じゃあ、どうやったんですか？

……え？ なんですかフォルテさん？ 『本番中にカメラ外のスタッフに話しかけるんじゃないよお！』

またまたー！

えーつと……肉壁？ 肉壺???



## 第12話『なんでもないゴツドイーターの一日（前編）』

〔1〕

— 『第97管理外世界地球』フェンリル極東ブラックスポット支部『アナグラ』内部

「いや、いやいやいや」

肩口までで揃えられた黒髪で男モノの黒縁眼鏡をかけた少女、有栖レナは自室前に設置された自販機の前で一人、呟いていた。

自販機には、先日売り切れになった筈の『スーパーゲル状デロドロンドリンク』がちやつかり補充されていたのだ。

悪魔の復活である。

そしてその生贄として、他のドリンクの在庫が捧げられたのだ。

つまり、こうだ。

「これ以外売り切れは流石に悪意を感じる……」

真つ赤に光る『売切中』の文字を恨めしく見ながら、しかしレナの喉の渇きは進行す

るばかり。

時刻は昼前だが、実は彼女、朝から何も食べていないのだ。

実は美味しいのでは？ そんな考えが一瞬よぎってしまったレナは気が付けば手に

『スーパージェル状デロドロドリンク』の缶を握っていた。

元々有ったコインは何処かに消えてしまった。これも悪魔の所業だともいうのか。

「いや、イヴはこれ好物って言ってたし、意外と、実は見た目に反して美味しいとか……？」

これ以上抵抗しても仕方ない、と腹を括ったレナは、缶の蓋を開け、匂いや中身を確認する前に一気に喉に流し込んだ。

ここで読者諸君にはしっかりと説明しておかねばならないのだが、この『スーパージェル状デロドロドリンク』に対して、イヴ・ノイシュヴァンシュタインは一度として「これ美味しいから飲んでるんだよね」と言った事はただの一度もないのだ！

「まっずうううううう………ッ」

レナは めのまえが まっくらに なった！

【2】

レナが目を覚ましたのは、それから数十分後の事だった。

「うう……」

非常に吐き気がする。丁度いい硬さの枕に顔を埋め、もう一眠りしてから部屋を出ようと誓う。

「ちよつと」

不意に、頭上から女性の声がした。

部屋に他の誰かがいるのだろうか？

記憶を探る。そう言えば自分は、あの劇薬を摂取してぶっ倒れた筈だ。

ではこの声は、自分を部屋のベッドまで運び、ずっと看病してくれたのだろうか？

「意識が戻ったんなら、早くどいてくれると助かるのですが」

どいてくれると助かる？

つまり、ここは自分の部屋ではなく、彼女の部屋なのだろうか？

それだったら失礼だな。

それにしても寝心地の良い枕だな。支給品でないのなら、どこで仕入れたのか是非とも聞いてみたいものだ。

と、そこまで何とか思考を繋げる事に成功したレナは、ゆっくりと目を開けた。

「……」

視界いっぱい、肌色の双丘があった。

「……?」  
「……?」

「足が痺れそうなんですけど」

「はあ!」

双丘の正体がおっぱいで、枕の正体が太ももだと知ったレナは逃げる様に横に転んだ。

「いてっ!」

そして、そのまま地面へと落ちる。

ここはレナの部屋でも誰かの部屋でもなく、自販機の前だったのだ。

休憩用に設置していた長椅子の上で誰かに膝枕されていたのだと、ようやく自分の状況を察することが出来たレナ。

「あの、ありがとうござ……いっ!」

膝枕をしていたのはなんと、あのアリサ・イリーニチナ・アミエーラだった。

ギャラクシーエンジェル隊やスペースナイツが苦戦した空中のアラガミを一人で殲滅し、自分や兩宮リンドウを乗せたヘリを敵と誤認し攻撃し、己の命を預ける神機をポロポロにしても眉一つ動かさない、もう一人の『第二世代』。

「その調子だと、心配の必要はなさそうですね」

スカートのシワを伸ばしながら席を立ったアリサは、ため息をつきながら自販機の前へと向かう。

当然、『例のアレ』以外には『売切中』の呪いの言葉が浮かび上がっている。

「その飲み物はやめておけ！ 死ぬよ!!」

「は?」

レナの忠告を聞く前に、アリサは自販機にコインを投入し、ボタンを押していた。

中から取り出したのは『ヤシの実サイダー』だ。

「え?」

「ああ、これですか。ボタンの表示が故障してるだけで普通に買えますよ」

親切に教えてくれたアリサ・イリーニチナ・アミエーラさんはその後一瞥もくれずに自室のあるフロアへと消えていった。



「……マジかよお」

これじゃ無駄に彼女に貸しを作っただけではないか。と長椅子に座って真っ白に燃え尽きるレナだった。

【3】

あれからどれ程たっただろうか。

自販機の前で茫然としていて、エレベーターから現れた人物と目が合った。

テツカマンブレードことDボウイと、最近はその腰巾着ポジションが定着した蘭花<sup>ランフラワー</sup>・フランボワーズだった。

これに如月アキがセットになったトライアングルは、最近のアナグラの名物になりつつあった。

「……こんな所で何をしているんだ？」

「ああ、どうもDボウイさんに蘭花さん」

「うわっ、すっごい死にそうな顔。飲み過ぎ？」

「まだお酒飲める年じゃないです！ ……これですよ、これ」

そう言つてレナは、『スーパージェル状デロドロドリンク』の缶を二人に見せた。

気を牛なっている時に落とす筈だが、ジェル状故か中身はほとんど残っていた。加

え、時間経過で非常に温くなっている。

「これを飲んで気分を悪くして、その、アリサさんに介抱してもらってたんですが……」  
「ほーん」

良い事を聞いた、そんな顔をしながら蘭花は自販機に寄り、『スープパーゲル状デロドロンドリンク』を五本購入した。

「あの、話聞いてました?」

「ええー、私が飲む訳ないじゃない! 面白そうだからフェルテさん達に飲ませて嫌がらせしてくるわ! じゃあDボウイ様♡ また後でお会いしましょ♡♡♡」  
「お、おう……」

(格闘家としてのスキルを無駄に発揮し)五本の缶を両指で器用に挟んだ蘭花は、悪い顔をしながらエレベーターの方へと消えていった。

「……エンジェル隊の人って、昔からあんなのなんですか?」

「いや、俺もここに来る直前に会ったばかりだからな。なんとも言えない」

横、良いか? と聞かれたので移動してスペースを確保すると、Dボウイはレナのすぐ横に腰を下ろした。

「……ミユキは依然意識不明だが、とりあえず峠は越えたらしい」

「それは良かったですね!」

「ああ。……だが、この話をしたかった訳じゃない。あのゴッドイーター、アリスの事なんだが……」

一呼吸置いて、Dボウイは口を開いた。

「あの子は危険だ」

「……そうですね。誤射された事は今でも」

「いや、そうじゃないんだ。彼女の『目』だ」

「目、ですか……」

「……アレは、復讐に憑りつかれた目だ」

「……」

レナへと向けていた視線を逸らし、眼前の自販機を見つめるDボウイ。

しかし、瞳が見つめる先はずっと遠くに見えた。

「以前……いや、今でもそうだが、俺はラダムを憎んでいる。テツカマンを憎んでいる。連中を倒す為なら命を捨てる覚悟がある……だが、アキやノアル達、スペースナイツのメンバーや、テキサス支部にいた頃のゴッドイーターの仲間達と戦う中で、俺は『復讐』と『戦い』の違いを知ることが出来た。俺の目的はラダムの殲滅。……この手で父さんの仇を取る事だ。玉砕覚悟で挑んでいればラダムを倒せるだろうが、それだと志半ばで

倒れるかも知れない」

「……その話が、アリサに繋がるんですか？」

「今のアリサは、昔の俺だ。ただ目の前の仇を前に何も考えず暴れ回る、孤独だった頃の俺だ。そして、俺はその時に一度負けて、心が折れそうになった。……その時はアキに助けられてなんとか復帰できたんだ」

嗚呼、如月アキが言っていた「Dボウイの30分を貰っている」という意味不明な告白の正体はこれか。と心の中で納得したレナ。なんとなく、この話題には触れない方が良いと思ったのだ。

「だから、レナ。アリサを支えてやってほしい。今戦えているのは、心の芯が堅くなっているからだ。心が折れれば、一人では立ち直れない」

「……」

正直、有栖レナにとってアリサ・イリーニチナ・アミエーラの評価は高くなかった。

他のゴッドイーターも感じていたように「他支部から引き抜かれたエリートの新型」という訳で馬鹿にされていると思っていたからだ。『死神』と呼ばれたソーマの事をちゃんと評価できたのは、レジスタンスのアルカやバーナード軍曹とのやりとりを聞いていたからで、アリサとはまだ、ほとんど会話をした事もない。

だが、この男は。

テツカマンブレードという強大な力を持ちながら、復讐という、怒りの哀しみの戦いに身を投じているこの男だけは、一度の共闘と、彼女の『目』だけで心の『闇』を見抜いたのだ。

「本当なら、俺がその役を負うべきだとは、思うのだが……」

突如、Dボウイの歯切れが悪くなった。必死に言葉を探している様だ。

「こういうのは、苦手だな」

「何が苦手なんですか？」

「……喋るのが、だ」

Dボウイが口下手で、こんなに話すのは非常に珍しいという事をレナが知るのには、もう少し後の話である。

【4】

—『第97管理外世界地球』フェンリル極東ブラックスポット地区周辺『贖罪の街』—  
ブラックスポット内部には『贖罪の街』と呼ばれるエリアがある。

旧都心の一角だが、ビル群にはアラガミによって無残にも食い荒らされた『穴』が広がっていた。中央には巨大な教会があり、かつては『オルソラ教会』と呼ばれていたが、

アラガミ登場後は荒廃、今やその名前を憶えている者はほとんどいない。

その後、『アラガミを崇める集団』によって占拠され、誘拐された人間や信徒がアラガミによつて喰らい尽くされる事件から、ここは『贖罪の街』と呼ばれる様になったのだ。レナは現在、アリサと共に任務でこのエリアに来ていた。リンドウと三人の任務で、我らが上官殿はいつも通りの『重役出勤』という訳だ。

「……あの、さ。アリサ」

「なんですか」

赤いガトリング型の神機を片手に、アリサが露骨に嫌そうな顔をして見せた。空中で大立ち回りをしていた時の青い神機とデザインは同じだが、どうやら別物らしい。

一方のレナは、手数を重視したショートソード、アサルトの装備だった。彼女の手に馴染むベストな組み合わせは未だ見つかっていない。

「いやその、さつきはありがとう……」

「……別に。感謝されるような事はしていません」

「そ、そうかな？ いやあ、アリサの膝枕は寝心地良かったから、また今度頼もうかなーなんて、えへへ……」

「……ドン引きです」

「うっ……」

期待の『新型』二人。

だがその間の溝は、あまりにも深い。

「いやあ、すまんすまん！」

その後もレナがなんとかアリサとの仲を良くしようと言葉を選んでいると、後ろから間延びした男の声が聞こえた。

振り返ると、神機を肩に担いだリンドウがこちらに向かってきている。

「お、今日は新型二人とお仕事か。足を引っ張らない様に気を付けるんで、よろしく頼むわ！」

「旧型は、旧型なりの仕事をして頂ければいいと思います」

「……」

リンドウの場を和ませるジョークにも冷静に返すアリサに、レナは言葉も出ない。

「はっは！ まあ、期待に添えるように頑張ってみるさ」

しかし、そこは年長者にして場数を踏んだリンドウ。皮肉にも動じず、軽く笑い飛ばしながらアリサの肩に手を置いた。きつとソーマで慣れてるんだらうな、とレナが考えていた、

その時だ。

「キャアア！」

「！」

アリサが悲鳴を上げながら、後ずさったのだ。

急に触れられてビックリした……という類ではない。一瞬だが、明らかに尋常じゃない脅え方をしていたのだ。

「あーあ……随分と嫌われたもんだなあ」

「あ……あ、す、すみません！ なんでもありません……大丈夫です……」

なんとか取り繕うとするアリサだが、瞳孔は焦点が定まらず、手足も微妙に震えていた。

流星に新兵のレナでも「これはダメだな」とはつきり断言出来た。

「フツ、冗談だ……んー、そうだなあ……よしアリサ」

空を見上げながら、リンドウは続ける。

「混乱しちまった時はな、空を見るんだ。それで動物に似た雲を見つけてみる。落ち着くぞお……それまでここを動くな。これは命令だ。その後こつちに合流してくれ。いいな？」



「な、なんで私がそんなこと……!」

「いいから探せ。な?」

有無を言わさぬ圧力でアリサを黙らせるリンドウ。

一方のアリサは澁々ながら、空を見上げるのだった。

私も一緒に探した方が良いかな? とレナも空を見上げる。早速キツネに似た雲を見つけた。

「お前は良いんだよ、レナ。ほら、先に行くぞ」

「えっ? はっ、はい!」

「あいつの事なんだがな。どうも色々訳アリらしい」

エリアの索敵をしながら、リンドウはそう呟いた。

「アリサですか?」

「ああ。……まあこんなご時世、皆色んな悲劇を背負ってるっちゃあ、背負ってるんだが

……」

振り返ったリンドウと目が合う。いつになく真剣な表情だった。

「同じ新型のよしみだ。あの子の力になってやれ。いいな？」  
「……はい」

良かった、アリサを心配していたのはDボウイさんだけじゃなかったんだ。

そう思ったレナは安堵の息を吐く。そして、いつか皆で笑い合ってお喋り出来る時間が来るように祈った。

「うっし、じゃあ行くか！」

「はい！ ……所でリンドウさん」

「なんだ？」

「私にアリサを任せるのって、喋るのが苦手だからですか？」

「ん？ ー。じゃ、そういう事にしといてくれ！」

適当に返されてしまった。